

一 便器

木製大小二種但監房ニ廁圍ノ接續スルモノニハ此器ヲ用ヒス

一 小帚

草ノ種類ヲ用テ製作シテ軟ナルモノ

一 洗手盆

木製

第五章 衛生及死亡

第六十六條 監獄ハ常ニ清掃シ不潔ナラシメサルヲ要ス

監獄内ノ廁圍竝ニ便器ハ度敷ヲ定メテ掃除シ常ニ清潔ナラシムヘシ

第六十七條 病者ノ居室身體衣類臥具等ハ特ニ清潔ニ爲スヘシ

第六十八條 刑事被告人及定役ニ服セサル囚人ハ毎日一時以內監房外ニ於テ運動ヲ許ス

許ス

第六十九條 衣類臥具雜具其他ノ物品ハ種質ニ由リ時々熱湯ヲ用ヒテ之ヲ滌ヒ又ハ

大氣ニ晒シ臭氣ヲ去リ虫害ヲ防シヲ要ス但病者ノ物品ト混一シテ之ヲ晒洗スヘカ

ラス

第七十條 入浴ノ定度ハ毎年六月ヨリ九月迄ハ五日毎ニ一次以上十月ヨリ五月迄

ハ十日毎ニ一次以上トス

第七十一條 刑事被告人又ハ定役ニ服セサル囚人及拘留囚ノ鬚髮ハ不潔ナラサル様

梳理セシムヘシ但鬚髮ヲ剃刈センコトヲ請フ者アルトキハ典獄之ヲ許可スルコト

アルヘシ

第七十二條 髮ヲ短薙セサル者ノ監房ニハ木梳一箇ヲ備ヘ置クヘシ

第七十三條 刑事被告人ノ親屬故舊ヨリ滯留ノ爲メ其衣類ノ下付ヲ請フトキハ本人

ノ承諾ヲ得テ典獄之ヲ許可スルコトアルヘシ其密室監禁者ニ係ルトキハ當該裁判

官ノ允許ヲ經ヘキモノトス

第七十四條 傳染病流行ノ兆アルトキハ其豫防ヲ慎重ニスヘシ若シ在監人中傳染病

者アルトキハ直ニ隔離室ニ移シ其消毒ヲ嚴ニシ病性及感染ノ形狀ヲ詳悉シ典獄ヨ

リ所屬長官ニ報告シ且其旨ヲ市町村長及警察署ニ通知スヘシ

第七十五條 傳染病流行ノ際ハ飲食物ノ差入及購給ヲ停止スルコトヲ得

第七十六條 傳染病流行地ヲ發シ若クハ其地方ヲ經過シタル者新ニ入監スルトキハ

一週日以上他ノ者ト隔離シ其携有スル物品ハ消毒ヲ行フヘシ

第七十七條 死亡者又ハ刑死者アルトキハ其年月日時ヲ記シ典獄ヨリ親屬ニ通知ス

ヘシ

刑事被告人死亡シ又ハ囚人及懲治人ニシテ裁判所ノ訊問中ニ係ル者死亡シタルト

キハ之ヲ其裁判所ニ申報スヘシ

第七十八條 在監人病死シタルトキハ醫師ノ診案ニ據リ病症及其因由竝ニ死亡ノ年

月日時ヲ名籍簿ニ記載スヘシ若シ變死シタルトキハ醫師ノ檢案ニ據リ死亡ノ因由及其年月日場所死狀等ヲ名籍簿ニ詳記スヘシ

第七十九條 死者ノ親屬若クハ故舊ニ其遺骸ノ下付ヲ許シタルトキハ其者ヲシテ簿冊ニ署名捺印セシムヘシ

監署ニ於テ遺骸ヲ假葬スルトキハ棺ニ入テ之ヲ埋メ其上ニ面三寸長三尺五寸ニ過キサル氏名標ヲ建ツヘシ

第八十條 在監人ノ遺骸ハ假葬シタル後ト雖下付ヲ請フ者アルトキハ之ヲ許ス

第八十一條 在監人死亡シ監署ニ領置ノ貨物アルトキハ親屬ニ下付ス刑死者ノ貨物モ亦同シ

親屬遠地ニ在テ物品ヲ送付スルニ入費ヲ要スルモノハ其物品ヲ販賣シテ代價ヲ遞送スルコトヲ得但遞送費ハ親屬ノ自辨トス

第八十二條 假葬シタル死亡者刑死者ノ遺骸ニシテ滿三箇年ニ至ルモ引取人ナキトキハ更ニ合葬スルコトヲ得但合葬シタルトキハ其墓標ニ石ヲ用ユヘシ

第六章 書信及接見

第八十三條 在監人ヨリ發スル信書ハ書信紙ヲ用ヒシメ典獄之ヲ封緘遞送スルモノトス但郵便稅ハ自辨トス

第八十四條 官司ノ訊問ニ由テ發信ヲ要スルニ當リ郵便稅ヲ自辨スルコト能ハサルトキハ監獄費ヲ以テ支辨スヘシ

第八十五條 信書ヲ檢閱スルハ先ツ直行順讀シ次ニ逆讀斜讀又ハ橫讀シ不正不良ノ文意アルヤ否ヲ詳查スヘシ

第八十六條 在監人ニ接見セント請フ者アルトキハ典獄其氏名身分住所職業及緣由ヲ詳悉シタル上之ヲ許スモノトス

接見ノ時間ハ三十分時ヲ過クルヲ得ス但死刑ノ執行以前及集治監又ハ假留監ニ押送以前ニ係ル囚人ニハ特ニ一時間ノ接見ヲ許スコトヲ得

接見ヲ許シタル者若シ接見ヲ請ヒシ旨趣ニ違フ談話ヲ爲シタルカ又ハ姿貌其他形狀等ヲ以テ相通スルノ形跡アルトキハ之ヲ停止スヘシ

接見ノ際ハ在監人男子ニ係ルトキハ看守長看守立會女子ニ係ルトキハ看守長女監取締立會フヘシ

第八十七條 辨護人トノ接見ハ接見室ニ於テノ談話ニテ事實ヲ盡シ難キトキニ限り訊問所ニ於テ之ヲ爲サシムルコトヲ得

病囚トノ接見ハ危篤ノ際ニ限り病室ニ於テ之ヲ爲サシムルコトヲ得

第七章 差入品

第八十九條 刑事被告人ニ差入ルヘキ飲食物ハ酒及烟草ヲ除キ監獄内ニ於テ炊烹ヲ要セサルモノニシテ一日三回一人一食ノ量ニ限ル

第九十條 總テ差入品ハ看守長立會看守ニ於テ之ヲ検査シ毒氣酒氣又ハ包藏物其他通謀ノ媒介トナルモノナキヤ否ヲ精檢スヘシ但飲食物ノ検査ニハ醫師ヲシテ立會ハシムヘシ

第九十一條 検査ノ爲メ解縫シタル衣類臥具アルトキハ監獄ニ於テ之ヲ原形ニ復スヘシ

第九十二條 免幽閉ヲ受ケタル者親屬故舊ヨリ金錢衣服家具等ノ寄贈ヲ受ケタルトキハ其旨ヲ典獄ニ申告セシムヘシ

第八章 教誨

第九十三條 教誨ハ免役日又ハ日曜日午後又ハ平日罷役後又ハ休役間ニ於テ之ヲ行フヘシ

第九十四條 免役日及日曜日ノ教誨ハ教誨堂ニ於テシ休役間又ハ罷役後ノ教誨ハ被教誨者ノ居所ニ就キ之ヲ爲スモノトス

第九章 賞譽

第九十五條 監獄則ニ依リ賞譽セシ者ニ與フル賞表ニハ曲尺方二寸ノ淺葱色ノ布ヲ用ヒ賞譽セシ毎ニ之ヲ與ヘ上衣ノ左袖肩臂間ノ表面ニ縫著スルモノトス

第九十六條 賞表ヲ有スル者ニハ左ノ優遇ヲ爲スモノトス

一 第五十八條ニ定メタル衣類雜具ハ成ルヘシ良品ヲ貸與ス

二 書信ハ一箇月ニ二通二次之ヲ爲スコトヲ許ス

三 入浴ハ尋常囚人ニ先キタ、シムルコトアルヘシ

四 賞表二箇以上ヲ有スル者ニハ仍ホ作業ノ勞働稍輕キモノヲ課シ且飯米ノ割合ヲ十分ノ五ニ増加ス

五 賞表三箇以上ヲ有スル者ニハ仍ホ將來生計ノ爲メ作業ノ變換ヲ請ハシムルコトヲ得

六 賞表一箇ヲ得タル者ニハ監獄則第二十八條ニ定メタル外菜ヲ一週ニ一回其二箇ヲ得タル者ニハ二回其三箇以上ヲ得タル者ニハ三回増給ス但其價ハ一回一錢ニ過クルコトヲ得ス

第九十七條 囚人及懲治人左ニ掲ケタル所爲アルトキハ金二十五錢以下ヲ以テ之ヲ賞與スルコトヲ得但賞表ヲ與フルノ限ニ在ラス

一 在監人ノ逃走セントスル者ヲ密告シタルトキ

二 人命ヲ救援シ及逃走者ヲ捕得シタルトキ
 三 監獄ニ係ル水火風災ヲ防禦シタルトキ
 第九十八條 刑事被告人ニシテ前條ノ所爲アルトキハ之ヲ録シテ所屬長官ニ申報シ
 仍ホ當該裁判官ノ參考ニ供スヘシ

第十章 懲罰

第九十九條 減食受罰者ハ其罰期中別房ニ入レ置クヘシ
 第一百條 懲罰ヲ受ケタル者ノ居房ハ其罰期終ルモ仍ホ懲罰ヲ受ケサル者ト別異ス
 ヘシ但改悛ノ情著シキトキハ合居セシムルコトヲ得
 第一百一條 犯則者ニシテ事未タ發覺セサル前ニ於テ司獄官吏ニ自首シタルトキハ其
 懲罰ヲ全免又ハ減輕スルコトヲ得
 數犯俱發シタルトキハ一ノ重キニ從ヒ處罰スヘシ
 第一百二條 懲罰ニ處セラレタル者裁判事件ニテ出廷スルトキハ當日ニ限り其執行ヲ
 中止スヘシ但中止中經過セシ日數ハ懲罰期限ニ算入スヘカラス
 第一百三條 兩脚ニ鈇ヲ施ス者改悛ノ狀顯ハレ其施鈇期限ノ半ヲ經過シタルトキハ一
 脚ノ鈇ハ免除スルコトヲ得
 第一百四條 鈇ヲ施シタル者改悛ノ狀最モ顯著ニシテ其施鈇期限ノ四分ノ三ヲ經過シ

タルトキハ假ニ其鈇ヲ免除スルコトヲ得
 第一百五條 假ニ鈇ヲ免除シタル者其罰期内更ニ懲罰ヲ受クルトキハ直ニ之ヲ復シ其
 假免中經過セシ日數ハ施鈇期限ニ算入スヘカラス
 第一百六條 懲罰ニ處シタル者アルトキハ典獄若クハ看守長時々其動靜ヲ窺察シ教誨
 師ヲシテ之ヲ問ハシムヘシ

附則

此細則ニ於テ市町村長トアルモノ市町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ戶長之ニ當ル
 ヘシ

在監人動作時限表

月名	時限	起	床	監房掃除 並ニ喫飯	就	役	午	飯	罷	役	還	房	就	寢	服役時間合計
一月	前六時	一時間	前七時	十二時	午後三時	五時	迄	午後八時	七時三十分	時間					
二月	前六時	一時間	七時	十二時	四時	五時三十分	迄	八時	八時	時間					
三月	五時三十分	一時間	六時三十分	十二時	四時	六時	迄	八時	八時三十分	時間					
四月	五時	一時間	六時	十二時	四時三十分	六時三十分	迄	九時	九時三十分	時間					
五月	五時	一時間	六時	十二時	五時	七時	迄	九時	九時三十分	時間					

備考	十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月
一就役罷役及還房ノ時間ヲ除クノ外ハ囚人ニシテ服役セサル者懲治人及刑事被告人ニモ亦本表ヲ適用ス 一次事又ハ病者ノ看護ニ從事スル囚人並ニ病者ノ起床及就寝時間ハ本表ニ依ルノ限リニ在ラス	六時三十分	六時	五時三十分	五時	四時三十分	四時	三時
	一時間	一時間	一時間	一時間	一時間	一時間	一時間
	七時三十分	七時	六時三十分	六時	五時三十分	五時	四時
	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時	十二時
	三時三十分	四時	四時	四時三十分	五時	五時三十分	六時
	四時	四時三十分	五時	五時三十分	六時	七時	七時三十分
	八時	八時	八時	八時	九時	九時	九時
	七時	八時	八時三十分	九時	九時三十分	十時	十時三十分

●監獄則施行細則中所定ノ名籍、假出獄證票雛形並ニ
 特赦免幽閉出獄申渡及賞表授與式
 明治二十二年七月
 內務省訓令第三十三號
 應府縣 集治監 假留監
 監獄則施行細則第二條同第二十三條及刑法附則第三十九條ニ所定ノ名籍、假出獄證
 票ノ雛形並ニ特赦免幽閉假出獄ノ申渡及賞表授與式左ノ通相定ム

番號	典獄(檢印)	囚人名籍	主檢書記氏名印
出本籍地	何國郡市(區)町村產	某府縣郡市(區)町村番地住又ハ何某子弟妻女	
身留地	何國郡市(區)町村產	何某	
身留名	何某	某	
刑名及宣告ノ月日	何刑若若干年月日		
收監及滿期ノ年月日	何年月日何裁判所ニ於テ宣告		
犯由ノ大略	何年月日午後何時入監何年月日滿期		
身材	財物ヲ竊取シ或ハ人ヲ毆傷スル等犯罪ノ大略ヲ記ス若シ再三犯ナレハ往年何罪ヲ犯シ其裁判所ニ於テ何刑ニ處セラレ		
容貌	長何尺何寸何分肥瘠強弱		
音聲	面體眉毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑癩子癩瘡黑痣癩風天癩創癩ノ類及音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス		
營業及親屬	營業ノ種類及親屬ノ營業住所 父母兄弟及配偶者子孫ノ有無		
教育及宗門	文字ノ知否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス 何宗或ハ宗門不詳		
假出獄	何年月日假出獄或ハ免幽閉或ハ減等		
幽閉	何年月日滿期放免、赦免、他監押送、死亡、逃走		

要 摘	前項欄内ニ記入スヘカラサル事項假令ハ乳兒携帶者等ノ如キハ其乳兒ノ男女生年月及出監死亡等ヲ詳記スヘシ
番 號	典 獄 (檢印) 懲 治 人 名 籍 主檢 書記氏名印
本 籍 地 名	何國郡市(區)町村產
出 身 地 名	某府縣郡市(區)町村番地住又何某子弟妻女 身分 何 某 某年月生
生 年 月 日	何年月日某裁判所ニ於テ 若干年月日留置ノ宣告
入 場 日	何年月日午 前 後何時入場何年月日満期
入 場 由	犯由ノ大略及某裁判所
身 材	長何尺何寸何分肥瘠強弱
容 貌	而體肩毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑癩子癰疽惡瘡風天露創癩ノ類及音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス アハタ イホ コブ キク ロナ イツ アサキ ナアト
音 聲	住所及營業ノ種類 父母兄弟及配偶者ノ有無
教育及宗門	入場ノ時文字ノ知否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス 何宗或ハ宗門不詳

要 摘	病室ニアル者情狀ニ由リ親屬ニ交付スル等ハ此欄ニ詳記スヘシ
假 出 場	何年月日某家ニ放還、轉監、死亡、逃走
出 監 及 終 結	何年月日午 前 後何時入監
番 號	典 獄 (檢印) 刑 事 被 告 人 名 籍 主檢 書記氏名印
本 籍 地 名	何國郡市(區)町村產
出 身 地 名	某府縣郡市(區)町村番地住又ハ何某子弟妻女 身分 何 某 某年月生
生 年 月 日	何年月日午 前 後何時入監
入 場 日	何年月日午 前 後何時入監
入 場 由	何罪ヲ犯ス共犯者ノ有無前犯ノ有無
身 材	長何尺何寸何分肥瘠強弱
容 貌	而體肩毛耳目鼻口ノ形容面色ノ黑白四肢ノ姿態其他痘斑癩子癰疽惡瘡風天露創癩ノ類及音聲ノ高低ヲモ細緻ニ具載ス アハタ イホ コブ キク ロナ イツ アサキ ナアト
音 聲	營業ノ種類 父母兄弟及配偶者子孫ノ有無
教育及宗門	文字ノ知否或ハ讀書ヲナスヲ得或ハ善ク讀書ヲナス 何宗或ハ宗門不詳

裁判關係ノ事項	何年月日令狀變換故障上告審問度數
保釋	何年月日保釋者クハ貴付
出監及終結	何年月日放免者クハ刑ノ宣告執行又ハ他監押送、死亡、逃走
摘要	前項欄内ニ記入スヘカラサル事項假令ハ乳兒攜帶者等ノ如キハ其乳兒ノ男女生年月及出監死亡等ヲ詳記スヘシ

假出獄之證票

某府縣郡市(區)町村番地住又ハ何某子弟姪女

身分

何 某

某年月日生

身材
名籍ノ標本ニ倣
ヒ詳記スヘシ

容貌
上ニ同シ

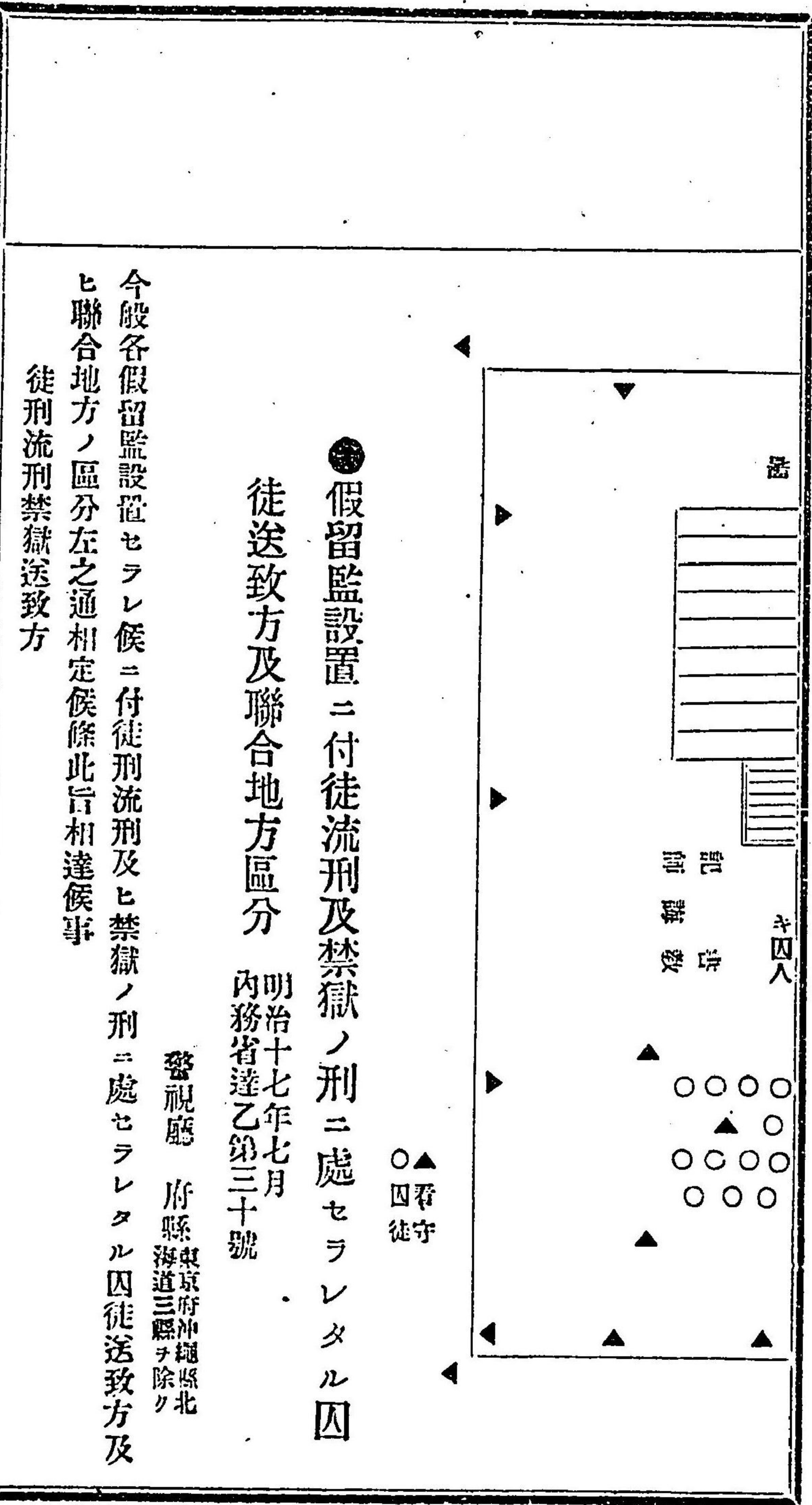
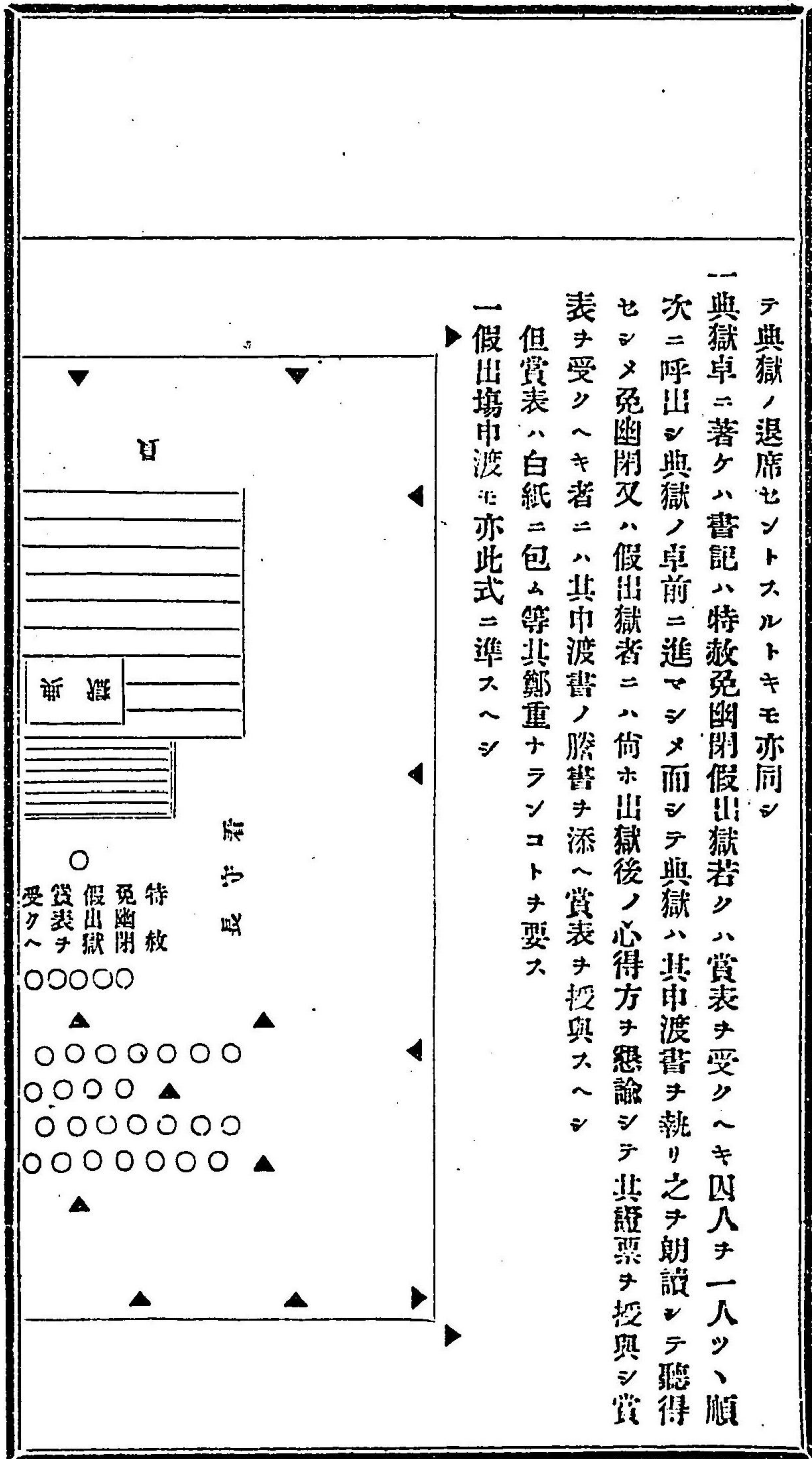
罪質犯數
刑名刑期
附加刑

何年月日某裁判所ニ於テ宣告ヲ受ケ	何年月日ヨリ執行何年月日滿期後期
何年月日間假出獄ヲ許ス	
一此者ハ假出獄ノ裁可アリタルヲ以テ何年月日出獄ヲ許シ何地ヲ通過シ居住スヘキ何地ノ警察署ニ約子何日迄ニ到着シテ此證書ノ檢閱ヲ受タル上住宅ヲ定ムヘキ旨申渡シタル事	
一此者ハ本刑期限内特別監視ニ付セラレタル事	
一此者假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯スコトアルトキハ直ニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入セラレサル事	
一此者發病其他ノ事變ニ因テ途中ニ滯留スルトキハ滯留地ノ警察官ヨリ其證書ヲ受ケ居住スヘキ地ノ警察署ニ到着ノ上之ヲ差出スヘキ旨申渡シタル事	
右ノ通心得サセ假出獄ノ證票ヲ與フル者也	
何年月日	典獄 某 印

特赦免幽閉假出獄ノ申渡及賞表授與式

- 一 式場ハ教誨堂又ハ衆囚ヲ整列セシムルニ足ルノ場所ヲ以テ之レニ充テ臨場官吏ノ席次及ヒ囚人ノ列次ハ左圖ノ如クスヘシ
- 一 但女囚ハ男囚ト同列セシメス其式場又ハ時日ヲ異ニスヘシ
- 一 典獄席ニ著クヤ看守ハ衆囚ニ號令(氣ヲツケ)シ之ヲシテ齊シク敬禮セシムヘシ式畢

テ典獄ノ退席セントスルトキモ亦同シ
 一典獄卓ニ著ケハ書記ハ特赦免幽閉假出獄若クハ賞表ヲ受クヘキ囚人チ一人ツ、順
 次ニ呼出シ典獄ノ卓前ニ進マシメ而シテ典獄ハ其中渡書ヲ執リ之ヲ朗讀シテ聽得
 セシメ免幽閉又ハ假出獄者ニハ尙ホ出獄後ノ心得方ヲ懇諭シテ其證票ヲ授與シ賞
 表ヲ受クヘキ者ニハ其中渡書ノ謄書ヲ添ヘ賞表ヲ授與スヘシ
 但賞表ハ白紙ニ包ム等其鄭重ナランコトヲ要ス
 一假出場申渡モ亦此式ニ準スヘシ



●假留監設置ニ付徒流刑及禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚
 徒送致方及聯合地方區分

明治十七年七月
 内務省達乙第三十號

警視廳 府縣東京府神戶縣北
 海道三縣ヲ除ク

今般各假留監設置セラレ候ニ付徒流刑及ヒ禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒送致方及
 ヒ聯合地方ノ區分左之通相定候條此旨相達候事
 徒流刑禁獄送致方

●兵庫假留監
聯合地方山口
愛媛ノ二縣ヲ
三池假留監聯
合地方ニ改ム
明治二十年

●兵庫假留監
聯合地方中奈
瓦縣、香川縣
追加
明治二十年
一月
內務省訓令
第三號
警視廳府縣(北
海道廳府縣)除ク
假留監

一 徒刑流刑禁獄ノ刑ニ處セラレタル囚徒裁判確定セシ時ハ之ヲ管束セシ地方ヨリ警察遞傳ヲ以テ直ニ其聯合假留監ヘ押送スヘシ
但本監ノ都合ニ依リ典獄ヨリ其聯合地方ヘ囚徒押送ノ延期ヲ通知スルコトアルヘシ

聯合地方區分

一 兵庫假留監	京都府	大阪府	兵庫縣	滋賀縣	石川縣	富山縣	福井縣
	鳥根縣	鳥取縣	岡山縣	廣島縣	山口縣	和歌山縣	德島縣
	高知縣	愛媛縣					
一 東京假留監	警視廳	神奈川縣	崎玉縣	群馬縣	千葉縣	茨城縣	栃木縣
	三重縣	愛知縣	靜岡縣	山梨縣	岐阜縣	長野縣	
	一 宮城假留監	新潟縣	福島縣	宮城縣	岩手縣	青森縣	秋田縣
	一 三池假留監	長崎縣	福岡縣	大分縣	佐賀縣	熊本縣	宮崎縣
							鹿兒島縣

●東京假留監
聯合地方中改
定
明治二十一年
九月
內務省訓令
第十八號
警視廳府縣(北
海道廳府縣)除ク
假留監

●聯合地方中改
定
明治二十一年
九月
內務省訓令
第十八號
警視廳府縣(北
海道廳府縣)除ク
假留監

●舊刑法ニテ禁獄懲役ニ處セラレ地方監獄ニ拘禁ノ囚徒假留監ヘ押送方
明治十九年六月
內務省訓令第十一號

警視廳 府縣(東京府沖繩縣)除ク

舊刑法ニテ國事犯禁獄懲役五年以上及ヒ常事犯禁獄終身ニ處セラレタル囚徒地方監獄ニ拘禁ノ者ハ十七年當省乙第二十號達ニ準シ直ニ假留監ヘ押送スヘシ

●集治監假留監拘禁ノ囚徒死亡者届出ニ及ハス變死ハ

從前ノ通 明治十九年二月
內務省達乙第一號

其監拘禁ノ囚徒死亡スルモノアルトキハ其都度届出來リシ處自今以後其儀ニ及ハス但變死ニ係ル者ハ從前ノ通届出ヘシ

●集治監ニ入ルヘキ囚徒並其費用區分
明治十四年二月
布告第十七號

集治監ニ入ルヘキ囚徒並其費用ノ區分當分ノ内左之通相定メ本年七月ヨリ施行候條此旨布告候事

第一條 集治監ニ入ルヘキ囚徒ハ刑期終身ノ者及ヒ國事犯刑期五年以上ノ者トス其費用ニ集治監ニ押送ノ費用共ニ國庫ヨリ支給スヘシ

第二條 府縣獄ニ入ルヘキ囚徒ニシテ集治監ニ在ル者ノ費用ハ其刑ヲ宣告セシ地方ノ地方税ヲ以テ支辨スヘシ

●集治監ニ入ルヘキ囚徒ニシテ府縣獄ニ在ル者ノ費用

トシテ交付ノ金額編入方 明治二十一年九月 內務省訓令第十九號

警視廳 府縣沖繩縣ヲ除ク

明治十七年本省乙第二十九號達ニ據リ集治監ニ入ルヘキ囚徒ニシテ府縣獄ニ在ル者ノ費用トシテ交付スル金額ハ府縣會ノ議決ヲ經地方税ノ收入支出ニ編入スルコトヲ得

●根室縣釧路國川上郡熊牛村ヘ已決監ヲ設置シ釧路集

治監ト稱ス 明治十八年九月 (太政官)達第五十二號

官省院廳 府縣

根室縣管下釧路國川上郡熊牛村ヘ已決監ヲ設置シ釧路集治監ト名稱候條此旨相達候事

●監獄則第二十四條ニ依リ處分シタル貨物ノ收支精算

書調製報告方 明治二十二年八月 內務省訓令第三十五號

廳 府 縣

集治監 假留監

監獄則第二十四條ニ依リ處分シタル貨物ハ毎年四月三十日限り前一週年度ノ收支精算書ヲ調製シ當省ヘ報告スヘシ

●懲役終身又ハ徒刑ニ處セラレタル女囚ハ當分地方監

獄ニ留置シ其費用ハ舊ニ依ル 明治十八年九月 內務省達番外

警視廳 府縣東京府沖繩縣北 海道三縣ヲ除ク

懲役終身ノ刑又ハ徒刑ニ處セラレタル女囚ハ當分地方監獄ニ留置シ其囚徒ニ係ル一切ノ費用ハ從前ノ通國庫費ヨリ支辨候條此旨相達候事

●刑死者及獄死者ノ遺骸ヲ官公立醫學校病院ニ於テ解

剖スルヲ得

明治十八年七月
內務省達甲第二十五號

應府縣

監獄則ニ揭クル所ノ刑死者及死亡者ニシテ親屬故舊其遺骸ノ下付ヲ請フ者ナキトキハ官公立醫學校若クハ病院ニ於テ該遺骸ヲ解剖實驗ノ用ニ供スルヲ得此旨相達候事但屍體剖觀ノ後ハ縫理シテ原體ニ復シ不都合無之様取計ハシムヘシ

●看守及監獄備人分掌例

明治二十二年六月
內務省訓令第二十九號

應府縣 集治監 假留監

看守及監獄備人ノ分掌例左ノ通改ム

第一章 看守ノ職務

第一條 晝夜交替シテ警守受持場ヲ巡警スヘシ

第二條 看守長若クハ看守副長ノ立會ヲ受ケ在監人員ノ點檢ヲ爲スヘシ

第三條 看守長若クハ看守副長ノ立會ヲ受ケ監房ヲ檢査シ其常置器具等ヲ點檢スヘシ

第四條 在監人ノ鄉貫、氏名、年齢、罪質、刑名等ヲ記憶スルハ勿論日々ノ行狀ヲ視

察シ其事項ヲ手帳ニ詳記シ看守長若クハ看守副長ノ檢閱ニ供スヘシ

第五條 在監人ノ役業ヲ督勵シ其科程ノ了否ヲ點檢スヘシ

第六條 服役者ニシテ其作業ニ關セサル他事ヲ交談シ又ハ器具等ヲ交換シ或ハ漫リ

ニ部外ノ工場ニ到ルカ如キ所爲ナカラシムヘシ

第七條 新ニ入監スルモノアルトキハ其身體衣服ヲ搜檢スヘシ其入監後監房ヲ出入

スルトキモ亦同シ

第八條 監門ヲ守リ其出入者ニ注目シ漫リニ通行セシムヘカラス

第九條 監房ノ開閉ヲ掌リ其鎖否ヲ點檢スヘシ

第十條 工場、器械庫其他ニアル物件排列ノ整否ヲ注視シ器具等ノ散失ナキ様嚴密取締ヲ爲スヘシ

第十一條 炊場、浴場等ヲ巡視シ火災ノ虞ナキ様嚴密取締ヲ爲スヘシ

第十二條 獄則違犯者又ハ應禁物藏匿等アルコトヲ認知シタルトキハ嚴密ニ取糺シ其證據ヲ明舉シテ看守長若クハ看守副長ニ申告スヘシ

第十三條 密室監禁者及屏禁、閑室、獨愼者ノ動靜ハ特ニ之ヲ視察シ其狀況ヲ看守長

若クハ看守副長ニ具申スヘシ

第十四條 戒具ハ日々點檢シ不時ノ使用ニ支障ナカラシムヘシ

第十五條 食物ノ配與、獄衣其他給與品及差入品等ノ受渡ニ立會ヒ不正不良ノ所爲
ナカラシムヘシ

第十六條 在監人ノ接見及教誨ノ席ニ立會ヒ其舉動ヲ注視スヘシ

第十七條 病者ノ醫治ニ立會ヒ其舉動ヲ注視スヘシ

第十八條 在監人中ニ急發病者アルトキハ直ニ看守長若クハ看守副長ニ申告スヘシ

第十九條 水火風震等非常ノ變災ニ際シテハ最モ取締ヲ嚴ニシ在監人ヲ避ケシムル
ノ準備ヲナシ上官ノ指揮ヲ待ツヘシ

但事急遽ニ出テ上官ノ指揮ヲ待ツノ違ナキトキハ救護ノ爲メ一時房外ニ出スコ
トヲ得

第二十條 反獄逃走等アルトキハ非常ノ合圖ヲ爲シ直ニ鎮壓捕獲ノ手配ヲナスヘシ
此場合ニハ直ニ上官ニ報告スヘシ

但事急遽ニ出テ欄キ難キトキハ直ニ追跡スルコトヲ得

第二十一條 在監人ノ頭髮、身體、衣服ニ注目シ若シ垢染破損セシ等ノモノアルトキ
ハ直ニ看守長若クハ看守副長ニ申告スヘシ

第二十二條 監房、炊場、浴場、厠間、工場等ノ掃除ニ立會ヒ不潔ナカラシムヘシ

第二十三條 押丁、授業手ノ在監人ニ接スル状態ヲ視察シ若シ相狂ル、モノアルトキ

認ムルトキハ直ニ看守長若クハ看守副長ニ申告スヘシ

第二十四條 監内ノ異狀ヲ見聞スルトキハ直ニ看守長若クハ看守副長ニ申告スヘシ
押丁ヨリ報告又ハ在監人等ヨリ密告ヲ得タルトキモ亦同シ

第二十五條 在監人ノ押送ヲ掌リ其押送中ハ在監人ノ路人ト聲語シ又ハ之ヲ侮笑シ
又ハ歩行ヲ紊シテ行人ヲ妨クル等不都合ノ所爲ナカラシムヘシ

第二十六條 在監人ヨリ願訴ヲ爲サントスル者アルトキハ直ニ看守長若クハ看守副
長ニ申告スヘシ若シ封書ヲ出ストキハ直ニ看守長若クハ看守副長ニ致スヘシ

第二十七條 文字ヲ書スル能ハサル在監者ノ爲メニ願訴ノ書面ヲ代書シ且之ヲ本人
ニ讀ミ聽スヘシ

第二章 教誨師ノ職務

第二十八條 典獄ノ指揮ヲ受ケ専ラ已決囚及懲治人ノ教誨ニ從事シ又懲治人及十六
歳未滿ノ已決囚ニ讀書、算術、習字等ノ學科ヲ教授スヘキモノトス

第二十九條 新ニ入監スル已決囚若クハ懲治人アルカ又ハ賞表ヲ受ケヘキ者アルト
キハ其者ニ對シ特ニ教誨ヲ爲スヘシ其出獄スルトキモ亦同シ

第三十條 在監人ノ起居、動靜、勤怠及其行狀ノ良否ハ時々其狀ヲ具シテ典獄ニ報
告スヘシ

第三十一條 監房ヲ巡迴シ修身齊家ノ講談ヲ爲シ又揭示條項等ヲ解説スヘシ
第三十二條 懲治人ノ就學、年月、卒業ノ科目、學業ノ優劣等ヲ簿冊ヘ記載シ典獄ノ檢閲ニ供スヘシ

第三十三條 在監人ノ賞罰ニ付典獄ヨリ意見ヲ問フコトアルトキハ之ニ報答スヘシ
第三十四條 獄則處分ヲ受ケ受罰中ノ者アルトキハ其居所ニ就キ教誨ヲ加ヘ又其狀況ヲ視察シテ典獄ニ報告スヘシ

第三十五條 受罰者ニシテ改悛ノ狀顯著ナルヲ認知セシトキハ典獄ニ具狀スヘシ
第三十六條 授學上及教誨上ニ要スル書籍、器具等ヲ管理シ散失破損セサル様注意スヘシ

第三十七條 特赦、免幽閉、假出獄、假出塲、假免懲罰ノ言渡又ハ賞表授與式ニ立會フヘシ

第三章 醫師ノ職務

第三十八號 典獄ノ指揮ヲ受ケ在監人ノ疾病ヲ診察治療シ醫治ニ關スル一切ノ事務ニ從事スヘキモノトス

第三十九條 常ニ監内一般ノ衛生事項ニ注目シ其方法ヲ考究シテ意見ヲ典獄ニ具申スヘシ若シ衛生上ニ關スル事項ニ付典獄ヨリ諮問ヲ受ケタルトキハ之ヲ詳查シテ

報答スヘシ

第四十條 在監人ヲ診斷シタルトキハ其氏名、病性、徵候、治否、及處方ヲ調治簿ニ詳記シ典獄ノ檢閲ニ供スヘシ

第四十一條 已決囚新ニ入監スルトキハ其體質ヲ検査シ其體質ノ強弱等ヲ典獄ニ具申スヘシ

第四十二條 各監房及工場等ヲ巡迴シ在監人ノ飲食物及衣類等ヲ注視シテ衛生上ニ害アリト認ムル事アルトキハ改良ノ意見ヲ典獄ニ具申スヘシ

第四十三條 流行病及傳染病發生ノ兆アルカ又ハ該患者アルトキハ直ニ典獄ニ稟議シ其病症及感染ノ形狀ヲ詳悉シ豫防消毒ヲ施行スヘシ

第四十四條 減食又ハ閤室等ノ懲罰ニ處セラルヘキ者ヲ診察シ其身體ニ妨ケナキヤ否ヤヲ詳記シ其證明書ヲ典獄ニ差出スヘシ

第四十五條 在監人中ニ急發病者アルノ報知ヲ受ケタルトキハ直ニ其居所ニ就キ診察治療スヘシ

第四十六條 服役スヘキ囚徒ノ疾病快復スルトキハ其堪ユヘキ役業ノ種類ヲ指定シ典獄ニ具申スヘシ

第四十七條 患者攝生ノ爲メ特別ノ衣食物品等ヲ要スルトキハ事由ヲ詳記シ典獄ニ

具申スヘシ

第四十八條 施療上危険ノ恐アル手術ヲ施ストキハ其旨ヲ典獄ニ具申シテ許可ヲ受ケルニシ

第四十九條 患者癡篤疾若クハ危篤ニ至レハ診斷書ニ處方箋ヲ添ヘ之ヲ典獄ニ差出スヘシ

第五十條 在監人中病死又ハ變死シタルモノアルトキハ典獄並ニ看守長ト俱ニ驗屍シ其死亡ノ原由及病症、死狀等ヲ詳記シ死亡證書又ハ檢案書ヲ添ヘ之ヲ典獄ニ差出スヘシ

第五十一條 患者若シ死後ニ解剖ヲ請フモノアルトキハ速ニ之ヲ典獄ニ具申スヘシ

第五十二條 在監人中作病ヲ構ヘ診察ヲ乞フモノアルトキハ看守長若クハ看守副長ニ申告スヘシ

第五十三條 差入飲食物アルトキハ之ヲ検査シ其可否ヲ典獄ニ具申スヘシ

第五十四條 看病者ノ適否ヲ監視シ意見アルトキハ直ニ典獄ニ具申スヘシ

第五十五條 醫療器械並ニ書籍等ヲ管理シ散失破損セサル様注意スヘシ

第五十六條 患者ノ日表及月表ヲ製シ典獄ノ檢閱ニ供スヘシ

第五十七條 看守押丁志願者ノ體格ヲ検査スヘシ

第四章 女監取締ノ職務

第五十八條 看守長ノ指揮ヲ受ケ女監ノ戒護其他婦女ノ取締ニ關スル一切ノ事務ニ從事スルモノトス

第五十九條 看守ノ職務第一條乃至第二十四條及第二十六條第二十七條ハ本職ニモ之ヲ適用ス

第六十條 病監ニ於テ治療中ノ未決患者ヲ看護スヘシ

第六十一條 作業器械及素品製品ノ受渡ヲ爲スヘシ

第五章 押丁ノ職務

第六十二條 看守ノ助手トナリ新ニ入監スル者ノ身體衣服ヲ搜檢スヘシ入監後監房ヲ出入スルトキモ亦同シ

第六十三條 看守ノ指揮ヲ受ケ監外押發ノ在監人ニ戒具ヲ施シ又ハ控繩戒護ニ從事スヘシ

第六十四條 死刑者アルトキハ上官ノ指揮ヲ受ケ其執行方ニ從事スヘシ

第六十五條 看守ノ助手トナリ監房ノ検査ヲ爲スヘシ

第六十六條 看守ノ指揮ヲ受ケ監門及監房扉ノ開閉ヲ爲スヘシ

第六十七條 看守ノ立會ヒテ受ケ食物ノ配與、獄衣其他給與品及差入品ノ受渡ヲ爲

スヘシ

第六十八條 上官ノ指揮ヲ受ケ病監ニ於テ治療中ノ未決患者ヲ看護スヘシ

第六十九條 上官ノ指揮ヲ受ケ刑死者及死亡者ノ死體取片付方ニ従事スヘシ

第七十條 看守ノ立會ヒテ受ケ作業器械及素品製品ノ受渡ヲナスヘシ

第七十一條 工場内其他ニアル諸器具其他ノ物件ヲ排列シ看守ノ點檢ニ供スヘシ

第七十二條 獄具及消防具等ヲ監守ニ毀損紛亂セサル様注意スヘシ

第七十三條 在監人ノ頭髮身體衣服ニ注目シ若シ垢染破損セシ等ノモノアルトキハ

直ニ看守ニ申告スヘシ

第七十四條 獄則違犯者又ハ應禁物藏匿等アルト認知シタルトキハ直ニ看守ニ申告

スヘシ

第七十五條 監内ニ異狀アルトキハ直ニ之ヲ上官ニ申告スヘシ在監人ヨリ密告ヲ得

タルトキモ亦同シ

第七十六條 在監人ノ行狀ノ良否ヲ認知シタルトキハ之ヲ手帖ニ記シ置キ看守ニ中

告スヘシ

第七十七條 炊場浴場等ニ於テハ火災ノ虞ナキ様注意スヘシ

第六章 授業者ノ職務

第七十八條 工業掛員ノ指揮ヲ受ケ農業工業等ヲ教授スヘシ

第七十九條 受業囚ヲ督勵シ科程ノ了否ヲ注視スヘシ

第八十條 授業上ニ要スル器械雜具ヲ整理シ取扱上及保存方ニ注意スヘシ

第八十一條 役業ノ科程及工錢料定上ニ付テハ意見ヲ工業掛ニ開申スヘシ

第八十二條 役業ノ廢設及改良方ニ付意見アルトキハ之ヲ典獄ニ具申スヘシ

第八十三條 役業ヲ怠ルカ又ハ指導ニ從ハサルモノアルトキハ速ニ看守長ニ申告ス

ヘシ

第八十四條 器具ノ新調及修繕ヲ要スルトキハ其買入又ハ修繕方ヲ工業掛ニ申立ツ

ヘシ

第八十五條 毎月受業囚ノ勤怠及技藝ノ優劣進否等ヲ調査シ之ヲ看守長ニ具申スヘ

シ

●司獄官吏傭人設置程度

明治十四年三月 內務省達乙第十六號

警視廳 府縣 東京府
集治監 ヲ除ク

今般第十四號第十五號ヲ以テ司獄官吏名稱被定候ニ付該官吏及ヒ傭人ノ儀ハ別紙程

●明治十九年勅令
第四十二號警視廳
官制第四類七七九
丁參看

度ニ照シ設置候儀ト心得ヘシ此旨相達候事

(別紙)

司獄官吏備人設置程度

判任官 在監人二百人以上五名ヲ置ク以上ハ百五十人毎ニ一名ヲ増ス

看守 在官人十五人ニ一名ヲ置ク

教誨師 人員俸金適宜

醫師 人員俸金適宜

授業手 人員俸金適宜

押丁 在監人十人ニ一名ヲ置キ俸金ハ八圓以下ヲ以テ月給又ハ日給トナス

女監取締 行狀善良ニシテ四十歳以上若クハ司獄官吏ノ婦女ヲ選ミ在監人二十人ニ一名ヲ置キ俸金ハ十五圓以下ヲ以テ月給又ハ日給トナス

●處刑宣告後犯人ヲ司獄官ヘ護送ノ際宣告書ノ謄本送

達方

明治十五年三月
司法省達丙第八號

大審院 裁判所

警視廳 府縣東京府
府縣ナ除ク

處刑宣告ノ後犯人ヲ司獄官ヘ護送セシムル際ニ於テハ監獄則ニ從ヒ檢察官ヨリ右宣告書ノ謄本ヲ司獄官ヘ送達スル義ト心得ヘシ此旨相達候事

●監獄新築改築又ハ監房建設ノトキノ外監獄ニ係ル建物ハ稟請ヲ要セス處分ノ後報告方

明治二十二年六月
內務省訓令第二十七號

廳府縣

監獄新築改築又ハ監房建設ノトキヲ除クノ外自今監獄ニ係ル建物ハ二十一年十二月當省訓令第二十六號ニ掲ケサルモノト雖モ稟請ヲ要セス處分シテ後其位置ノ略圖ヲ具シ一箇年取纏メ翌年一月三十一日迄ニ報告スヘシ

●在監人工錢給與手續

明治二十一年十月
內務省訓令第二十二號

警視廳 府縣沖繩縣
府縣ナ除ク

監獄則ニヨリ在監人ニ給與スル工錢ハ自今府縣會ノ議決ヲ經監獄費內譯ニ給與錢ノ目ヲ設ケテ之ヲ支拂ヒ其工錢ハ監獄費雜入ニ編入スルコトヲ得

●囚人護送手續

明治十五年二月
(太政官)達第十號

內務省開拓使 警視廳 府縣東京府ヲ除ク
 明治六年^{十一月}第三百九十一號并同十年^{七月}第四十九號ヲ以テ囚人護送規則及ヒ遞傳方
 相達置候處今般更ニ別冊ノ通囚人護送遞傳方改正シ本年七月一日ヨリ施行候條從前
 達中矛盾ノ廉ハ同日限廢止ス此旨相達候事

(別冊)

囚人護送手續

- 第一條 甲廳ヨリ乙廳又ハ集治監へ送移スル囚人ハ囚籍及ヒ處刑宣告書所持ノ物品
 ナ併セ沿道警察本分署ニ於テ遞傳護送スヘシ
 但一府縣管内本支監獄ノ間ニ護送スル囚人モ其距離拾里以外ニ至ルモノハ本文
 ニ準スルヲ得
- 第二條 新タニ就捕セシ犯罪人及諸令狀ニ據リ引致スル刑事被告人又ハ脫走ノ軍人
 軍屬ノ遞傳護送ヲ要スル者モ前條ノ手續ニ準スヘシ
 但入監後糾問等ノ爲メ所在ノ法衙ニ往復スルハ本條ノ限ニ在ラス
- 第三條 第一條第二條ノ護送ニ付スル囚人ノ員數及發出日時ハ其當該官吏ヨリ前以
 テ沿道警察本分署へ遞報スヘシ
- 第四條 護送囚人ノ數ハ一行拾名以下トス護送警吏及繩取ノ人員ハ適宜タルヘシ

但便利海路ニヨルトキハ適宜囚人ヲ増加スルヲ得

- 第五條 遞傳護送ハ日出ヨリ日没マテヲ限トス
- 第六條 警察本分署ニ於テハ護送囚人ノ郷貫氏名刑名又ハ犯罪見込書ノ要領及著發
 日時ヲ記載シ置クヘシ
- 第七條 護送ノ囚人ハ沿道警察本分署ニ宿セシムヘシ若シ支障アルトキハ該地戶長
 ニ照會シ宿所ヲ定メ適宜取締ヲナスヘシ
- 第八條 護送途中囚人病發スルトキハ沿道警察本分署ニ付シ治療スヘシ若シ死去ス
 ルトキハ該地戶長ニ埋葬ヲ囑シ引取人アル者醫師ニ死去證書ヲ作ラシメ戶長及護送
 警吏連印シ書類物品ヲ併セ送達スヘキ衙署ニ遞付シ仍ホ發出衙署ニ報知スヘシ
- 第九條 護送途中囚人逃亡スルトキハ先ツ緝捕方ヲ最寄警察本分署ニ報告シ仍ホ發
 出衙署及ヒ送達スヘキ衙署へ報告スヘシ
 但第八條及本文ノ手續ヲ爲スタメ他囚護送ヲ遲緩ス可カラス若シ速ニ手續ヲ了
 シ難キ場合ハ最寄警察本分署ノ助力ヲ請フコトヲ得
- 第十條 遞傳護送スル警察官吏ノ旅費ハ都テ沿道地方ノ警察費ヲ以テ支辨スヘシ
 但繩取ノ履給ハ第十一條第十二條ノ區別ニ依リ囚人ニ屬スル費用中ニテ支辨ス
 ヘシ

第十一條 第一條ニ掲クル囚徒ニ屬スル護送中ノ費用ハ明治十四年第十七號布告ニ依リ區分シ集治監ニ送ルトキハ沿道府縣ノ仕拂ニ立テ其他ハ出發府縣ノ監獄費ヨリ支拂フヘシ

第十二條 第二條ニ掲クル各犯人ニ屬スル護送中ノ費用ハ沿道地方警察費ヲ以テ支辨スヘシ

●明治十五年太政官達第六十八號ヲ以テ第十三條ハ改正セラレ

第十三條 護送囚人死没シ引取人ナキモ其所持金錢物品埋葬費ニ足ルモノアル者及陸軍隊付下士卒ノ海軍下士卒ノ埋葬費ハ第十一條第十二條支辨ノ限ニアラス尤其費額ハ都テ拾圓以内タルヘシ但下士卒ノ分ハ追テ陸軍省海軍省ヨリ各自ニ拂戻スヘシ

第十四條 遞傳ニ係ル囚人犯罪人ノ賄費額ハ警察本分署ニ於テハ都テ拘留人ノ例ニ依ルヘシ他ニ宿泊セシムルトキハ一宿二賄臥具點燈手數料ヲ合ヒテ金貳拾五錢以下一晝食金七錢以下藥價診察料等ハ實費支辨スヘシ

●處刑者並囚徒死亡ノ者届出方

明治十九年二月 內務省達甲第四號

廳府縣東京府ヲ除ク

徒刑流刑禁獄ノ刑ニ處セラレタル者アルトキハ監獄則第五十八條ニ依リ申報シ及ヒ該囚徒拘禁中死亡セルモノアルトキハ其都度届出來リシ處自今以後總テ其儀ニ及ハ

○第四十五類 戶籍

○戶籍

●戶籍法ヲ定ム

明治四年四月 布告第七十號

今般府藩縣一般戶籍ノ法別紙ノ通改正被 仰出候條管内普ク布告致シ可申事 戶籍法

戶數人員ヲ詳ニシテ撰ナラサシムルハ政務ノ最モ先シ重スル所ナリ夫レ全國人民ノ保護ハ大政ノ本務ナルコト素ヨリ云フヲ待タス然ルニ其保護スヘキ人民ヲ詳ニセズ何ヲ以テ其保護スヘキコトヲ施スヲ得ンヤ是レ政府戶籍ヲ詳カニセサルヘカヲサル儀ナリ又人民ノ各安康ヲ得テ其生ヲ遂ル所以ノ者ハ政府保護ノ庇蔭ニヨラサルハナシ去レハ其籍ヲ逃レ其數ニ漏ル、モノハ其保護ヲ受サル理ニテ自ラ國民ノ外タルニ近シ是レ人民戶籍ヲ納メサルヲ得サルノ儀ナリ中古以來各方民治趣ヲ異ニセシヨリ僅ニ東西ヲ隔ツレハ忽チ情態ヲ殊ニシ聊カ遠近アレハ即チ志行ヲ同フセス隨テ戶籍ノ法モ終ニ錯雜ノ弊ヲ免レス或ハ此籍ヲ逃レ或ハ彼籍ヲ欺キ去就心ニ任セ往來規ニヨラス沿襲ノ習人々自ラ度外ニ附スルニ至ル故ニ今般全國總体ノ戶籍法ヲ定メラ

ル、ヲ以テ普ク上下ノ通義ヲ辨ヘ宜シク粗畧ノコトナカルヘシ

第一則 戶籍舊習ノ錯雜アル所以ハ族屬ヲ分ツテ之ヲ編製シ地ニ就テ之ヲ收メサル

ヲ以テ遺漏ノ事アリト雖モ之ヲ檢査スルノ便ヲ得サルニ依レリ故ニ此度編製ノ法

臣民一般華族士族卒嗣官僧侶其住居ノ地ニ就テ之ヲ收メ專ラ遺スナキヲ旨トス故ニ各

地方土地ノ便宜ニ隨ヒ豫メ區畫ヲ定メ每區戶長並ニ副ヲ置キ長並ニ副ヲシテ其區

內戶數人員生死出入等ヲ詳カニスル事ヲ掌ラシムヘシ

第二則 戶長ハ必ス長ト副トニ限ルヘカラス時宜ニヨリ長副數名アルモ妨ケナシトス

但戶長ノ務ハ是迄各處ニ於テ莊屋名主年寄觸頭ト唱ル者等ニ掌ラシムルモ又ハ

別人ヲ用ユルモ妨ケナシ

第三則 凡ソ區畫ヲ定ムル營ハ一府一郡ヲ分テ何區或ハ何十區トシ其一區ヲ定ムル

ハ四五町モシクハ七八村ヲ組合スヘシ然レ共其小ナルモノハ數十二及ヒ大ナルモ

ハ一二ニ止ルモ都テ其時宜ト便利トニ任セ妨ケナシ

但急ニ區畫ヲ定メ難キ所ハ飯ニ便宜ニ從ヒ一村一町ニテ檢査セシムルモ妨ケナシ

官ノ學校兵隊屯所等又ハ大社大寺ノ別ニ區域ヲナセシムルモ其官司ノ吏員其社寺ノ

執事等ニテ戶長ノ事ヲ扱ハシムルモ妨ケナシ

●十一年(太政官)第
第十七號布告ニ依
リ消滅

●同上

●五年(太政官)第
百十七號ニ依リ消
滅

●十一年(太政官)
第十七號布告ニ依
リ消滅

●六年七月(太政
官)布告第二百四
十二號ヲ以テ四則
五則二十則二十三
則二十六ケ年月籍
改停止

●十九年内務省令
第十九號ヲ參看

●十年(太政官)第
二十號達ヲ以テ製
表差出ヲ止ム

●五年(太政官)第
四號布告參看(本
法次丁)

第四則 戶長其區內ノ戶籍ヲ式ノ如ク之ヲ集メ二通ヲ清書シ更ニ第一號ト第二號ノ
式ノ如ク其區內總計ノ戶籍表ト職分表トヲ作り其集ル所ノ籍ハ戶長ニ備ヘ清書
二通リト共ニ其支配所ニ差出スヘシ支配所之ヲ其應ニ差出シ其應之ヲ第五號第
六號ノ式ノ如ク其管內總計ノ戶籍表ト職分表トヲ作り戶籍一通ハ其應ニ備ヘ置キ
一通ニ廳印ヲ押シ表ト共ニ六箇年目ニ改メ大政官ヘ差出スヘシ

支配所トハ管轄内廣遠
テ出張所トイフノ類ナリ

但支配所ナキ所ハ直ニ其應ニ出スヘシ以下準之

第五則 編製ハ爾後六箇年目ヲ以テ改ムヘシト雖モ其間ノ出生死去出入等ハ必其時
々戶長ニ屆ケ戶長ハ其應ニ屆ケ出テ

支配所アルモノハ支配所ニ
屆支配所ヨリ其應ニ屆ケ

等本書ヘ加除シ每年十一月中戶籍表ヲ改メ十二月中太政官ヘ差出スヘシ

ノチ加ヘ死者ト出ル
モノヲ除ク類チ云フ

第六則 管轄廳ニ於テ戶籍專任ノ吏員ヲ置キ其事ニ擔當セシムヘシ若シ遺漏粗畧ノ
事アルニ於テハ其吏員並ニ戶長

戶長ナキ大社ノ責タルヘシ

第七則 區內ノ順序ヲ明ニスルハ番號ヲ用ユヘシ故ニ每區ニ官私ノ差別ナク臣民一

般番號ヲ定メ其住所ヲ記スニ都テ何番屋敷ト記シ編製ノ順序モ其號數ヲ以テ定ル
ヲ要ス

但區内ノ屋敷亡所トナリ又ハ一戸ヲ割テ二戸トシ二戸ヲ合セテ一戸トナスコト
アルトモ其由ヲ戶籍ニ記シ番號ハ其儘据置六ケ年目ニ至リ改ムヘシ

第八則 各地方貫屬或ハ平民等事務アリテ全戸他ノ管轄廳ニ引移ルモノハ其由ヲ本
貫管轄廳へ願出其應ヨリノ送リヲ取り在留地ノ廳ニ届ケ出其所ノ籍ニ編入スヘシ
又故アリテ元ノ管轄廳へ引移ル時ハ之ヲ戻スコト其始メ出ル時ノ如クシ其所ノ籍
ニ編入スヘシ

但當時全戸既ニ引移リシ官員ノ如キハ其官省ヨリ名前書ヲ在留地ノ廳ニ達シ夫
ヲ證トシ其住居ノ地區ニテ其籍ヲ収ムヘシ又本貫管轄廳ニハ其由ヲ其官省ヨリ
達シ其廳之ヲ聽キ其所ノ籍ヲ除クヘシ尤此ヨリ後引移ルモノハ此限ニアラス送
籍スルコト本條ノ如クスヘシ第八則 若シ全戸引移ルト雖トモ情故アリテ本貫管
轄廳ノ籍ニアルヲ願フモノハ其地寄留ノ部ニ入レ情願ニ任スルモ妨ナシ

第九則 他ノ管轄地ニ引移ル時元ノ廳ヨリ送籍セルニハ其當人ヨリ元住所ノ組合並
ニ戶長ニ其由ヲ届ケ長副連印シ其廳ニ届ケ其廳之ヲ受ケ其廳聽知ルノ證ヲ押當
人ニ渡スヘシ

同上

●五年(大政官)第
四號布告參看

同上

同上

●四年(大政官)第
三百六十五號布告
ナリテ鑑札廢止五
年(大政官)第四號
參看(何丁)

但管轄内廣遠ノ場所別ニ支配所アラハ其支配所ニテ之ヲ達セシメ往來困却ノ弊
ナカラシムルヲ要ス

第十則 他ノ管轄所ヨリ此管轄所ニ入籍スル時ハ元ノ管轄所ノ證ヲ持參シ其入ル所
ノ戶長ニ其由ヲ通シ戶長其相違ナキヲ糾シ其所ノ籍ニ入ルヘシ而シテ戶長其元廳
ノ証ト其入籍セシ事ノ由ヲ時々其廳ニ届クヘシ

第十一則 管轄内甲ノ區ヨリ乙ノ區ニ移ルカ如キモ第八則ヨリ第十則迄ノ例ヲ見合
スヘシ但管轄内ナルヲ以テ送籍ハ戶長ヨリ之ヲ致シ入籍ノ上其入ル所ノ戶長ヨリ
其廳ニ届ケ其廳之ヲ聽キ即チ本書ニ加除スヘシ加除ハ甲ノ籍ヲ除キ乙
ノ籍ニ入ルノ類ヲ云フ

但其區ニ於テ時々加除スルハ亡論ナルヘシ
第十二則 全戸引移ラス又ハ一時公私ノ用ニテ寄留スルモノハ其本貫管轄廳ノ鑑札
ヲ持參シ寄留地戶長ニ通シ其寄留スル所ノ廳ニ名前書ヲ添ヘ鑑札ヲ差出シ其廳之
ヲ受ケ即チ其廳ノ鑑札ト引替遣スヘシ鑑札ニハ當人名住所職分ヲ記スヘシ而シテ其者歸國
名住所職分ヲ變スル時ハ引替ヘシ

但管轄内廣遠ノ場所別ニ支配所アラハ其支配所ニテ引替シムヘシ故ニ鑑札ハ豫
メ支配所へモ備ヘ置クヲ要ス

同上

●四年第三百六十
五號ヲ以テ鑑札廢
止ニ依リ第十四則
十五則第十九則消
滅

鑑札引替ノ節其戶長官ノ學校兵隊屯所ノ如キニ差出ス名前書ニハ官員ハ當人兵隊ハ其役場大社大寺ハ執事隊長證印ハ其役場大社大寺ハ執事自餘ハ戶主備主請人等證印スルヲ要ス名前届書式ハ第三號見合スヘシ

第十三則 修行又ハ奉公ノ爲メ他國ニ寄留スルモノモ第十二則ノ例タルヘシ第八則但書ト見合スヘシ

但是迄修行又ハ奉公イタク寄留スル者及事務アリテ寄留スルモノ其本貫ノ應ニ届ケ鑑札請取第十二則ノ例ヲ以テ引替ヘシ若シ道路懸隔リ當人ヨリ本貫ノ應ニ届ケ難キ事故アルモノハ其寄留地ノ應ニ於テ戶主備主請人等ノ證書ヲ出サシメ其應ヨリ直ニ其本貫ノ應ニ掛合鑑札受取ヘシ但自今以後ハ此例ニアラス

第十四則 凡ソ旅行スルモノ官員ハ其官省等ノ鑑札ヲ所持シ自餘ハ臣民一般其管轄應ノ鑑札ヲ所持スヘシ寄留ノモノハ其所持故ニ旅行ヲ以テ渡世トスルモノ、如キハ急速ノ便ヲ得ル爲メ豫メ其鑑札ヲ申受置モ妨ケナシトス 第十二則但書ノ通所置シ急速ノ便ヲ得ルヘシ

但其管轄應ノ鑑札ニハ當人名住所ト職分ヲ記スヘシ名住所及職分ヲ變セシ時ハ右鑑札ヲ引替ヘシ

●五年正月十日大
藏省達ヲ以テ隱遯
掛廢止

●八年(太政官)第
二十一號達參看

●七年(太政官)第
七十四號布告參看

●六年(太政官)第
二百四十二號ヲ以
テ六ヶ年目改テ止

第十五則 驛遞旅宿ニ於テハ其鑑札ヲ認メ之ヲ宿帳ニ記シ止宿セシムヘシ此證據ナキモノハ止宿セシムヘカラス

第十六則 宿帳ハ七日目毎ニ驛遞ハ其驛出張驛遞掛ノ改テ受自餘ハ其戶長ヘ出シ改テ受クヘシ旅籠屋ニ限ラス都テ逗留三日以上ハ其戶長ニ届ケ人民輻湊スル三都府ノ如キハ其時々月長ヨリ其應ニ届シ九十日以上ハ寄留トシ第十二則ノ手續ヲナスヘシ旅人病氣又ハ異變ノ節速ニ届ケ出ルハ勿論ナリ

第十七則 各地ニ出張スル官員出入トモ其管轄應ヘ届ケ其出張先ノ地方應ヘモ届クヘシ

但戶籍改ノ節滞留スルモノハ其所持ノ鑑札ニ突合セ検査スヘシ

但地方ノ應懸隔リシ場所一時出張シ或ハ急遽ノ事務等アルハ其手續ナキコトアルヘシ

第十八則 僧侶ハ其得度ノ地ヲ以テ本貫トシ他寺ニ轉住スル時ハ送籍シ行脚遍參スルモノ寄留地ニ於テ鑑札引替ル事第十二則ノ例タルヘシ

第十九則 鑑札ヲ所持シテ出奔死亡シ或ハ刑ニ處セラレ歸國セサルモノハ其所ノ官司ヨリ其由ヲ本貫ノ應ニ達シ鑑札ヲ送り還スヘシ

第二十則 六箇年目毎ニ戶籍ヲ改ムルニ當リテ其戶籍取集メシ上ハ日限ヲ定メ其區

同上

同上

々ニ於テ長并副區内一戸毎ニ其差出ス處ノ戸籍ト現在ノ人員ニ突合セ相違ナキヲ
點檢スルヲ以テ法トスヘシ
寄留ノ者ハ會テ届ケ出シ名前書ヲ以テ人員及所持ノ鑑札ニ突合セ相違ナキヲ證ス
ルヲ以テ法トスヘシ
凡テ寄留ノモノハ戸籍改メ前第十二則第十三氏神ノ守札モ其時檢査スヘシ
則ノ例ニ從ヒ鑑札ヲ受テ名前書ヲ差出置ヘシ

但其土地ノモノニテ其土地ニ修行又ハ奉公シテ他家ニアルモノハ戸籍改メ日限
ニハ歸宅シテ改メ受クヘシモシ體ナル證據アリテ其日限ニ歸宅シ難キモノハ其
證據ヲ以テ証トスルモ不得已ヘシ

第二十一則 凡ソ戸籍ヲ檢査スルハ遺漏アルヘカラス又重複スヘカラスニツ者ノ弊
アレハ檢査ノ要ヲ失フ尤モ甚シトイフヘシ故ニ戸長ヲ設ケ地ニ就テ戸籍ヲ修ムル
ハ遺漏ノ弊ヲ防ク所トイヘトモ其戸籍ヲ出入スルニ當リテ出入ハ他ノ管轄内ヲ出此管轄
入ル類 深ク注意セサレハ又重複ノ弊ヲ免ル能ハス故ニ六箇年目毎ニ戸籍ヲ改正ス
ルニ當リ其戸籍ヲ檢査スルノ日ハ天下府藩縣一般二月一日ヨリ五月十五日ヲ以テ
終ルヲ法トスヘシ此間凡
百日

第二十二則 六箇年目毎ニ二月一日ヨリ五月十五日迄凡百日ノ間ハ戸籍ノ出入ヲ止

同上

●十年(太政官)第
二十號達ヲ以テ戸
籍表差出ヲ止ム

ムヘシ但不得止事故アルニ由リ其人ハ移轉セシメ他ノ所ニ行カシムト雖モ戸籍ノ
調ハ其本住所ノ應ニテ之ヲ取集ムヘシ此百日ノ間一般ノ戸籍調終ルヲ待テ五月
十六日ヨリ送籍入籍ノ事ヲ所置スヘシ
但戸籍檢査ノ日ニ當リテ二月一日ヨリ五月十日不得止移轉セシモノハ送籍入籍ノ時月
十六日ハ必ス其由ト其月日ト本書ニ書顯スヘシ
第二十三則 六箇年目毎ニ五月十六日迄ニ戸籍檢査既ニ終リ其應ニ於テ六月中第四
則ノ例ノ如ク其管轄内總計ノ戸籍表ヲ作り第五號式本書共ニ七月中太政官ヘ差出ス
ヘシ第四則ト見
合スヘシ

但一紙ハ其應ニ留置毎年出ス所ノ表ノ基トスヘシ

第二十四則 寄留者ノ届書ハ其寄留スル支配所ニテ支配所ナキ其時々之ヲ記録シ寄留

表ヲ第七號式ノ如ク製シ出入人員増減ヲ隔月檢査シテ其應ニ出シ其應之ヲ受ケ每
年十二月太政官ヘ差出スヘシ

但支配所アルハ某支配所ト表ノ左傍ニ記スヘシ

第二十五則 三都府ハ人民幅濶ノ地ナルヲ以テ寄留表ハ他ノ藩縣ニ拘ラス隔月檢査

ノ時々即チ太政官へ差出スヘシ

第二十六則 民産調ノ如キハ一般ノ御布告アル可シト雖モ此迄地方官ニテ戶籍中家

産等書載サセ來リシハ其儘出スヘシ

第二十七則 戶籍表ノ用紙ハ厚紙ヲ用ヒ戶籍ノ用紙ハ美濃紙ノ寸法ヲ準トシ公用ノ

野紙ヲ用ユヘシ戶長ト其應ヘ收ムル分ハ其土地求メ易キ適宜ノ品ヲ用ユヘシ故ニ

每區戶長ハ本書分ノ公用野紙ヲ其應ヨリ下ケ渡スヘシ

第二十八則 各地ノ戶籍一例ナルヲ要スレハ字ノ細大行ノ高低ハ其記事ヲ標別スル

爲メナルヲ以テ能ク注意シ成丈ケ細字ニ記スルヲ要ス

第二十九則 此迄厄介ト號セシモノ或ハ縁故アリテ養育スルモノ等ハ其族屬ト續柄

ヲ肩書ニシ其事由ヲ其名前ノ上ニ記スルコト式ノ如クスヘシ

第三十則 華族等ノ從僕其邸内ニ住居シテ一戶ヲナセルモノハ式ノ如ク其主人ノ

次ニ記シ社中寺内ニアルモノ此例ニ準スヘシ

第三十一則 凡ソ僧尼ハミナ式ニ依テ其本貫得度ノ年月及ヒ其所ヲ記シ院内受職ノ

外ハ皆弟子ヲ以テ記スヘシ

第三十二則 穢多非人等平民ト戶籍ヲ同フセサルモノ、如キハ其最寄ノ區ニテ其戶

長ハ名前書ヲ出サセ、年、齡、廢、疾、等、ヲ、認、ム、ヘシ 其人員男女ヲ分チ戶籍表ニ書入レ差出シ應ニテモ

同上

●七年第八號第七
十四號布告ニ依リ
消滅

●第四百四十八第
四百四十九ニ依リ
消滅

●五年(太政官)第
四號十年同第二十
四號十六年内務省
乙達第四十三號達ノ
沿革アリテ十九年
丙達省令第二十
二號及同訓令第二十
二號ニ依リ第三號書
式ノ外以下諸表消滅

●五年十月大藏省
第百四十六號ヲ以
テ改ム
●五年布告第百十
七號ニ依リ消滅

戶籍表ニ入ルコト式ノ如クスヘシ
但生死出入其最寄戶長ニテ取扱寄留旅行ノ規則等平民同様ノ例ニ從ヒ名前書ヲ
六箇年目ニ出サシムルコト戶籍ノ如クスヘシ
第三十三則 都テ書式ハ臣民トモ体裁一ナレハ彼此相通シ參用シテ妨ナシ
(書式及表式)略ス

●戶籍法中心得方及改正

明治五年正月
布告第四號

府縣へ

戶籍法中心得方區々相成候箇條並改正ノ廉左ノ通ニ候條本書ニ照準シ取捨可致事

戶籍編制ノ事

戶籍編制ハ來申年正月晦日現在ノ人員ヲ根據トシ同二月一日ヨリ凡百日ノ間ハ右人
員檢査ノ日限ナレハ右日限中ノ増減ハ翌年正月ノ取調ニ因テ改ムヘキ事

死者屆方期限ノ事

死者埋葬所ニ於テ記録屆方ノ儀毎年十二月中迄ノ分翌年二月中ニ大藏省へ可差出事

戶長副給料ノ事

戶長副給料並入費ハ凡テ下方ヨリ取立テ相當支給可致事

番號ノ事

番號ハ地所ニ就テ之ヲ數フ然レトモ戶數點檢ノ爲メ戶毎ニ番號ヲ貼スルハ地方ノ便宜ニ任ス可キ事

送籍證ノ事

凡送籍スル者華士族卒僧尼舊神官ハ戶長へ申立管轄廳ノ證ヲ受ケ平民ハ戶長副連印ノ證ヲ可與事

但平民ノ出入臣民ノ出產死去等前月分取集ノ翌月副戶長ヨリ其廳へ可相屆事

囚獄及徒流人ノ事

囚獄人及ヒ徒流人等其管轄内戶籍アル者ハ戶籍表へ載セ他管轄内ノ者ハ寄留表中ニ書載ス可キ事

總計表並屆期限ノ事

戶籍及ヒ職分寄留總計並表共別紙雛形ノ通改正相成候事

但來申年ハ戶籍共七月中屆出爾後ハ一箇年分翌正月中取調二月ニ至可屆出事

寄留者ノ事

凡寄留スル者ノ屆書ハ官員神官華士族卒僧尼舊神官ハ當人兵隊ハ隊長平民ハ戶主傭主請人ノ内ニテ證印シ且寄留ノ地ニ於テ一戶ヲナセシ者ハ其管下ノ者同様屆書へ屋

●五年布告第二十九號六年(太政官)第三十五號第七百八十七號七年第八號布告第十一年第十七號布告第十一年(太政官)第二十號達ニ依リ改ム

●十年(太政官)第二十號達ニ依リ中止

●同上

●五年布告第二十九號六年(太政官)第三十五號第七百八十七號七年第八號布告第十一年第十七號布告第十一年(太政官)第二十號達ニ依リ改ム

九年内務省令第十號ヲ以テ届出方ヲ定ム

敷番號ヲ記シ其區戶長へ届ケシムヘシ戶長ハ總體ノ屆書ヲ集メ式ノ如ク寄留總計ヲ作り其廳へ出シ其廳之ヲ受ケ寄留表へ書載ス可キ事

戶籍總計書式

某府第何區戶籍總計

何郡 何町 何町

合何箇村町

戶數 何軒

内 家持 何軒 借家 何軒

社 何十

寺 何十

華族何人同家族何人内

士族何人同家族何人内

卒 何人同家族何人内

僧 何人同家族何人内

舊神官何人同家族何人内

尼 何人 同弟子 何人

平民何人同家族何人内

男 何人 女 何人 男 何人 女 何人 男 何人 女 何人 男 何人 女 何人 男 何人 女 何人 男 何人 女 何人 男 何人 女 何人

同弟子 何人

人員總計		內	男何人	女何人
十四以下	何人	十五以上	何人	何人
二十一以上	何人	四十以上	何人	何人
六十以上	何人	十五以上	何人	何人
十四以下	何人	八十以上	何人	何人
四十以上	何人	十五以上	何人	何人
內				
癱疾	何人	出生	何人	何人
囚獄	何人	流刑	何人	何人
徒刑	何人			
死亡	何人			
右之通相違無之候				
年號于支月				
第何區戶長	氏	名	印	

職分總計書式		○	
某府第何區職分總計		何郡	何町
官員	何人	何町	何村
兵隊	何人	何町	何村
皇學	何人	何町	何村
英學	何人	何町	何村
兵學	何人	何町	何村
武術	何人	何町	何村
筆學	何人	何町	何村
工	何人	何町	何村
雜業	何人	何町	何村
人員總計			
神官	何人	何町	何村
從者	何人	何町	何村
支那學	何人	何町	何村
佛學	何人	何町	何村
醫術	何人	何町	何村
算術	何人	何町	何村
農	何人	何町	何村
商	何人	何町	何村
雇人	何人	何町	何村
合何箇村町			
同副	氏	名	印
第四十五類 戶籍			

農	工	商	雜業	雇人	修行人	囚獄	徒刑	死亡
男	女	男	女	男	女	男	女	男
何	何	何	何	何	何	何	何	何
人	人	人	人	人	人	人	人	人

同家族	同家族	同家族	同家族	同家族	出生	流刑
男	女	男	女	男	女	男
何	何	何	何	何	何	何
人	人	人	人	人	人	人

右之通相違無之候也
 年號于支月

(表略ス)

第何區戶長 氏名印
 同副 氏名印

● 戶籍取扱手續 明治十九年十月 內務省令第二十二號

戶籍取扱手續左ノ通相定ム
 戶籍 取扱手續

第一條 戶籍ハ戶籍用紙ヲ以テ之ヲ造リ各戶ヲ別葉ニ登記シ一町村毎ニ帳簿ニ編製スヘシ但便宜ニ因リ一町村ヲ數冊ニ分綴シ又ハ數町村ヲ一冊ニ合綴スルコトヲ得

第二條 戶籍簿ハ副本ヲ造リ郡役所ニ納メ置クヘシ區長ニ於テ戶籍ヲ取扱フトキハ之ヲ管轄廳ニ納メ置クヘシ

第三條 若シ登記ノ事項多クシテ欄内ニ餘白ナキトキハ用紙ヲ以テ其欄上ニ掛紙シ之ニ登記スヘシ但本紙ト掛紙トノ續目ニハ官印ヲ捺スヘシ

第四條 戶籍ハ字畫ヲ明瞭ニ記載シ濫ニ添削スルコトヲ得ス若シ錯誤脫漏ニ依リ添削スルトキハ之ニ認印ヲ捺シ且其剛ルヘキモノハ朱線ヲ畫シ原文ヲ存スヘシ

第五條 戶籍簿ノ改製ヲ要スルトキハ管轄廳ノ許可ヲ受ケテ之ヲ爲スヘシ

第六條 戶籍簿燒亡紛失シタルトキハ郡役所又ハ管轄廳ニ納メ置キタル副本ニ據リ編製スヘシ

第七條 戸籍簿ノ改製又ハ編製ヲ爲シタルトキハ郡長又ハ管轄廳ニ差出シ其検査ヲ受クヘシ但改製ニ係ル原戸籍簿ハ少クモ五十年間之ヲ保存スヘシ

登記

第八條 戸籍ニ關スル届書ヲ受領シタルトキハ先ツ届出ノ事項及届出期限アルモノハ其事項ノ年月日並届出ノ年月日届出期限ナキモノハ其届出ノ年月日ヲ登記目録ニ記入スヘシ但本籍地外ニ在ル者ニ係ル事項ニシテ届出期限アルモノハ届書發送及受領ノ年月日ヲモ之ニ記入スヘシ

第九條 登記目録ハ左ノ三種ニ分テ毎年一種毎ニ之ヲ編製スヘシ但一種中ニ部門ヲ設ケ之ヲ分綴スルモ妨ナシ

一加籍目録

一除籍目録

一異動目録

第十條 第八條ノ手續ヲ了リタルトキハ直ニ戸籍ニ届出ノ事項及届出期限アルモノハ其事項ノ年月日届出期限ナキモノハ届出ノ年月日ヲ登記シ届書ニハ受領ノ年月日及登記濟ノ旨ヲ記入スヘシ

第十一條 戸籍ニ入ル者アルトキハ其戸籍ノ末ニ登記スヘシ戸籍ヲ除ク者アルトキ

ハ其事項ヲ朱ニテ登記シ且其氏名ニ朱線ヲ畫スヘシ

第十二條 全戸入籍スル者アルトキハ直ニ戸籍簿ニ編入スヘシ

第十三條 全戸除籍スル者アルトキハ朱ニテ登記シ其戸籍ニ朱線ヲ畫シ便宜之ヲ除籍簿ニ移スヘシ

第十四條 戸主ニ代替アルトキ家族ハ總テ新戸主ノ續柄ヲ以テ戸籍ヲ改寫スヘシ但

舊紙ハ官印ヲ以テ新紙ト割印シタル上除籍簿ニ移シ綴ツヘシ

第十五條 戸籍ニ登記シ諸届ニ記入シタルトキハ總テ之ニ認印ヲ捺スヘシ又諸届ハ

一箇月分ヲ類集分綴シ翌月中ニ郡役所區役所ハ管轄廳ニニ送付スヘシ但郡役所又ハ管轄廳ニ

於テハ戸籍簿ヲ改製スル時マテ之ヲ保存スヘシ

送籍入籍

第十六條 送籍ヲ請求スル者アルトキハ戸籍川紙ヲ以テ送籍狀ヲ作り直ニ入籍地ノ

戸長區長ハニ發送シ且其送籍ノ事項及發送ノ年月日ヲ登記目録ニ記入スヘシ

第十七條 人別ノ送籍狀ニハ其人別ニ關シ戸籍ニ登記シタル事項及戸主ノ氏名身分

住所ヲ記載スヘシ

第十八條 全戸ノ送籍狀ニハ戸籍ニ登記シタル事項ヲ遺漏ナク記載スヘシ

第十九條 入籍ヲ届出ルトキハ原籍地戸長區長ハヨリ送達シタル送籍狀ト照查シ入籍

ノ手續ヲ爲シ五日以内ニ入籍報知書ヲ原籍地戸長へ發送スヘシ原籍地戸長ニ於テ之ヲ受領シタルトキハ其受領ノ年月日ヲ登記目錄送籍狀發送年月日ノ下ニ記入シ直ニ右入籍ノ日ヲ以テ除籍スヘシ

寄留

第二十條 他府縣又ハ他郡區ヨリ寄留シタルノ届出アルトキハ入寄留簿ニ登記スヘシ其登記ハ總テ戶籍ノ例ニ依ル

第二十一條 入寄留簿ハ左ノ二種ニ分テ一種毎ニ之ヲ編製シ且一種中ニ一世帯ヲ爲ス者ト然ラサル者トヲ區別編製スヘシ但一世帯ヲ爲サ、ル者ハ一帳簿ニ列記スルモ妨ケナシ

- 一 他府縣人入寄留簿
- 一 他郡區人入寄留簿

第二十二條 寄留地ヲ去リタルノ届出アルトキハ朱ニテ記入シ其入寄留人名ニ朱線ヲ畫シ其別葉ヲ爲スモノハ便宜之ヲ除帳簿ニ移スヘシ

第二十三條 他府縣又ハ他郡區へ寄留シタルノ届書到達シタルトキハ出寄留簿ニ列記スヘシ

第二十四條 出寄留者復歸シタルノ届出アルトキハ朱ニテ記入シ其人名ニ朱線ヲ畫

スヘシ

戶籍用紙雜形第一

此欄内ニハ住所ヲ記ス事項アルトキハ此欄内ニ記ス		轉籍移居絶家廢家ノ事項アルトキハ此欄内ニ記ス		此欄内ニハ身分ヲ記ス身分變換アリタルトキハ此欄内ニ記ス	
此欄内ニハ年月日及事項ヲ記ス以下同シ		此欄内ニハ父母ノ名及長ニ男女タルコト又ハ夫ノ名ヲ記ス以下同シ		此欄内ニハ主ノ氏名ヲ記ス氏名ノ變換アリタルトキハ此欄内ニ記ス	
此欄内ニハ前戸主ヲ記ス		此欄内ニハ生年月日ヲ記ス以下同シ		此欄内ニハ本人ノ名ヲ記ス以下同シ	
此欄内ニハ戸主ノ氏名ヲ記ス		此欄内ニハ主ノ氏名ヲ記ス		此欄内ニハ本人ノ名ヲ記ス	
此欄内ニハ主ノ氏名ヲ記ス		此欄内ニハ主ノ氏名ヲ記ス		此欄内ニハ本人ノ名ヲ記ス	
此欄内ニハ主ノ氏名ヲ記ス		此欄内ニハ主ノ氏名ヲ記ス		此欄内ニハ本人ノ名ヲ記ス	
此欄内ニハ主ノ氏名ヲ記ス		此欄内ニハ主ノ氏名ヲ記ス		此欄内ニハ本人ノ名ヲ記ス	
此欄内ニハ主ノ氏名ヲ記ス		此欄内ニハ主ノ氏名ヲ記ス		此欄内ニハ本人ノ名ヲ記ス	
此欄内ニハ主ノ氏名ヲ記ス		此欄内ニハ主ノ氏名ヲ記ス		此欄内ニハ本人ノ名ヲ記ス	
此欄内ニハ主ノ氏名ヲ記ス		此欄内ニハ主ノ氏名ヲ記ス		此欄内ニハ本人ノ名ヲ記ス	

●管轄廳又ハ郡役所ニ納ムル戶籍簿副本及諸屆書取扱

方 明治十九年十月
内務省訓令第二十一號

北海道廳 府縣

省令第二十二條戶籍取扱手續第二條第十五條ニ依リ管轄廳又ハ郡役所ニ納ムル所ノ戶籍簿副本及諸屆ハ之ヲ保存スルニ止メ加除異動ヲ登記スルニ及ハス又寄留ニ關スル屆書ハ管轄廳又ハ郡役所ニ送付スルニ及ハサル儀ト心得ヘシ

●戶籍登記書式 明治十九年十月
内務省訓令第二十號

北海道廳 府縣

戶籍登記書式等別冊ノ通相定候條此式ヲ比準參酌シ其當ニ適セシムヘク尤戶籍簿及副本調製ノ儀ハ管轄廳ニ於テ時期ヲ見計ヒ漸次着手セシムル儀ト心得ヘシ

(別冊)

戶籍登記書式第一

書式中△印ハ朱字又ハ朱線

何年何月何日何十何番地ニ移ル		△印	
何縣何郡何村何番地		△印	
△何年何月何日何府何區何町何番地ニ轉籍		△印	
何年何月何日相續		何年何月何日願濟改名	
何年何月何日何縣何郡何村平民氏名ニ女入籍ス		△印	
何年何月何日何府何區何町士族氏名長女入籍ス		△印	
何年何月何日願濟廢嫡		△印	

前戶主	亡父氏名
△印	△印
士族	何年何月何日華族ニ列セラル
△印	△印
長男	亡父名長男
△印	△印
復姓號	△氏
△印	△印
新名	何年何月何日生
△印	△印
亡父名妻	何年何月何日生
△印	△印
母	何年何月何日生
△印	△印
妻	何年何月何日生
△印	△印
長	何年何月何日生
△印	△印
男	何年何月何日生
△印	△印

△何年何月何日何府何區何町平民氏名長男名ニ嫁ス(印)				
△何年何月何日死亡(印)				
△何年何月何日何縣何郡何町平民氏名妻女トナル(印)				
△何年何月何日同縣同郡同村何番地ニ分家ス(印)				
△何年何月何日何縣何郡何村平民氏名ニ女入籍ス(印)				
△何年何月何日夫名ニ從ヒ分家ス(印)				
△何年何月何日同縣何郡何村何番地絶家何氏ヲ再興ス(印)				
妻	弟	二女	二男	長女
亡父名三男	弟名妻 何年何月何日生	亡父名二男 何年何月何日生	何年何月何日生	何年何月何日生
	△名	△名	△名	△名

△何年何月何日同縣同郡何村平民氏名ニ嫁ス(印)				
△何年何月何日滿八十歳ニ付除籍(印)				
何年何月何日願濟大祖母ヲ大伯母ト正誤ヲ印何年何月何日失踪(印)				
△何年何月何日失踪(印)何年何月何日何縣何郡何村ニ現在(印)				
△何年何月何日何縣何郡何村ニ於テ死亡(印)				
何年何月何日何地ニ裁判所言渡ニヨリ何縣何郡何町平民氏名妻離婚ニ付復歸(印)				
△何縣何郡何町平民氏名ニ男何年何月何日母名離婚復歸ニ付願濟携帶(印)				
弟	大	叔父	叔母	從弟
何年何月何日生	亡曾祖父名四女	何年何月何日生	亡祖父名三男	叔母名二男
△名	△名	△名	△名	△名

何年何月何日何縣何郡何町士族氏名長女入籍ス④	婦	長男名妻	何年何月何日生
△何年何月何日何縣何郡何町士族氏名方へ離婚復歸ス④		△名	
何年何月何日何府何區何町平民氏名長男名妻離婚ニ付復歸④何年何月何日養子名妻ト爲ル④	長	長男名長男	何年何月何日生
何年何月何日同縣同郡何村平民氏名二男入籍ス④		養子名妻	何年何月何日生
	女		何年何月何日生
	養		何年何月何日生
	子		何年何月何日生

備考 願濟又ハ確定裁判官渡ニ係ル事項ハ何年何月何日願濟云々又ハ何年何月何日何地何裁判所裁判官渡云々ト記スヘシ
 朱線ハ除籍又ハ氏名身分變換又ハ訂正ヲ登記スルトキニ盡スルモノトス

戸籍登記書式第二

何府何郡何町

何年何月何日何町何地地先ニ於テ拾上④
 △何年何月何日何町平民氏名養子ト爲ル④

養 兒

△氏——名
 推測何年何月生

何年何月何日何町通何處ニ於テ拾上④
 △何年何月何日何縣何郡何村平民氏名引受ト爲ル④

養 兒

△氏——名
 推測何年何月生

入籍留簿登記書式第一

何縣何郡何町何番地持家寄留

本縣何郡何町何番地
 士族

何年何月何日全戶寄留届出 ㊦				
△何年何月何日退去届出 ㊦				
何年何月何日寄留届出 ㊦				
何年何月何日出牛何年何月何日届出 ㊦				
主	母	妹	妻	長男
亡父名二男 何年何月何日生 氏名	亡父名妻 △名 何年何月何日生	亡父名長女 何年何月何日生 名	何年何月何日生 名	何年何月何日生 名

備考 他府縣人入寄留簿ノ本籍ハ何府縣何郡區何町村何番地ト記シ他郡區人入寄留簿ノ本籍ハ何郡區何町村何番地ト記ス				
入寄留簿登記書式第二				
何府何區何町何番地借地寄留 △何年何月何日退去届出 ㊦				
何年何月何日妻外一名携帶寄留届出 ㊦				
本籍何縣何郡何村何番地 平民戶主氏名				
世帯主	妻	二名女		
父名二男 何年何月何日生 名	何年何月何日生 名	△名 何年何月何日生		

入寄留簿登記書式第三									
何年何月何日寄留届出	△								何年何月何日生
	女	長	名						
何縣何郡何村何番地士族									
氏名二男 △ 新名 氏 名									
何年何月何日生									
何府何郡何村何番地平民									
△ 氏 一 名 何年何月何日生									
何縣何區何町何番地平民									
氏名妹 △ 氏 一 名 何年何月何日生									
去届出									

出寄留簿書式第一									
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何府何區何町何番地平民				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					△ 何年何月何日生				
町何番地氏名方 寄留替届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				
何年何月何日何町何番地平民氏名方 寄留届出					何年何月何日生				

何年何月何日何府縣何町何番地氏名方 寄留替

右何年何月何日本縣何區何町何番地 寄留何月何日發送届書何月何日受領

何村何番地士族氏名父 名

母 右同人妻 名

右同人二男 名

△ 弟 一 名

何村何番地平民氏名三女 名

右何年何月何日本縣何郡何村何番地氏名方へ寄留何月何日發送屆書何月何日受領

何村何番地士族氏名弟 名

右何年何月何日本縣何郡何町何番地氏名方へ寄留何月何日發送屆書何月何日受領

出寄留簿書式第二

他府縣之部

何村何番地士族氏名二男 名

△何年何月何日復歸何月何日届出

右何年何月何日何府何區何町何番地氏名方へ寄留何月何日發送屆書何月何日受領

何村何番地平民 氏 名

母 氏 名

妻 氏 名

右何年何月何日何縣何郡何村何番地へ寄留何月何日發送屆書何月何日受領

登記目錄部門並事項書式第一

登記目錄

加籍目錄

- 本籍人管内出生之部
- 本籍人管外出生之部
- 棄兒之部
- 無籍者就籍之部
- 他府縣ヨリ入籍之部
- 一 結婚入籍
- 二 縁女入籍
- 三 養子女入籍
- 四 相續人入籍
- 五 携帶者入籍
- 六 親族入籍
- 七 私生子引受
- 八 棄兒引取

- 九 棄兒引受替入籍
 - 十 離婚復籍
 - 十一 養子女離縁復籍
 - 十二 相續人離縁復籍
 - 十三 分家入籍
 - 十四 分家者復歸入籍
 - 十五 附籍者入籍
 - 十六 附籍者別立入籍
 - 十七 絶家再興入籍
 - 十八 轉住入籍
- 他郡區ヨリ入籍之部
- 事項同上
- 他戸長役場管内ヨリ入籍之部
- 事項同上
- 登記目錄
- 登記目錄部門並事項式第二

除籍目錄

- 本籍人管内死亡之部
- 本籍人管外死亡之部
- 失踪者及重籍者除籍之部
- 他府縣へ送籍之部
- 一 結婚送籍
- 二 縁女送籍
- 三 養子女送籍
- 四 相續人送籍
- 五 携帶者送籍
- 六 親族送籍
- 七 私生子引渡
- 八 棄兒引渡
- 九 棄兒引受替送籍
- 十 離婚送籍
- 十一 養子女離縁送籍

●戶籍登記書
式中追加改正

明治二十年三月
內務省訓令
北海道廳府縣
第九號
明治十九年十月
內務省訓令
第二十號
左ノ通追加改正ス
登記目録第三管內
事項式第三管內
動目録中異動ノ部
七ノ私生子爲嫡出
ノ上ニ庶子ノ二
字ヲ加フ、登記目
録式第十四管內
異動目録中管內送
入籍ノ部十一、二
ノ兩項ヲ左ノ通改
正ス
第號、何町何番地
平民氏名妹名、右
何町何番地土族氏
名二男名妻離婚ニ
付復籍ス何月何日
届出第幾、何町何
番地土族氏名二女
名、右何町何番地
土族氏名養女離縁
ニ付復籍ス何月何

- 十二 相續人離縁送籍
- 十三 分家送籍
- 十四 分家者復歸送籍
- 十五 附籍者送籍
- 十六 附籍者別立送籍
- 十七 絶家再興送籍
- 十八 轉住送籍
- 他郡區へ送籍之部
- 事項同上
- 他戸長役場管內へ送籍之部
- 事項同上
- 登記目録
- 登記目録部門並事項式第三
- 管內異動目録
- 管內送入籍之部
- 事項加籍目録入籍之部除籍目録送籍之部ニ同

日届出

異動之部

- 一 戸内結婚
- 二 戸内離婚
- 三 家名相續
- 四 廢戸主
- 五 廢嫡
- 六 廢嫡者復立
- 七 私生子爲嫡出
- 八 棄兒立戸
- 九 失踪
- 十 失踪者復歸
- 十一 失踪者所在分明
- 十二 改名
- 十三 復姓
- 十四 身分變換
- 十五 廢家

十六 絕家
十七 轉住
十八 戶籍訂正

登記目錄書式第一
明治何年加籍目錄

本籍人管内出生之部

第 號

父 母

二男

右名何月何日出生何月何日届出

第 號

父 母

長女

右名何月何日出生何月何日届出

何村何番地士族

妻 氏

名 名 名

何村何番地平民氏名長男

孫 婦

名 名 名

第 號

母

私生子

右名何月何日出生何月何日届出

登記目錄書式第二

明治何年加籍目錄

本籍人管外出生之部

第 號

父 母

長男

右名何年何月何日何府何區何町ニ於テ出生何月何日發送届書何月何日受領

第 號

父 母

長女

何村何番地平民氏名妹

名 名

何村何番地平民氏名弟

弟 妻
甥 妻

名 名 名

何村何番地士族

妻 氏

名 名 名

右名何年何月何日何縣何郡何村ニ於テ出生何月何日發送屆書何月何日受領
第 號 何村何番地士族氏名叔母 名 名

母 私生子 名 名

右名何年何月何日何縣何區何町ニ於テ出生何月何日發送屆書何月何日受領
登記目錄書式第三

明治何年加籍目錄
棄兒之部

第 號 棄兒 氏 名

右何月何日何村何番地ニ於テ拾上ケ
推測何年何月生

登記目錄書式第四

明治何年加籍目錄
無籍者就籍ノ部
第 號 何村(何番地)

氏 名

右無籍之處就籍ス何月何日願濟何月何日届出
何年何月何日生
登記目錄書式第五

明治何年加籍目錄

他府縣ヨリ入籍之部
第 號 何村何番地平民氏名婦

長男名妻 名

右何縣何郡何村何番地平民氏名ニ女ヲ娶ル何月何日届出何月何日入籍報知書發送
何年何月何日生
第 號 何村何番地士族氏名長男名緣女 名

何年何月何日生

右何縣何郡何町何番地平民氏名長女ヲ貰受シ何月何日届出何月何日入籍報知書發送
何村何番地士族氏名養子

右何府何區何町何番地士族氏名二男ヲ貰受ク何月何日届出何月何日入籍報知書發送
 第 號
 何村何番地平民氏名相續人實兄
 亡父氏名二男
 名
 何年何月何日生

右何縣何郡何村何番地平民氏名弟ヲ貰受ク何月何日届出何月何日入籍報知書發送
 第 號
 何村何番地平民氏名夫名長男
 名
 何年何月何日生

右何縣何郡何町何番地平民氏名甥ヲ父名結婚ニ付携帶入籍ク何月何日届出何月何日
 入籍報知書發送
 第 號
 何村何番地士族氏名母
 名
 何年何月何日生

右何縣何郡何町何番地士族氏名叔母亡父名二女ヲ實母ニ付引受ク何月何日届出何月
 何日入籍報知書發送
 第 號
 何村何番地平民氏名子
 名
 何年何月何日生

右何縣何區何町何番地平民氏名二女名私生子ヲ引受ク何月何日届出何月何日入籍報
 知書發送
 第 號
 何村何番地平民氏名三男
 名
 何年何月何日生

右何縣何郡何村何番地平民氏名引受棄兒氏名ヲ引取ル何月何日何地何裁判所裁判言
 渡何月何日届出何月何日入籍報知書發送
 第 號
 何村何番地平民氏名引受棄兒
 氏 名
 何年何月何日生

右何府何郡何村何番地平民氏名引受棄兒ヲ更ニ引受ク何月何日届出何月何日入籍報

知書發送
第號

何村何番地平民氏名二女
名

何年何月何日生

右何府何區何町何番地平民氏名妻離婚ニ付復籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送

第號

何村何番地士族氏名三女
名

何年何月何日生

右何縣何郡何村平民氏名養女離婚ニ付復籍ス何月何日入籍報知書發送

第號

何村何番地平民氏名弟
亡父名三男

名

何年何月何日生

右何縣何郡何村平民氏名相續人離婚ニ付復籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送

送

第號

何村何番地平民氏名孫

母名長女

名

何年何月何日生

右何縣何郡何村何番地士族氏名長女ヲ母名離婚ニ付携帶入籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送

第號

何村何番地平民氏名妻

名

何年何月何日生

何年何月何日何縣何郡何村何番地士族氏名二女ヲ娶ル

妻

名

何年何月何日生

右何府何區何町士族氏名二男名分家入籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送

第號

何村何番地士族氏名二男

名

何年何月何日生

二男名妻

何年何月何日何縣何區何町何番地平民氏名二女子娶ル

婦 名

何年何月何日生

同人長男

孫 名

何年何月何日生

右何府何區何町何番地へ分家之處復歸入籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送
第 號 何村何番地士族氏名附籍平民

亡父名長男

氏 名

何年何月何日生

亡父名三男

弟 名

何年何月何日生

右何縣何郡何村何番地ヨリ附籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送
第 號 何村何番地平民

前戶主名

右何縣何區何町何番地士族氏名附籍之處別立入籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送
第 號 何村何番地平民

何年何月何日生

右何府何郡何村何番地平民氏名三男當村何番地絶家何氏ヲ再興ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送
第 號 何村何番地平民

何年何月何日生

何縣何郡何村何番地平民氏名長女子娶ル

氏 名

何年何月何日生

妻 名

何年何月何日生

長女 名

何年何月何日生

右何縣何區何町何番地ヨリ轉住入籍ス何月何日届出何月何日入籍報知書發送

何年何月何日生

登記目録書式第六

明治何年加籍目録

他郡區ヨリ入籍之部

登記目録書式第七

明治何年加籍目録

他戸長役場管内ヨリ入籍之部

登記目録書式第八

明治何年除籍目録

本籍人管内死亡之部

第 號

何村何番地平民氏名母

名

右名何月何日死亡何月何日届出

第 號

何村何番地士族

氏 名

右名何月何日死亡何月何日届出

登記目録書式第九

明治何年除籍目録

本籍人管外死亡之部
第 號

何村何番地平民氏名二男

名

右名何年何月何日何府何區何町ニ於テ死亡何月何日發送届書何月何日受領

登記目録書式第十

明治何年除籍目録

失踪者及重籍者除籍之部

第 號

何村何番地平民氏名又從弟

名

右名何年何月何日ヨリ失踪本年何月何日滿八十歳ニ至ルニ付除籍

第 號

何村何番地平民

氏 名

右名八十一歳何ヶ月何年何月何日ヨリ失踪本年何月何日滿三十六ヶ月ニ至ルニ付除

籍

第 號

何村何番地平民

氏 名

右名何縣何郡何村何番地ニ現住ノ同村在籍ノ者ニ付何月何日何村除籍
第 號 何村何番地士族氏名三男 名

右名何年何月何日何縣何郡何町何番地平民氏名養子ト爲リ同町在籍ノ者ニ付何月何
日當村除籍

登記目錄式第十一

明治何年除籍目錄

他府縣ニ送籍之部

第 號 何村何番地平民氏名妹 父名三女

右何府何區何町何番地平民氏名妻ニ嫁ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受
領

第 號 何村何番地平民氏名長女 名

右何縣何郡何村何番地士族氏名長男名緣女ト爲ル何月何日送籍狀發送何月何日入籍

報知書受領
第 號 何村何番地平民氏名二男 名

右何縣何郡何村何番地士族氏名養子ト爲ル何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書
受領

第 號 何村何番地平民氏名弟 父名四男

右何縣何郡何町何番地平民氏名實兄ニ付相續人ト爲ル何月何日送籍狀發送何月何日
入籍報知書受領

第 號 何村何番地士族氏名甥 弟名長男

右何縣何區何町士族氏名ト父名結婚ニ付携帶送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入
籍報知書受領

第 號 何村何番地士族氏名叔母 亡祖父名三女

右何府何郡何番地士族氏名實母ニ付引受ト爲ル何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領
第 號
何村何番地平民氏名二女名私生子
名

右何府何郡何村何番地平民氏名子ト爲ル何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領
第 號
何村何番地平民氏名引受棄兒
氏 名

右何縣何郡何村何番地平民氏名三男ナルコト發覺シ何年何月何日何地何裁判所裁判言渡ニ付引渡ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領
第 號
何村何番地平民氏名引受棄兒
氏 名

右何縣何郡何町何番地平民氏名更ニ引受シ何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領
第 號
何村何番地士族氏名妻

右何縣何郡何村何番地平民氏名二女離婚ニ付送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領
第 號
何村何番地平民氏名養女
名

右何縣何區何町何番地平民氏名三女離婚ニ付送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領
第 號
何村何番地士族氏名相續人實兄
亡父名二男
名

右何縣何區何町何番地平民氏名伯父離婚ニ付送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領
第 號
何村何番地平民氏名長女
名

右何縣何郡何村何番地平民氏名孫母名離婚ニ付携帶送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領

第 號

何村何番地士族氏名二男

妻 名

右何府何郡何町何番地へ分家送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領

何村何番地平民

氏 名

妻 名

長男 名

右何縣何郡何町何番地士族氏名二男分家ノ處復歸送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領

何村何番地平民

氏 名

亡父名四男

弟 名

右何縣何郡何町何番地士族氏名方へ附籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領

第 號

何村何番地士族氏名附籍平民

氏 名

右何府何郡何村何番地へ別立送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領

何村何番地平民氏名三男

名

右何府何區何町何番地ニ於テ絶家何氏ヲ再興ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領

何村何番地士族

氏 名

妻 名

長女 名

何年何月何日何縣何郡何村士族氏名姉ヲ娶ル

右何府何郡何村何番地へ轉住送籍ス何月何日送籍狀發送何月何日入籍報知書受領

登記目録書式第十二

明治何年除籍目録

他郡區へ送籍之部

登記目録書式第十三

明治何年除籍目錄

他戸長役場管内へ送籍之部

登記目錄書式第十四

明治何年管内異動目錄

管内送入籍之部

第 號

何町何番地平民氏名弟妻

第名妻

名

右何町何番地士族氏名長男名長女ヲ娶ル何月何日届出

第 號

何村何番地平民氏名夫

名

右何町何番地平民氏名伯父ヲ貰受ク何月何日届出

第 號

何町何番地平民氏名長男縁女

名

右何町何番地平民氏名二女ヲ貰受ク何月何日届出

第 號

何町何番地士族氏名養女

名

右何町何番地士族氏名二女ヲ貰受ク何月何日届出

第 號

何町何番地士族氏名養子

名

何年何月何日何縣何郡何村何番地平民氏名長女ヲ娶ル

養子名妻

婦

名

右何町何番地平民氏名廢家ノ上氏名ノ養子ト爲ル何月何日願濟何月何日届出

何町何番地平民氏名相續人實弟

亡父氏名三男

名

右何町何番地平民氏名叔父ヲ貰受ク何月何日届出

何町何番地平民氏名養孫

養子名長男

名

右何町何番地平民氏名廢戸ノ上氏名ノ養子ト爲リタルニ付携帶ス何月何日届出

何町何番地士族氏名父

父名妻

母

名

右何町何番地平民氏名祖父母ヲ實父母ニ付引受ク何月何日届出
第 號 何町何番地平民氏名姪 弟名子 名

右何町何番地平民氏名妹名私生子ヲ弟名子トシテ引受ク何月何日届出
第 號 何町何番地平民氏名引受棄兒 氏 名

右何町預リノ處引受ク何月何日届出
第 號 何町何番地士族氏名婦 二男名妻 名

右何町何番地平民氏名妹離婚ニ付復籍ス何月何日届出
第 號 何町何番地士族氏名養女 名

右何町何番地士族氏名二女離婚ニ付復籍ス何月何日届出
第 號 何町何番地平民 名

何年何月何日何縣何區何町何番地平民氏名三女ヲ娶ル
氏 妻 名
長 女 名

右何町何番地平民氏名弟分家ス何月何日届出
第 號 何町何番地士族氏名叔父 名

右何町何番地へ分家ノ處復籍ス何月何日届出
第 號 何町何番地士族氏名附籍平民 氏 名

亡父名二女

右何町何番地ヨリ附籍ス何月何日届出
第 號 何町何番地士族 妹 名

何年何月何日何府何郡何村何番地士族氏名長女ヲ娶ル
右何町何番地平民氏名へ附籍ノ處離籍ス何月何日届出
氏 妻 名
氏 妻 名

第 號

何町何番地平民

氏

名

右何町何番地士族氏名ニ男絶家何氏ヲ再興ス何月何日届出
第 號

何町何番地平民

氏

名

亡父名妻
母 長男

名 名 名

右何町何番地ヨリ轉住ス何月何日届出

登記目錄書式第十五

明治何年管内異動目錄

異動之部

第 號

何町何番地士族氏名長男

婦

名

名

右結婚何月何日届出
第 號

何町何番地平民氏名養子

名

右離婚何年何月何日届出
第 號

何町何番地平民

氏

名

右戸主ヲ廢ス何月何日願濟何月何日届出
第 號

何町何番地士族

氏

名

右父名退隱シ長男名相續ス何月何日届出
第 號

何町何番地平民

氏

名

右父名死亡跡相續ス何月何日届出
第 號

何町何番地平民

氏

名

養子名妻

長女

名

●戶籍登記書
 式 中 削 除
 明治二十年六月
 內務省訓令
 第三十五號
 北海道廳府縣
 明治十九年十月
 內務省訓令第二十
 號戶籍登記書式
 中五異動ノ部出項
 番地ノ下同居
 ノ二字ヲ削除ス

- 右前戸主父名失踪ニ何箇年經過ニ依リ相續ス何月何日願濟何月何日届出
 第 號 何町何番地士族氏名長男 名
- 右廢嫡何月何日願濟何月何日届出
 第 號 何町何番地士族氏名長男 名
- 右廢嫡ノ處事故解除ニ付復立ス何月何日願濟何月何日届出
 第 號 何町何番地平民氏名子 名
- 右母名父名ト結婚ニ依リ嫡出ト爲ル何月何日届出
 第 號 何町何番地同居平民 氏 名
- 右棄兒ノ處年齡滿十三歳ニ達シタルヲ以テ新ニ一戸ヲ立ツ
 第 號 何町何番地士族氏名叔父 名

推測何年何月生

- 右何年何月何日ヨリ失踪何月何日届出
 第 號 何町何番地平民氏名二男 名
- 右失踪ノ處何月何日復歸何月何日届出
 第 號 何町何番地平民氏名弟 名
- 右失踪ノ處何月何日何縣何郡何村ニ現在何月何日届出
 第 號 何町何番地平民 氏 名
- 右舊稱名ヲ改ム何月何日願濟何月何日届出
 第 號 何町何番地士族 氏 名
- 右舊姓何ヲ原姓ニ復ス何年何月何日願濟何月何日届出
 第 號 何町何番地士族 氏 名
- 右平民ノ處何月何日士族へ編入セラレ何月何日届出
 第 號 何町何番地士族 氏 名

第 號	何町何番地平民	氏 名
第 號	右士族ノ處平民ニ歸入ス何月何日願濟何月何日届出	何町何番地平民 氏 名
第 號	右廢家ス何月何日願濟何月何日届出	何町何番地士族 氏 名
第 號	右死亡後六箇月ヲ過キ相續人ヲ届出サルニ付何月何日絶家ト爲ル	何町何番地平民 氏 名
第 號	右失踪ノ處年齢八十歳ニ達シ除籍シタル後六箇月ヲ過キ相續人ヲ届出サルニ付何月何日絶家ト爲ル	何町何番地平民 氏 名
第 號	何町何番地平民	氏 名

第 號	右同町何番地ヨリ移轉ス何月何日届出	何町何番地平民氏名又從弟 名
第 號	右戸主トノ續柄何ハ何ノ錯誤ニ付訂正何月何日願濟何月何日届出	何町何番地士族氏名二男 名
第 號	右生年月日ニ何月トアルハ何月ノ誤ニ付キ訂正何月何日願濟何月何日届出	何町何番地平民氏名三女 名
第 號	右名某字ハ某字ノ誤ニ付訂正何月何日願濟何月何日届出	名

●市町村ノ人口調査告示方

明治二十三年七月 内務省令第三號

市町村ノ人口ハ毎年十二月末日調査ノ現在數ニ依リ翌年官報ヲ以テ告示シ之ヲ市制町村制ニ記載スル最終調査ノ人口トス但告示ノ後市町村ヲ廢置分合シ又ハ其境界ヲ變更スルトキハ次回ノ告示ヲ爲ス迄ノ間其處分ヲ爲シタル當時ノ調査ニ依ルモノトス

●華族ノ輩各地方へ移リ貫屬換ノ件

明治二十年十月
宮内省達第五號

華族一般

自今地方ニ就キ産業ニ從事シ或ハ家計ヲ維持スルノ目的ヲ以テ各府縣並北海道へ移住セントスルモノハ其事情ヲ具シ貫屬換願山ヘシ其目的至當ト認ムルモノハ聞届ク

●官位勳等前科ノ有無調査方廢止

明治二十年一月
内務省訓令第三號

北海道廳 府縣

明治十九年十月内務省訓令第二十號ヲ以テ 戶籍書式等相定メ位官勳等及處刑ハ戶籍ニ登記セサルヲ以テ從前新年朝拜祝節並御祭典ノ節參賀參拜ノ儀非役有位帶勳者へ通達方及位官勳等前科ノ有無調査方區役所戶長役場ニ於テ爲取扱候儀ハ自今相廢スヘシ尤明治十四年十月十二司法省丁第三十二號達及明治十九年四月司法省令丙第六號ニ依リ輕罪裁判所檢事ノ通知書ヲ受タルトキハ便宜之ヲ編綴スヘシ

●華族ノ送入籍ハ其郡區長ヨリ華族局へ通牒セシム

明治十八年十二月
宮内省達乙第二號

華族有之府縣

華族ノ輩養子女縁組離縁復籍及貫屬替轉居等ノ節送入籍ノ手續ヲ了シ候ハ、其郡區長ヨリ直チニ當省華族局へ通牒セシムヘシ此旨相達候事

●有位者改姓名貫屬替又ハ死去セントキハ其願届ヲ取扱タル郡區長ヨリ華族局へ通牒セシム

明治二十年六月
宮内省達第三號

北海道廳 府縣

自今有位者(華族ヲ除ク)改姓名貫屬替又ハ死去セントキハ其願届ヲ取扱タル郡區長ヨリ直ニ當省華族局へ通牒セシムヘシ

●人民署名肩書ノ件

明治八年二月
布告第四十四號

人民署名肩書ノ儀自今貫屬或ハ管下ノ文字ヲ除キ何處華族士族平民ト記載可致此旨布告候事

但從來ノ諸規則及ヒ雛形中ニ掲載セル肩書ノ儀モ總テ本文ノ通可相心得事

●墨西哥合衆國人民ニ交付スヘキ國籍證明書雛形

明治二十二年七月
外務省告示第一號

明治二十二年七月外務省令第三號ニ依リ墨西哥合衆國人民ニ交付スヘキ國籍證明書ノ
雛形左ノ如シ

「」内ハ朱書

國籍證明書	
一 氏名	
一 國籍	
一 年齢	
右「何」之誰「墨西哥合衆國」人ニ相違ナキコ トヲ證明ス	
明治年月日	外務省 印

注意	
明治二十一年十一月三十日帝國ト墨西哥 合衆國トノ間ニ締結シタル修好通商條約 ニ依リ墨西哥合衆國人ハ帝國内ニ於テ帝 國臣民同様帝國ノ法律規則ヲ遵奉シテ自 由ニ旅行シ各地ニ滞在居住シ正當ノ營業 ニ從事シ家屋倉庫ヲ借受クルコトヲ得ル モノナリ	

●僧尼族籍編入更正

明治七年七月
布告第七十四號

今般華士族分家候者ハ總テ平民ニ編入相成候ニ付本年一月第八號僧尼族籍編入ノ布告
自今左ノ通更正候條此旨僧侶へ布告スヘキ事

- 一 僧尼ノ輩族籍被相定候條各自其原籍ニ復スヘキ事
- 一 原籍不分明又ハ復籍ヲ望マサル者ハ現在地へ別ニ本籍相定メ若シ現在地ノ外
へ本籍相定度望ノ者ハ一旦現在地へ定籍ノ上其地ヨリ望ノ地へ送籍スヘシ
但別ニ本籍相定候者ハ元身分ニ不拘總テ平民籍タルヘキ事
- 一 眞宗維新以來華族ニ列セ
ラレシ者ヲ除クノ外並ニ舊修驗等世襲ノ者モ一般平民タルヘキ事
本末寺共其住職タル者宗教事務管理ノ儀一般職分同様タルヘキ事
但一寺住職ノ者ハ平民クリトモ總テ身分取扱士族ニ準シ候儀ハ從前ノ通
ルヘキ事
- 一 戶籍法中右等ニ抵觸ノ廉ハ總テ廢止候事

●僧尼編籍心得方

明治八年十一月
內務省達乙第百五十一號

府 縣

僧尼ノ輩定籍之儀ニ付昨七年第七十四號ヲ以テ公布相成候所各自原籍ニ復スル分ハ
格別現在地へ本籍ヲ定ムルニ至テハ自然各地方區々ノ處分ニ相涉リ候テハ不都合ニ
付左ノ通相心得速ニ可致編籍此旨僧尼へ布達スヘキ事

- 一 原籍不分明又ハ復籍ヲ望マサル者ハ現今住所ノ區内へ別ニ本籍可相定尤本籍

ヲ定ムルニ付更ニ土地及ヒ家屋ヲ設クルコ及ハス現住地ノ區戶長へ申立其區
内町へ定籍スヘシ若シ現在地ノ區内町ノ外へ本籍ヲ定メ度望ノ者ハ一旦前條
ノ如ク定籍ノ上其地ヨリ望ノ地へ送籍スヘキ事
但別ニ本籍ヲ定ムル者身分ノ儀ハ昨七年第七十四號公布ノ通タルヘキ事

●僧尼住職中居住ノ件

明治九年六月
(教部省)達書第二十一號

府 縣

僧尼編籍ノ件昨八年^{十一月}內務省乙第百五十一號達書ニ據リ各自本籍爲相定候上ハ住
職中其寺院へ居住ノ儀總テ從前之通可相心得等ニ付此旨寺院へ可布達事

●無籍在監人就籍處分

明治十五年六月
內務省達乙第三十九號

無籍在監人ハ在監中定籍ノ手續ヲ爲サシムルニ不及本人放還ノ時籍ヲ望ノ地ニ定メ
シメ典獄ヨリ就籍地區戶長ニ通知書ヲ作り本人ヲテ携帶就籍ノ手續ヲ行ハシムヘ
シ此旨相達候事

但典獄ハ前年中監獄内無籍人ノ出入出生死亡ノ員數並ニ其年一月一日ノ現員ヲ每
年一月限リ在監地區戶長へ通知スヘシ區戶長ハ之ヲ受ケ該地ノ人口ニ算入スヘシ

●外國人ヲ同居セシムルヲ禁ス

明治九年三月
內務省達乙第四十二號

府 縣

外國人居留地外ニ住居ノ儀ハ是迄雇人ニ限リ特別許可有之其同姓之親戚及外國人婢
僕ハ届出ノ上同居爲致差支無之儀ニ候處其他ノ外國人ヲ一時ノ止宿ニアラスンテ同
居爲致候儀ハ不相成候條人民ノ内外國人ヲ雇入候者ヘモ夫々達方可取計此旨相達候
事

○氏名年齡

●平民苗字差許

明治三年九月
布告第六百八號

自今平民苗字被差許候事

●平民新ニ苗字ヲ設ケ必唱ノ件

明治八年二月
布告第二十二號

平民苗字被差許候旨明治三年九月布告候處自今必苗字相唱可申尤祖先以來苗字不分
明ノ向ハ新クニ苗字ヲ設ケ候條可致此旨布告候事

●國名舊官名ヲ通稱ニ用ルヲ禁ス

明治三年十一月
布告第八百四十五號

自今舊官人元諸大夫侍並元中大夫等位階總テ被廢候事
國名並ニ舊官名ヲ以テ通稱ニ相用候儀被停候事

●通稱名乘兩用禁止 明治五年五月
布告第四百十九號

從來通稱名乘兩様相用來候輩自今一名タルヘキ事

●苗字名屋號共改稱禁止 明治五年八月
布告第二百三十五號

華士族ヨリ平民ニ至ル迄自今苗字名併屋號共改稱不相成候事

●僧侶ニ苗字ヲ設ケシムルノ件 明治五年九月
布告第二百六十五號

自今僧侶苗字相設ケ住職中ノ者ハ某寺住職某氏名ト可相稱事
但苗字相設ケ候ハ、管轄廳ヘ可届出事

●御諱并御名ノ文字名乘憚ルニ及ハス 明治六年三月
布告第一百十八號

御歷代御諱並御名ノ文字自今人民一般相名乘候儀不及憚事
但熟字ノ儘相用候儀ハ不相成候事

●苗字名屋號
共改稱禁止但
書改正

明治九年一
月
布告第五號
但同苗同名等餘儀
ナク差支有之者ハ
管轄廳ヘ改名願ヒ
出ツヘキ事

●六年五月東京府
伺ニヨリ但書消滅

●年齡計算方 明治六年二月
布告第三十六號

自今年齡ヲ計算候儀幾年幾月ト可相數事
但舊曆中ノ儀ハ一千支ヲ以テ一年トシ其生年ノ月數ハ本年ノ月數ト通算シ十二ケ
月ヲ以テ一年ト可致事

●參照

六年八月太政官達無號 濱田縣外五縣ヘ

本年第三十六號布告年齡計算ノ儀ニ付伺出ノ節指令ニ及置候處今般詮議ノ次第有之
去ル壬申年十二月二日並出生ノ月且本年月ノ端日數トモ各一ヶ月ト相立舊曆中閏月
ハ其本月ニ併セ一ヶ月ト相立候條此旨更ニ相達候事

●滿二十年ヲ以テ丁年ト定ム 明治九年四月
布告第四十一號

自今滿二十年ヲ以テ丁年ト相定候條此旨布告候事

○相續

●華士族家督相續方 明治六年一月
布告第二十八號

●明治六年布告第
二百六十三號改正
ニ依ル

今般華士族家督相續ノ儀ニ付左ノ通被相定候條此旨相達候事
家督相續ハ必ス總領ノ男子タルヘシ若シ亡沒或ハ癡篤疾等不得止ノ事故アレハ共
事實ヲ詳ニシ次男三男又ハ女子ヘ養子相續願出ツヘシ次男三男女子無之者ハ血統
ノ者ヲ以テ相續願出ツヘシ若シ故ナク順序ヲ越テ相續致ス者ハ相當ノ者可申付事
幼少ニテ家督相續致候節ハ親戚又ハ他人ニテモ相當ノ者相選ミ後見可爲致事
當主隱居致實子又ハ養子家督相續致候上其相續人多病或ハ不埒ノ儀有之歟又ハ病
死致シ最前ノ隱居壯健ニテ再相續願出候節ハ聞届不苦事
但再相續人ト可稱事

當主壯年ナレトモ疾病其外無據事故有之養子致シ候處前當主疾病平癒又ハ事故相
解候節再家督致シ右養子ハ實家ヘ立戻リ候歟又ハ當主他ヘ縁付候共雙方熟談ノ上
願出候ハ、聞届不苦事

●明治九年布告第
九十五號ヲ以テ本
項追加

父兄伯叔總テ目上ノ者子弟甥等ノ目下ノ家ヲ繼承スルトキハ相續人ト稱シ養子ト
稱スヘカラス
當主死去跡嗣子無之婦女子ノミニテ己ヲ得サル事情アリ養子難致者ハ婦女子ノ相
續差許從前ノ給祿可支給事
婦女子相續ノ後ニ於テ夫ヲ迎ヘ又ハ養子致候ハ、直ニ其夫又ハ養子ヘ相續可相讓

●明治六年布告第
二百六十三號ヲ以
テ本項追加

事

右之通候條華族ハ管轄廳ヨリ正院ヘ相同士族ハ管轄廳ニ於テ聞届可申事

●士族家督相續養子貫籍替届出ノ件

明治十二年二月
(太政官)達第八號

使府 縣

士族家督相續養子貫籍替ヘノ儀是迄管轄廳ヘ出願シ來候處自今出願ニ不及直ニ戸長
ヘ届出シムヘシ此旨相達候事

但廢嫡ニ屬シテ特許ヲ經ヘキモノハ從前ノ通タルヘシ

●華士族平民互ニ養子取組免許及届出方

明治六年一月
布告第二十七號

自今華士族平民互ニ養子取組不苦候事

但華族ハ管轄廳ヨリ正院ヘ伺出士族ハ管轄廳ニテ聞届平民ハ戸長ヘ可届出事

●華士族當主死亡後相續人ヲ定ムル期限制定

明治十三年一月
布告第三號

●十七年七月七日
宮内省達ニ依リ華
族ノ部消滅

第四十五類 戶籍

八〇

華士族當主死亡後相續人無之親族協議ノ上家名預リ置退テ相續人ヲ定ムルハ當主死
亡後日數五十日ヲ過クヘカラス若不得已事情有之親族連印管轄廳へ延期願出ルモノ
ハ更ニ相當ノ猶豫ヲ與フルト雖モ死亡後六ヶ月ヲ過キ仍ホ相續人ヲ届出サルトキハ
其族稱ハ廢絶候儀ト可相心得此旨布告候事

●單身戸主死亡又ハ除籍ノ後絶家期限

明治十七年六月
布告第二十號

單身戸主死亡又ハ除籍ノ日ヨリ滿六箇月以内ニ跡相續者ヲ届出サル者ハ總テ絶家ト
ス

○婚姻出生

●華族ヨリ平民ニ至ル迄互ニ婚姻差許サレノ件

明治四年八月
布告第四百三十七號

華族ヨリ平民ニ至ル迄互ニ婚姻差許サレ候條双方願ニ不及其時々戸長へ可届出事
但送籍方ノ儀ハ戶籍法第八則ヨリ第十一則迄ニ照準可致事

●婚姻養子養女ノ取組及離縁等總テ戶籍ニ登記セサル

内ハ無効トス

明治八年十二月
(太政官)達第二百九號

使府縣

婚姻又ハ養子養女ノ取組若クハ其離縁縁令相對熟談ノ上タリトモ双方ノ戶籍ニ
登記セサル内ハ其効ナキ者ト看做スヘシ候條右等ノ届方等關ノ所業無之樣精々説諭
可致置此旨相達候事

●外國人民ト婚姻ヲ差許サレノ件

明治六年三月
布告第三百三號

自今外國人民ト婚姻差許左ノ通定規相定候條此旨可相心得事

- 一 日本人外國人ト婚嫁セントスル者ハ日本政府ノ允許ヲ受クヘシ
- 一 外國人ニ嫁シタル日本ノ女ハ日本人タルノ分限ヲ失フヘシ若故アツテ再ヒ日
本人タルノ分限ニ復セン事ヲ願フモノハ免許ヲ得能フヘシ
- 一 日本人ニ嫁シタル外國ノ女ハ日本國法ニ從ヒ日本人タルノ分限ヲ得ヘシ
- 一 外國人ニ嫁スル日本ノ女ハ其身ニ屬シタルモノト雖トモ日本ノ不動産ヲ所有
スル事ヲ許サス但シ日本ノ國法並ニ日本政府ニテ定メタル規則ニ違背スルコ
ト無クハ金銀動産ヲ持携スルハ妨ケナシトス

- 一 日本ノ女外國人ヲ婿養子ト爲ス者モ亦日本政府ノ允許ヲ受クヘシ
- 一 外國人日本人ノ婿養子トナリタルモノハ日本國法ニ從ヒ日本人タルノ分限ヲ得ヘシ
- 一 外國ニ於テ日本人外國人ト婚嫁セントスル者ハ其國或ハ其近國ニ在留ノ日本公使又ハ領事官ニ願出許可ヲ乞フヘシ公使及領事官ハ裁下ノ上本國政府ヘ届出ヘシ

●私生子ノ區分

明治六年一月 布告第二十一號

妻妾ニアラサル婦女ニシテ分娩スル兒子ハ一切私生子ヲ以テ論シ其婦女ノ引受タルヘキ事

但男子ヨリ巳ノ子ト見留メ候上ハ婦女住所ノ戶長ニ請テ免許ヲ得候者ハ其子共男子ヲ父トスルヲ可得事

○分家合家

●合家禁止及從前合家セシ分取扱方

明治九年五月 布告第七十五號

明治六年一月第二十八號第五項及ヒ同年八月第三百一號ヲ以テ合家ノ儀布告候處詮議ノ

●十三年太政官第三十六號布告(刑法)及十九年内務省令第二十號(戶籍取扱手續)ニ依リ第二項消滅

●十三年第三十六號布告(刑法)及十九年内務省令第二十號(戶籍取扱手續)ニ依リ第二項消滅

次第有之自今被禁止候條此旨布告候事

但從前既ニ合家セシ分ハ今後左ノ通可取扱事

- 一 分家セント欲スルモノハ其合家セシ本人ノ一代中ニ限り復舊スルコトヲ許ス其子孫ニ至テハ七年第七十三號布告分家ノ例ニ據ルヘシ
- 一 戶籍記載方及刑事上ノ關涉ニ於テハ戶主ノ血屬ハ等親ニ依リ其血屬ナキハ等親外ノ親屬タルヘシ
- 一 士族平民合家セシモノハ總テ士族ニ編入スヘシ

●華士族分家ノ者平民籍ニ編入

明治七年七月 布告第七十三號

自今華士族分家ノ者ハ平民籍ニ編入候條此旨布告候事
但分祿ノ儀ハ不相成其宗家祿高ノ中適宜給與候儀者勝手タルヘキ事

●華士族子孫厄介ノ輩民籍ヘ加入

明治五年四月 (太政官)達第百十五號

自今華士族子弟厄介ノ輩民籍ヘ加入爲致候儀可爲勝手事

●戶主廢家他ヘ入夫或ハ養子女トナリ又ハ復籍等出願

●二十年布告第八號(金祿公債發行條例)ニ依リ但書消滅

ノ者取扱方

明治十年八月
(太政官)達第六十號

使府縣

男女ノ戶主其身實子養子家他女若クハ相續人タルヲ問ハス其家名ヲ廢シ他へ入夫縁付或ハ養子女トナリ又ハ實家へ復籍等願出候ハ、地方廳限リ聽届不苦此旨相達候事
但華族ハ此限ニアラス

○旅行寄留生死

●出生死去出入及寄留者等届出方

明治十九年九月
內務省令第十九號

明治四年四月四日布告戶籍法第五則出生死去出入等届出方及明治五年正第四號布告
第八項寄留者届出方左ノ通相定メ來ル十二月一日ヨリ施行ス
第一條 出產アリタルトキハ十日以内ニ届出ヘシ
第二條 死者アリタルトキハ埋葬以前ニ届出ヘシ
第三條 失踪者復歸シ又ハ其行方知レタルトキハ十日以内ニ届出ヘシ
第四條 廢戶主廢嫡改名復姓身分變換其他願濟ノ上戶籍ニ登記スヘキ事項ハ其許可ノ指令ヲ受領シタル日ヨリ十日以内ニ届出ヘシ

第五條 前數條ニ記載シタル事項ハ戶主ヨリ届出ヘシ戶主未定又ハ不在ナルトキハ

親族二人以上又ハ其事ニ關係アル者ヨリ本籍地戶長ニ届出ヘシ但本籍地外ニアルトキハ現在地戶長ニ届出且同時ニ本籍地戶長へ届書ヲ發送スヘシ

第六條 他府縣又ハ他郡區ニ寄留シタルトキ自己ノ所有地ニ於テハ寄留者ヨリ他人ノ所有地若シハ自己又ハ他人ノ借地借家ニ於テハ寄留者及地主又ハ家主又ハ其地所其家ヲ管理スル者ヨリ十日以内ニ其地戶長ニ届出且同時ニ本籍地戶長へ届書ヲ發送スヘシ

第七條 寄留地ヲ去ルトキ自己ノ所有地ニ於テハ寄留者ヨリ其他ニ於テハ地主又ハ家主又ハ其地所其家ヲ管理スル者ヨリ十日以内ニ其地戶長ニ届出ヘシ

第八條 寄留者本籍地ニ歸リタルトキハ戶主又ハ本人ヨリ十日以内ニ届出ヘシ

第九條 正當ノ理由ナクシテ前數條ニ違背シタル者ハ貳拾錢以上壹圓貳拾五錢以下ノ科料ニ處ス

●出生死去出入及寄留者等届出書類取扱方

明治十九年十月
內務省訓令第二十二號
北海道廳 府縣

內務省令第十九號第五條但書ニ依リ本籍外ノ者ヨリ差出タル屆書ハ左ノ如ク取扱フ

一 寄留者ニ係ル屆書ハ寄留簿ニ登記シタル上入寄留屆書ト合綴スヘシ但出產ニ於テハ別ニ入寄留届ヲ爲サシムルニ及ハス

一 寄留者ニ非サル者ノ屆書ハ總テ便宜編綴スヘシ

同令第六條ノ入寄留屆書第七條ノ寄留者退去屆書及第八條ノ寄留者復歸屆書ハ類集編綴スヘシ

●省令第十九號(戶籍法中出入寄留届出方)施行以前届

出タル者取調方

明治十九年十一月
內務省訓令第二十三號

北海道廳 府縣

內務省令第十九號施行以前ニ於テ出入寄留ノ届出ヲ爲シ現ニ出入寄留ノ記載アル者ハ本籍地ニ於テハ出寄留者ノ留守引受人又ハ其戶主入寄留地ニ於テハ地主又ハ家主又ハ其地所其家ヲ管理スル者ヲ取調タル上出入寄留簿ヲ整頓スヘシ

●省令第十九號(戶籍法中出生死去出入及寄留等届出

方)施行以前届漏ノ者届出期限

明治十九年十一月
內務省令第二十五號

內務省令第十九號第一條第二條第三條第四條ニ記載シタル事項ニシテ同令施行以前ノ届漏ニ係ルモノ及同令施行以前ヨリ現ニ寄留シテ其届出ヲ爲サ、ル者ハ同令ニ依リ本年十二月一日ヨリ十日マテニ届出ヘシ違背シタル者ハ同令第九條ニ據リ處分ス

●華族ノ内國旅行及寄留ハ願ニ及ハス出發歸著ノ都度

爵位局長へ届出シム

明治二十二年五月
宮内省達第八號

華族(爵位香問紙候及
學齡者ヲ除ク)

自今内國旅行及寄留ハ願ニ及ハス出發歸著ノ都度爵位局長官へ届出ヘシ

●諸官員各地方出張ノ節止宿所ヲ其管廳へ通知スヘシ

明治八年二月
(太政官)達第二十一號

院省使廳府縣

諸官員御用有之各地方へ出張ノ節止宿處明細相認到着次第其管轄廳へ通知可致此旨
相達候事

●寄留旅行ノ者ニ鑑札交付ヲ須ヒス
明治四年七月
 布告第三百六十五號

寄留旅行ノ者へ鑑札可相渡旨兼テ相違置候所不及其儀候條更ニ相違候事

●第四十六類 民事 ●民法 ●民事訴訟法 ●民事及民事訴訟雜件

○民法

●民法財産編同財産取得編同債權擔保編同證據編

明治二十三年四月
 法律第二十八號

朕民法中財産編財産取得編債權擔保編證據編ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス
 (別冊略ス)

●民法財産取得編同人事編
明治二十三年十月
 法律第九十八號

朕民法中財産取得編人事編ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス
 (別冊略ス)

○民事訴訟法

●民事訴訟法
明治二十三年四月
 法律第二十九號

朕民事訴訟法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年四月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

(別冊略ス)

●民事訴訟法施行條例

明治二十三年七月 法律第五十號

朕民事訴訟法施行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

民事訴訟法施行條例

第一條 民事訴訟法實施前ニ提起シタル訴訟ニ付テノ爾後ノ訴訟手續ハ民事訴訟法ニ依リテ之ヲ完結ス

第二條 民事訴訟法實施前ニ闕席ノ儘言渡シタル裁判ニ對シテハ民事訴訟法ニ依リ故障ヲ申立ツルコトヲ得

故障ノ期間ハ新法ニ依リ其實施ノ日ヨリ起算ス但其期間カ舊法ノ控訴上告期限ヲ超過スルトキハ其期限ニ從フ

第三條 民事訴訟法實施前ニ言渡シタル裁判ニ對スル控訴上告期限ハ新法ノ控訴上告期間ニ依リ其實施ノ日ヨリ起算ス但其期間カ舊法ノ控訴上告期限ヲ超過スルト

キハ其期限ニ從フ

第四條 民事訴訟法實施前ニ確定シタル裁判ニ對シテハ民事訴訟法ニ依リ再審ヲ求ムル訴ヲ爲スコトヲ得但民事訴訟法實施前ニ再審ノ條件生シタルトキハ其條件ノ生シタル日ヨリ再審ノ期間ヲ起算ス

第五條 民事訴訟法實施前ニ言渡シタル裁判ノ強制執行ハ民事訴訟法ニ依リテ之ヲ完結ス但シ既ニ身代限ノ揭示ヲ爲シ又ハ公賣ニ著手シタル事件ハ其手續ノ終了マテハ舊法ニ從フ

第六條 民事訴訟法實施前ニ言渡シタル裁判ノ執行命令ヲ得サル場合ニ於テ民事訴訟法第四百九十九條ノ規定ニ從ヒ證明書ヲ要スル者ハ其訴訟記録ノ存在スル裁判所ニ之ヲ求ムルコトヲ得

第七條 民事訴訟法實施前既ニ勸解ヲ出願シ未タ完結ニ至ラサル事件ハ民事訴訟法第三百八十一條ノ規定ニ從ヒ區裁判所繼續シテ之ヲ完結スルコトヲ得

第八條 民事訴訟法ノ規定ニ依リ市町村長ノ爲ス可キ職務ハ市町村長ヲ置カサル地ニ在テハ其職務ヲ行フ吏員ニ屬ス

第九條 民事訴訟法ニ於テ親族ト稱スル者ハ當分ノ內刑法ノ親屬例ニ依ル

第十條 婚姻離婚及養子ノ縁組離縁ニ關スル訴ニ付テハ特別ノ慣例アルモノハ當分

ノ内其慣例ニ從フ

第十一條 明治八年第六號布告ハ當分ノ内其効力ヲ有スルモノトス

第十二條 明治十年第十九號布告控訴上告手續第十六條中大審院トアルヲ上告裁判所ト改メ該條ハ當分ノ内其効力ヲ有スルモノトス

○民事及民事訴訟雜件

●增價競賣法

明治二十三年十月
法律第九十二號

朕增價競賣法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

增價競賣法

第一條 民法債權擔保編第二百六十五條ニ從ヒテ抵當財産ノ增價競賣ヲ要求スル債權者ハ第三所持者及ヒ前所有者ニ競賣ノ要求書ヲ送達シタルヨリ三日内ニ抵當財産所在地ノ區裁判所ニ競賣ノ申立ヲ爲シ且保證人又ハ擔保ノ認許ヲ求ム可シ前項ノ手續ヲ爲ササルトキハ競賣ノ要求ハ當然無効ナリトス

第二條 競賣ノ申立ニハ民事訴訟法第六百四十二條第一號及ヒ第二號ニ掲クル諸件ノ外第三所持者及ヒ前所有者ノ表示、擔保ノ表示、第三所持者ノ提供シタル金額及

ヒ要求者ノ定メタル增額ヲ具備シ且民事訴訟法第六百四十三條第三號乃至第五號ノ證書ヲ添附スルコトヲ要ス

第三條 裁判所ハ期日ヲ定メテ要求者、第三所持者及ヒ前所有者ヲ呼出シ擔保ノ許否ニ付テノ決定ヲ爲ス可シ

否認ノ決定アリタルトキハ競賣ノ要求ハ當然無効ナリトス但競賣ノ要求ヲ爲ス權利アル他ノ債權者カ要求ニ參加スルノ申立ヲ爲シ又ハ期間ニ自ラ要求ヲ爲シタルトキハ右決定ヲ知リタルヨリ三日内ニ更ニ第一條ノ手續ヲ爲スコトヲ妨ケス

第四條 左ニ掲クル者ヲ增價競賣手續ニ於テノ利害關係人トス

第一 競賣要求者

第二 債務者

第三 第三所持者

第四 抵當債權者

第五 抵當財産ノ前所有者カ債務者ニ非サルトキハ其前所有者

第五條 裁判所ハ要求者ノ供シタル擔保ヲ十分ナリトスルトキハ競賣手續ノ開始決定ヲ爲シ同時ニ競賣期日及ヒ競落期日ヲ定メテ公告ス可シ

第六條 競賣期日ノ公告ニハ民事訴訟法第六百五十八條第一號乃至第三號、第五號、

第七號乃至第十號ニ掲クル諸件ノ外増價競賣ノ要求ニ因リ競賣ヲ爲ス旨及ヒ最低競賣價額トシテ提供價額ニ附シタル増額ヲ具備スルコトヲ要ス

此他競賣及ヒ競落ノ手續ニ付テハ民事訴訟法第六百五十九條乃至第六百六十一條、第六百六十三條乃至第六百六十九條、第六百七十一條、第六百七十二條第二號及ヒ第四號乃至第八號、第六百七十三條、第六百七十四條、第六百七十六條乃至第六百八十七條ノ規定ヲ準用ス

第七條 競賣期日ニ於テ許ス可キ競買價額ノ申出ナキトキハ裁判所ハ要求者ヲ競落人ナリト言渡ス可シ

第八條 競落人ナリト言渡サレタル者カ要求者ナルト否トヲ問ハズ競落代價ノ全額支拂ニ至ルマテハ要求者ノ供シタル擔保ハ負擔ヲ免カルコト無シ

第九條 裁判所ハ要求者ノ申立アルトキハ競賣ニ換ヘテ入札拂ヲ命ス可シ
前項ノ場合ニ於テハ民事訴訟法第七百二條但書及ヒ第七百三條乃至第七百五條ノ規定ヲ適用ス

第十條 増價競賣ニ依ル競落ニ對シテハ更ニ増價競賣ノ要求ヲ爲スコトヲ許サス

● 裁判上代位法

明治二十三年十月
法律第九十三號

朕裁判上代位法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

裁判上代位法

第一條 民法財産編第三百二十九條ノ規定ニ從ヒテ債務者ニ屬スル訴權ヲ行ハントスル債權者ハ先ツ債務者ニ其行使ヲ合式ニ催告スルコトヲ要ス

債務者右催告ヲ受ケタル後ハ權利ヲ讓渡スコトヲ得ス

第二條 債務者前條ノ催告ヨリ七日内ニ被告ト爲ル可キ第三者ニ對シテ訴ヲ提起セサルトキハ債權者ハ債務者ノ住所地ノ裁判所ニ代位ノ申請ヲ爲スコトヲ得但催告書ノ謄本ヲ差出ス可シ

第三條 代位ノ申請ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 債權者、債務者、被告ト爲ル可キ第三者及ヒ裁判所ノ表示

第二 代位申請ノ原因タル債權ノ表示

第三 訴訟物ノ表示

第四條 裁判所ハ申請ニ付キ債務者ヲ審訊セシメテ決定ヲ爲スコトヲ得
右申請ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

● 財産委棄法

明治二十三年十月
法律第九十四號

朕財產委棄法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

財產委棄法

第一條 無資力ナル債務者ニシテ惡意ノ證ナキ者ハ動産又ハ不動産ノ差押ヲ受ケタルモ競賣ニ至ルマテハ無資力ノ原因タル不幸ノ事情又ハ管理ノ過失ヲ陳述シテ債權者ニ對シ自己ノ財産ノ委棄ヲ其住所地ノ裁判所ニ請求スルコトヲ得
債務者ハ總債權者ノ氏名及ヒ分限ト各債權者ノ債權ノ元本及ヒ利息トヲ右請求ニ附記スルコトヲ要ス

第二條 財産ノ委棄ハ協諾契約ニ關シ商法ニ規定シタル方式及ヒ條件ニ從ヒテ債權者ノ承諾ヲ受クルコトヲ要ス

第三條 債權者ノ承諾シタル財産ノ委棄ハ裁判所ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス
此他財産ノ委棄ニ付テハ家資分散ニ關スル法律ノ適用ヲ妨ケス

辨濟提供規則

明治二十三年十月
勅令第二百十七號

朕辨濟提供規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム本規則ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

辨濟提供規則

第一條 民法財産編第四百七十四條ニ依レル辨濟ノ提供ハ執達吏ヲシテ之ヲ爲サシム可シ

第二條 提供ヲ爲スノ委任ヲ受ケタル執達吏ハ調書ヲ作り其調書ニハ提供物金錢ナルトキハ其種類員數ヲ記シ特定物ナルトキハ他物ニ換ユルコト能ハサラシムル爲メ其詳細ヲ記シ定量物ナルトキハ其種類品質數量ヲ記ス可シ

第三條 右ノ調書ニ付テハ民事訴訟法第五百四十條ノ規定ヲ準用ス

第四條 執達吏提供ノ委任ヲ受ケテ之ヲ爲シタルトキハ手数料金二十錢其他執達吏手数料規則ニ從ヒ立替金ヲ受クルモノトス

社寺學校等へ寄附ノ土地建物物品等處分方

明治九年四月
布告第五十四號

社寺學校病院等へ寄附候土地建物其他物品等別段ノ契約無之分ハ寄附主ニ於テ其所有ヲ離シタルモノトス一般ノ讓渡ヲ以テ處分候條此旨布告候事

地所質入書入規則

明治六年一月
布告第十八號

先般田地永代賣買被差許候ニ付自今質入書入致シ候節ハ左ノ規則ノ通り可相心得事
地所質入書入規則

第一條 金穀ノ借主_地ヨリ返濟スヘキ証據トシテ貸主_金ニ地所ト証文トヲ渡シ貸主
共作徳米ヲ以テ貸高ノ利息ニ充候_地地所ノ質入ト云フ

第二條 金穀ノ借主_地ヨリ返濟スヘキ証據トシテ貸主_金ニ地所引當ノ証文ノミヲ渡
シ借主ノ作徳米ノ全部又ハ一部ヲ貸主ニ渡シ利息ニ充候_地ヲ書入ト云フ

第三條 金穀ノ借主_地ヨリ返濟スヘキ証據トシテ貸主_金ニ地所引當ノ証文ノミヲ渡
シ借主ヨリ其利息トシテ米又ハ金ヲ拂ヒ候_地ヲ書入ト云フ

第四條 地所ヲ質入ニ致シ候節ハ地券ヲモ相渡シ可申其年期ノ儀ハ三箇年ヲ限ルヘ
シ尤三箇年以下期限取極候儀ハ勝手タルヘク且年限取極候廉ハ判然証文面ニ記載
致シ置可申事

但書入ノ儀ハ地券ヲ相渡スニ及ハス其年限長短共本文ノ限ニアラスト雖トモ雙
方相對ニテ取極候年限ハ本文同様証文面ニ記載致シ置可申事

第五條 質入又ハ書入ノ地所期限ニ至リ貸主借主相談ノ上金穀ヲ返サスシテ地所ヲ
引渡候節ハ舊地主ヨリ金主ヘ可引渡旨別紙ニ相認メ其地ノ戸長加印ノ上金主ヨリ
地券相添ヘ確認ノ証ヲ可願出事

●明治十二年第七
號布告ヲ以テ第五
條ヲ改正セラル

●明治十九年法律
第一號登記法ニ依
リ第九條消滅ス
●明治七年第五十
二號布告ヲ以テ第
十條ヲ改正セラル

第六條 質入レノ地所ハ金主ニテ其地所耕作可致等ニ付テハ地租諸役トモ總テ金主
ニテ可相勤事
但其段管轄廳ヘ届出證書可差出事

第七條 書入ノ地所ハ地主ニテ耕作致シ候儀ニ付地租諸役トモ無論地主ヨリ可相勤
事
但管轄廳ヘ届出ニ不及候事

第八條 管轄違ノ者或ハ同管轄ト雖モ懸隔ノ地所ヲ質ニ取候節ハ其現地ノ村町ヘ金
主ノ名代人相定置其地租諸役トモ差支無之様可爲相勤事

第九條
第十條 一箇所ノ地ヲ二重三重ニ書入候儀ハ不相成候得共若シ第一番ノ金主ヘ引當
ニ入レ置キ候事ヲ第二番ノ金主承知ノ上ニテ地所代價ノ餘分ヲ見込又其地所ヲ引

當ニ借添ヘ致シ候儀ハ不苦尤借主身代限ノ處分ニ相成候節ハ右地所難賣ノ代金ヲ
以テ第一番ノ者ヘ元利金數ヲ引渡シ其餘金ヲ以テ第二番ノ者ヘ元利ノ金數ヲ引渡
シ第三番以下右ニ準シ引渡申ヘク若シ難買ノ金高ヲ以テ先ツ第一番ノ金主ヘ元利
ノ金數ヲ引渡シ其餘金第二番ノ金主ヘ引渡スヘキ元利ノ金數ニ不足スルトキハ其
不足ノ分ヲ償フコト並ニ第三番以下ノ金主ニ償フコトハ平常引當ナキ債主ニ身代

限償却ノ例ニ從ヒ外物品雜賣代價ノ内ニテ相當ノ割賦ヲ以テ引渡可申事

但第二番ノ金主へ受取候證文へハ地所代價ノ餘分ヲ見込借添候旨ヲ記載可申事

第十一條 地所ハ勿論地券ノミナリトモ外國人へ賣買質入書入等致シ金子請取又ハ借受候儀ハ一切不相成候事

第十二條 質入年季中天災ニテ地所流亡等其他ノ全形ヲ失フニ至ル時ハ地券ハ消滅スル理ニ付貸主ヨリ借主ニ對シ外地所又ハ物品ヲ代リ質ニ差出サセ證文書替ヲ求ムルコトヲ得ヘシ若シ代リ質ニ差入ルヘキ地所物品等コレナキトキハ訴訟ノ未身代限リノ處分ニ及フヘシ又池成野地成等ニ變換シ或ハ闕崩等ノタメニ其地ノ幾分ヲ失フトキハ變換ノ模様及殘存ノ大小ニ應シ規則ニ基キテ地券書替願出ヘキ儀ニ付若シ其變換殘存ノ地ハ貸金數高ノ償ヲナスニ足ラサルト見込場合ニ於テハ貸主ヨリ借主ニ對シ外地所又ハ物品ヲ增質ニ差入サセ證文書替ヲ求ムルコトヲ得可シ若シ增質ニ差入ヘキ地所物品等無之時ハコレ亦訴訟ノ未身代限ノ處分ニ及フヘキ事

但貸主借主相示談ハ格別ノ事

第十三條 質入ノ地所年期中天災ニ因リ荒蕪ト相成ハ貸主ヨリ起返ノ見込ヲ定メ借主承諾ノ證書ヲ取リ其管轄廳へ可願出尤モ入費ハ借主ヨリ償フヘキ事

●明治七年第五十二號布告ヲ以テ第十二條ヲ改正セラ

●明治六年第六十七號ヲ追加セラ

●明治七年第七十六號布告ヲ以テ第十六條ヲ追加セラ

但借主起返ノ入費ヲ出スコト能ハサルトキハ證書ヲ以テ其地所ヲ貸主ニ引渡シ可申尤相對示談處置ハ格別ノ事

第十四條 當今質入又ハ書入ニ致シ置年期中ノ分ハ總テ前文規則ニ照準シ當七月限リ證文相改メ可申事

第十五條 是迄質入書入ニ致シ置候分ハ前約ノ年季据置不苦尤證文面等前文規則ニ觸候廉ハ總テ相改可申事

第十六條 從前取結ヒタル質入書入ノ定約ニテ明治六年七月三十一日前ニ期限ヲ過去リタル分ニテ債主ニ於テ貸金返済方ニ付延期ノ勘辨ヲ加フルモノハ來十月三十一日迄ニ其地所々管ノ戶長役場へ届出地所質入書入規則第九條ニ準シ與書割印ヲ受シヘシ若シ右日限内與書割印ヲ受ケスシテ後日其證書ヲ以テ訴訟ニ及フ時ハ質入書入ノ證據ニハ相立サルニ付裁判上雜賣分配ノ時ハ先取ノ權利ヲ失ヒ質入書入ナキ貸借同様ノ處分ニ及フヘキ事
右之通相定候事

●建物書入質規則及建物讓渡規則

明治九年八月 布告第四百十八號

諸建物質入書入規則並賣買讓渡規則別紙ノ通相定候條來ル十二月十一日ヨリ施行可

致此旨布告候事

建物書入質規則

第一條 金穀ノ借主又ハ預リ主ヨリ返濟スヘキ證據トシテ貸主預ニ對シ引當トナス所ノ建物ノ圖面ト證文トニ戸長ノ公證ヲ受ケタル者ヲ貸主預ニ渡シ置キタル建物ノ書入質ト云フ

第二條 書入質ト爲ス建物自身所有ノ地所ニ建テアルトキハ書入質證文ニ自身持地ノ建物ナルコトヲ書入スヘシ又借地ニ建テアルトキハ書入質ヲナスモノ其地主ニ請ヒ其地主ヲシテ貸地タルコトヲ證スルノ與書ヲナサシムヘシ若借地ノ建物ニシテ地主ノ與書ナキ證文ハ書入質ノ効ナキニ付書入質ナキ借用證文ト看做スヘシ但官有ノ借地ニ建テ在ルトキハ其所屬官廳ニ請ヒテ其貸地タルコトヲ證スルノ與書ヲ受クヘシ

第三條

第四條

第五條

第六條

第七條 此規則施行以後建物書入質ノ借用證文又ハ預リ證文ニハ必ス返濟ノ期限ヲ

●明治十年第六號
布告ヲ以テ第二條
但書ヲ追加セラル

●明治二十一年法
律第一號登記法ニ
依リ第三條第四條
第五條第六條消滅
ス

定ムヘシ若シ其期限ヲ定メサル者ハ書入質ノ効ナキニ付書入質ナキ借用證文ト看做スヘシ

第八條 此規則施行以前ニ契約シタル建物質入又ハ引當ノ借用金穀又ハ預リ金穀ニテ返濟期限ノ定メナキ證文ヲ所持スルモノハ明治九年二月廿八日迄ニ金穀借主預又ハ其相續人ニ掛合此規則ニ從ヒタル書入質ノ證文ニ改ムヘシ若シ借主預又ハ其相續人證文ヲ改メサルトキハ明治九年四月三十日迄ニ建物ノアル地ヲ管轄スル裁判所ニ訴フヘシ

但明治九年四月三十日ヲ以テ訴人發途ノ期ト定メ其訴人ノ住所又ハ寄留ノ地所ト裁判所トノ距離每八里ニ一日ノ猶豫ヲ與フ

第九條 此規則施行以前ニ契約シタル建物質入又ハ引當ノ金穀借用證文又ハ預リ證文ヲ所有スル者ハ返濟滿期ニ至ルト至ラサルトニ論ナシ明治九年二月二十八日迄ニ金穀借主預又ハ其相續人ニ掛合此規則ニ從ヒタル書入質ノ證文ニ改ムヘシ若シ借主預又ハ其相續人證文ヲ改メサルトキハ明治九年四月三十日迄ニ建物ノ在ル地ヲ管轄スル裁判所ニ訴フヘシ

但書前全斷

第十條 建物ノ在ル地ヲ管轄スル裁判所ニ於テハ原告人ノ訴狀ヲ受取タルヨリ三日

内ニ裁判所ヨリ被告人ノ建物ノ在ル地ノ戸長ニ對シ報知狀ヲ原告人ニ下付シ速ニ戸長ニ送達セシムヘシ右ノ報知狀ニハ何(府縣)管下(住居寄留)何某ノ訴訟ニ因リ何大區何小區何番地ノ建物書入質トナス證文ニ公證スルコトヲ差留ムル旨ヲ記載スヘシ而シテ其訴訟落著ニ至リシトキハ公證ノ差留ヲ解クコトヲ速ニ戸長ニ報知スヘシ

第十一條 第八條及第九條ノ規則ニ背キ明治九年五月一日以後ニ至リ此規則施行以前ニ契約シタル建物質入又ハ引當ノ金穀借主預證文ヲ所有スル者ハ書入質ノ効ナキニ付書入質ナキ借主預證文ト看做スヘシ

第十二條 一棟ノ建物ヲ二重三重ニ書入質ト爲スコトハ嚴禁ナレトモ若第一番ノ金主ハ書入質ト爲シタルコトヲ第二番ノ金主承諾ナレハ建物代價ノ餘分ヲ見込又其建物質ニ借添ト爲スコトヲ得ヘシ尤借主身代價ノ處分ニ至ルトキハ右建物質ノ代金ヲ以テ第一番ノ者ヘ元利ノ金穀ヲ引渡シ其餘分ヲ以テ第二番ノ者ヘ元利ノ金穀ヲ引渡シ第三番以下右ニ準シ引渡スヘク若雜賣ノ金高ヲ以テ第一番ノ金主ヘ元利ノ金數ヲ引渡シ其餘金第二番ノ金主ヘ引渡スヘキ元利ノ金數ニ不足スルトキハ其不足ノ分ヲ償フコトハ平常書入質ナキ貸主ニ身代價ノ償却ノ例ニ從ヒ外物品雜賣代價ノ内ニテ相當ノ割賦ヲ以テ引渡スヘシ

●明治二十年法律第一號登記法ニ依リ第十三條消滅ス

但第二番ノ金主ニ渡シ置ク書入質ノ證文ニハ建物代價ノ餘分ヲ見込ミ借添タル旨ヲ記載スヘシ

第十三條

第十四條 書入質ノ建物燒失流亡等ニ至リシトキハ貸主ヨリ借主ニ對シ代リ質ヲ受取ルコトノ求メヲ爲スコトヲ得ヘシ若借主代リ質ヲ出スコトヲ肯ハス又ハ出シ能ハサルトキハ借用金穀返濟期限未滿内ト雖トモ貸主ヨリ借主ニ對シ元利返濟ヲ求ムルノ訴ヲ爲スコトヲ得ヘシ (書式零ス)

建物賣買讓渡規則

第一條 自身所有ノ地ニ建テアル建物ヲ賣渡シ又ハ讓渡シテ爲サントスル者賣渡讓渡證文ト圖面トニ戸長ノ與書割印ヲ受クヘシ又借地ニ建テアル建物ノ讓渡證文ニハ其地主ニ請ヒ地主ヨリ貸地タルコトヲ證スルノ與書ヲ受ケタル上ニテ戸長ノ與書割印ヲ受クヘシ

但官有ノ借地ニ建テアルトキハ其所屬管廳ニ請ヒテ其貸地タルコトヲ證スルノ與書ヲ受クヘシ

第二條 建物ノ買受又ハ讓受ヲ爲サント欲スル者ハ自身又ハ其代人建物ノ在ル地ノ

●明治十年第三十八號布告ヲ以テ第一條但書ヲ追加セラレ

戸長役場ニ至リ建物書入質記載帳ヲ見合シタル上其讓渡ノ證文ヲ受取リ然シテ後ニ戸長役場ニ至リ戸長又ハ副戸長ノ面前ニテ何大區何小區何番地ノ何番ノ建物ヲ何某ヨリ讓受タル旨ヲ書入質記載帳ニ記入シ年月日並ニ苗字名ヲ記シ實印ヲ押スヘシ

但官有ノ借地ニ建テ在ルトキハ其所屬官廳ニ請ヒテ其貸地タルコトヲ證スルノ與書ヲ受クヘシ

●明治二十年法律第一號登記法ニ依リ第三條消滅ス

第三條

第四條 書入質トナリタル建物ヲ讓受タル者ハ其建物ノ書入質トナリタル金數ノ償却ヲ引受クヘシ但シ讓受人ニ於テ其建物所有ノ權ヲ拋棄スルトキハ書入質ノ金數ノ償却ヲ引受クルニ及ハス

第五條 第四條ノ場合ニ於テ戸主ノ後ヲ受タル相續人ハ前戸主ヨリ讓受タル建物所在ノ權ヲ拋棄スト雖モ書入質ノ金數ノ償却ヲ引受ヘシ
(書式器ス)

●戸長所有ノ地所建物船舶等質入書入公證及檢閱方

明治十八年三月 內務省達甲第六號

府 縣

戸長所有之地所建物船舶等ヲ質入書入及賣買セントスルトキハ其次席ノモノ次席ノモノ無之トキハ隣町村戸長ヲシテ公證爲取扱來候處自今戸長ニ於テ成規ノ公證ヲナシ郡區長戸長役場ヲ兼メル區役所ハ府知事縣令之檢閱ヲ爲受候様可致此旨相達候事但檢閱之證トシテ公證帳簿ト證書トニ郡區役所之割印ヲナスヘシ

●動產不動産書入金穀貸借規則

明治六年八月布告 第三百六號

動產不動産書入金穀貸借規則左之通相定候條此旨布告候事

動產不動産書入金穀貸借規則

- 一 動產不動産ヲ書入ニ爲シ金穀貸借致シ右期限中書入ノ動產不動産流亡又ハ燒失ヲ爲スト雖トモ負債ハ身代限濟方可申付事
- 一 動產不動産ヲ書入ニ爲シ金穀貸借シ濟方ノ期ニ臨ミ右書入ノ動產不動産ノ相場高トアリテ糶賣ノ價ヒ負債ノ高ヨリ餘分アル時ハ其餘分ハ借主ヘ與フヘシ若シ其價ヒ負債ヨリ不足ナレハ身代限濟方可申付事
- 一 壬申第三百號布告以前家祿ヲ書入ニ爲シ金穀貸借致シタル分ハ家祿ヲ除キ外品物ヲ以テ身代限濟方可申付事

○明治八年第六百二十一號布告ヲ以テ施行ノ下ニ同日以下ニテ加ヘラレ

●金穀貸借請人證人辨償規則

明治八年六月 布告第百二號

明治六年六月第九十五號布告金穀貸借請人證人辨償規則本年十月一日ヨリ左ノ通改正候條同日以後借用證書へ加印候者ハ改正ノ通可相心得此旨布告候事

金穀貸借請人證人辨償規則

第一條 金銀借用返濟相滞リ本人身代限濟方申渡シ猶不相濟ニ於テハ其不足ノ分請人證人ハ濟方申渡猶不相濟ニ於テハ其請人ヲモ身代限申付其上不足相立候ハ、借主並ニ請人ハ勿論其相續人ニ至ルマテ身代持直シ次第皆濟可致事

第二條 借主逃亡又ハ死去跡相續人無之時ハ其請人濟方申渡シ候上不相濟ニ於テハ身代限申付猶不足候ハ、請人ハ勿論相續人ニ至ルマテ身代持直シ次第皆濟可致事

第三條 身代限申付候上ハ不足相立身代持直シ次第皆濟可致旨左ノ離形ノ通裁判所ニ於テ其原證文ノ裏へ記シ押印ノ上貸主へ可相渡置事 (裏書離形零ス)

明治十年十月 司法省達丁第七十五號

●契約證書解釋方法

明治十年十月 司法省達丁第七十五號

契約證書解釋方法ノ儀太政官へ相伺候處別紙ノ通御指令相成候ニ付心得ノ爲メ此旨相達候事

裁判上契約證書解釋方法ノ儀ニ付上申

抑モ契約證書ナル者ハ双方ノ權利義務ヲ定メ其旨趣目的ヲ確實ナラシムルモノニシテ素ヨリ輕易ニ付スヘカヲサレナリ然ルニ各人契約ノ證書動モスレハ疎漏ニ流レ訴訟トナルニ及テ意義ノ解釋ニ苦シム文意汎漫立言曖昧ニシテ契約ノ眞旨目的明劃ナラサルモノアリ意義兩端ニ涉ルモノアリ其他地方ノ慣習ニ因リ文言ノ其趣旨ニ適セサル者アリ裁判官タルモノ活眼以テ之ヲ解シ明察以テ其要旨ヲ探ラサレハ裁判其當ヲ失ヒ冤ヲ吞ミ憾ヲ含ミ却テ人ヲシテ冤屈ニ沈マシム慎マサルヘケンヤ

現今裁判上ノ景況ヲ視ルニ特リ其文詞ニ拘泥シ其契約ノ主旨ヲ誤リ或ハ文意ノ曖昧ナル者ハ概シテ無効トナスカ如キノ弊害アルヲ免レサルナリ果シテ然ルトキハ權利者却テ權利ヲ失ヒ義務者却テ義務ヲ免ル、ニ至リ雙方ノ權義ヲ錯乱シ各人ノ權利財產ノ安固ヲ妨害スル實ニ鮮少ナラサルヘシ是ニ於テ道理ニ基キ便益ヲ測リ猶佛國民法ノ法理ニ據リ契約證書ノ解釋法ヲ指示シテ裁判上ノ誤謬ヲ豫防スルコト目今ノ一大急務タリ

因テハ別紙ノ通疑ハシキ契約證書ノ解釋方法兼テ於當省議定イタシ置キ斯主旨ヲ以

テ伺出ノ向キへ指令ニ及ヒ度又時宜ニ因リ各裁判所へ爲心得相達候儀モ有之へク存候抑モ是等ノ事ハ事理ノ然ラサルヘカラサル者ニ候得共爲念一應相伺候條至急御裁令ヲ請フ

明治十年六月二十二日

司法卿 大木 喬 任

右大臣 岩倉具視殿

御指令

伺ノ趣ハ修正ノ通相心得ヘシ

明治十年七月十七日

(別紙原案ハ畧ス)

修正

契約書解釋心得

- 一 契約書ヲ解釋スルニハ其文字ノミニ依着スルヨリハ寧ロ其契約ヲ爲シタル雙方ノ者ノ旨趣如何ヲ考察スヘシ
- 二 一個ノ條款ニ様ノ意ヲ帶フルトキハ其契約ナカラシムヘキ意ニ之ヲ解スルヨリ寧ロ其效ヲ生セシムルヘキ意ニ之ヲ解スヘシ
- 三 文詞ニ様ノ意ヲ帶ルトキハ其契約ノ目的ニ最モ適シタル意ニ之ヲ解スヘシ

四 文意ノ曖昧タルモノハ其契約ヲ結ヒタル地方ノ習慣ニ從テ之ヲ解スヘシ
五 習慣上通常記載スル條款ヲ契約書中ニ記セサルモ仍ホ之ヲ記シタルモノト見做ヘシ

六 契約書中ノ條款ハ皆全文ノ大意ニ從ヒ互ニ相解釋スヘシ

七 疑ノ場合ニ於テハ契約ハ其義務ヲ行フ可キ者ノ利益トナル様之ヲ解釋ス可シ

八 契約書中ノ文詞如何ニ泛キトモ其契約ヲ結ヒタル双方ノ者互ニ相思擬シタル可シト推知スルヲ得ヘキモノヲ除クノ外ハ之ヲ包含セス

九 義務ヲ解釋スル爲メ契約書中ニ一箇ノ事項ヲ掲ケタリトモ其契約上當然ニ包含ス可キ事件他ノ事項ヲ除去シタル者ト看做ス可シ

●年號月日ヲ略記セシ書類等ハ裁判上證據ニ相立ス

明治六年六月
布告第二百十二號

來ル七月十日以後ノ證書類及ヒ公私ノ文書ニハ總テ年號月日ヲ記載可致若シ疎漏ニシテ年月日ノ内何レニテモ略記シタル時ハ裁判上證據ニ不相立候事

●年月日記略ノ諸證書類裁判上證據ノ件

明治八年二月
司法省達甲第一號

明治六年第二百十二號ヲ以テ年月日ノ内何レニテモ零記シタル諸證書類及ヒ公私文書等ハ裁判上證據ニ不相立旨布告相成候ハ其證書全ク證據ニ不相立ル儀ニハ之レナク只其年月日ノ早晚ヲ定ムヘキ證據ニ相立サル儀ニ候條右等ノ證書ヲ以テ年月日ノ早晚ニ拘ハラス其記入ノ事件ニ付訴訟ニ及フトキハ取揚ケ裁判ニ及フヘク候條此旨布達候事

●連借證書ノ分擔及償却方

明治八年四月
布告第六十三號

金銀其他借用證書中借主數名連印ニテ各自借ノ員數ヲ記載セサル分ハ右連印中失踪又ハ死亡シテ相續人ナキ者有之トモ其借用シタル金銀其他ノ總額ヲ其連印中現在ノ者へ償却可申付候條此旨布告候事

但右證書中分借ノ員數無之トモ別ニ分借ノ明証アルハ此限ニアラス

●諸建物書入質證書面造作記載ノ件

明治十年三月
內務省布達甲第六號

明治八年九月第四百八十八號ヲ以テ諸建物書入質規則布告相成候ニ付テハ自今其證書面ニ造作造作トハ庇、天井、敷居、鴨居、榻、床ノ間、押入等ヲ云フノ有無記載可致此旨布達候事

●金穀貸借ノ證書他人へ讓渡方

明治九年七月
布告第九十九號

金穀等借用證書ヲ其貸主ヨリ他人ニ讓渡ストキハ其借主ニ證書ヲ書換ヘシムヘシ若シ之ヲ書換ヘシメサルニ於テハ貸主ノ讓渡證書有之トモ仍ホ讓渡ノ効ナキモノトス此旨布告候事

但相續人へ讓渡候ハ此限ニアラス

●金穀貸借證書面改作塗抹及數字記載方

明治八年五月
(太政官)達第七十七號

金穀貸借證書面金員數等ヲ改作塗抹シ又ハ一二十等ノ數字ヨリ往々紛雜ヲ醸シ不都合ノ儀不勘候間凡ソ他日ノ證據ヲ要スル書類ハ自今一二十ノ數字ハ壹貳拾ノ字休ヲ用ヒ無餘儀改作塗抹スル時ハ其處ニ押印シ且物品員數等一紙ニ書盡シ難ク又ハ帳簿ヲ爲スモノハ其繼目及ヒ綴目ニ押印シ總テ他日紛雜ノ基ヲ生セサル様深ク注意可致旨各管下へ可曉諭此旨相達候事

●諸品賣買約定書認メ方

明治八年五月
布告第八十七號

諸品賣買取引心得方定書去ル明治四年九月布告ニ及ヒ候處自今相廢シ候尤モ向後賣買ノ約定ハ勿論其他諸取引ノ約定ヲナス證書ニハ成ル可キ丈ケ其約定ノ趣意ヲ明確

ニ書キ載セ疎漏曖昧ノ事之ナキ様注意可致此旨布告候事

●私用證書類ニ官名官印ヲ用フルヲ禁止ス

明治六年六月
布告第二百二十號

本年第九十六號公布之儀ハ取消シ更ニ左ノ通り改正候條此旨相達候事
金銀貸借其他私用ノ證文類へ官名ヲ記載シ或ハ官名ヲ刻シタル印章ヲ相用候儀ハ固
ヨリ有之問敷事ニ候得共問ニハ誤用候者モ有之哉ノ趣不都合ノ事ニ候條屹度令禁止
候事

●華族金穀貸借證契約書等ニハ本人ノ名印ヲ用フルノ

件 明治九年五月
布告第七十六號

華族ノ輩金穀貸借證文及ヒ其他ノ契約書ニ家令家扶ノ名ヲ用ヒ何家何局等ノ印ヲ捺
セシ慣習有之處自今都テ本人ノ名印ヲ用フヘシ若シ本人ノ名印ナキモノハ其効無之
義ト可相心得此旨布告候事

●諸證書ノ姓名ハ自書ノ上實印ヲ用フルノ件

明治十年七月
布告第五十號

●明治十年第六十
四號布告ヲ以テ但
書追加ヲセラレ

諸證書ノ姓名ハ必ス本人自ラ書シテ實印ヲ押スヘシ若シ自書スルコト能ハサル者ハ
他人ヲシテ代書セシムルヲ得ルヲ雖トモ其實印ヲ押スヘシ其代書セシ者ハ本人姓名
ノ傍ニ其代書セシ事由ト已レノ姓名トヲ書シテ實印ヲ押スヘシ
但本文諸證書トハ契約ノ證書(金穀地所建物貸借買賣讓與並預リ證書等凡テ民事
上相互ノ契約ニ係ル者ヲ云)ニ限ルモノトス

●連借證書處分方心得

明治十三年二月
司法省達丁第三號

連借證書處分ノ義ニ付甲號ノ遠熊谷裁判所ヨリ伺出候間乙號ノ通内訓及ヒ候條爲心
得此旨相達候事

(甲號) 熊谷裁判所伺 明治十三年一月二十日

甲乙丙ト連借證書ノ内甲ハ東京乙ハ長崎丙ハ箱館等各所在ヲ異ニセル者アリ右ハ明
治八年第六十三號公布ニ照セハ失踪死亡等ノ事故アルニ非レハ債主之ヲ認求セント
スルニハ斯所在ヲ異ニセル者ト雖トモ其負債者一同ニ對シ認求セサルヲ得サルモノ
、如シ若シ果シテ然リトセハ連借證書ニシテ別段ノ約條之レ無キ分ハ何レモ保證人

ノ義務ト敢テ別ナキモノニ似タリ然レトモ右ハ明治十年六月仙臺裁判所伺御指令ノ意ヲ推考スレハ債主ノ撰ム所ニヨリ其一名又ハ二名ニ對シ全部ノ請求ヲ爲スモ亦妨ケナシト雖モ現ニ被告セラレタル一名又ハ二名ニ於テ他ノ連借者ノ召喚ヲ乞フ場合ニ在テハ又召喚セサルヲ得サルモノ、如シ然ルニ是等一々召喚セシ上ニ非レハ審理判決スルヲ得サルモノトセハ裁判上頗ル不便ヲ生シ徒ラニ夥多ノ年月ヲ費スノミナラス債主ノ損害モ亦甚カテス畢竟分借ノ員數ヲ明記セサル連借者ハ素ヨリ保證人ノ義務トハ全ク其生質ヲ異ニスレハ各自ニ其全額ヲ負擔スヘキ義務ヲシトモ亦謂フ可カラズ左スレハ債主ニ於テ右連借人ノ内現在スル一名又ハ二名ヲ相手取出訴セシトキ被告ニ於テ左ノ連借者ノ召喚ヲ求ル際裁判官ニ於テ其求メニ應シ連借者ヲ召喚スルモ無益ノ時日ヲ經過スルノミニテ現在ノ被告ニ全額返済セシムルモ不都合之レ無キモノト思料スルトキハ直チニ其全額ヲ償却セシメ可然義ト存候得共右ハ前項第六十三號ノ公布ニ牴觸スルノ疑議有之候間一應奉伺候至急仰内訓候也

内訓 明治十三年二月九日

連借證書處分ノ義ニ付伺ノ趣明治八年第六十三號公布ノ主旨ハ借用證書中數名連印各自分借ノ員數ヲ記セサル分ハ右連印中失踪又ハ死亡シテ相續人無キ者等有之トキニ限り現在セル數名ノ者へ償却可申付トノ義ナレハ獨リ一名又ハ二名而已ニ對シ金

額ヲ請求スルコトヲ得ス必ス訴答文例第八章第二十五條ニ照準ス可シ

但仙臺裁判所へノ指令第二條ハ援引不相成候事

●實印ヲ預ケ又ハ預ルヲ禁止ス

明治五年七月 布告第百九十七號

人民實印ノ儀ハ諸事證據ニ相成大切ノ品ニ候處妄ニ他人へ相預ケ候者有之ニ付間々奸詐ノ訴訟差起リ以ノ外ノ事ニ候以來實印相預候儀固ク被禁候條萬一心得違ノ者有之候節ハ預ケ人預リ人共屹度可及處置候事

●婦女子自印ヲ用ユルノ件

明治六年五月 布告第百八十四號

婦女子ニテ一家相續致候者ハ公私トモ他日證據ト爲スヘキ者へ自印相用可申事

●無期限付金穀辨濟方

明治六年一月 布告第十號

金穀貸付證文ノ内返済期限無之歟又ハ出來次第返却可致等ノ證書取置後日訴出ルニ於テハ裁判申渡ヨリ十二箇月ノ内濟方可申付事

但從前今後共無年季貸付中内證屢返済ヲ促スト雖モ滿五年ニ至ル迄一度モ不訴出者ハ裁判ニ不及候尤モ土地家屋等ノ貸賃ハ不動産ニ屬スル儀ニ付滿五年ヲ過ルト

雖モ可及裁判事

●政府ノ工事又ハ物件ノ賣買貸借ニ關スル隨意契約方

明治二十三年九月
勅令第九十三號

朕政府ノ工事又ハ物件ノ賣買貸借ニ關スル隨意契約ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
政府ノ工事又ハ物件賣買貸借ニシテ競争ニ付スルモ入札者ナキトキ又ハ會計規則第七十七條ニ依リ再度ノ入札ニ付スルモ尙ホ豫定價格ノ制限ニ達セサルトキハ隨意契約ヲナスコトヲ得但之カ爲メ最初競争ニ付スルトキ定メタル價格及其他ノ條件ヲ變更スルコトヲ得ス

利息制限法

明治十年九月
布告第六十六號

利息制限法左ノ通相定候條此旨布告候事

利息制限法

第一條 凡ソ金銀貸借上ノ利息ヲ分テ契約上ノ利息ト法律上ノ利息トス
第二條 契約上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ定メ得ヘキ所ノ利息ニシテ元金百

圓以下一箇年ニ百分ノ二十^二百圓以上千圓以下百分ノ十五^一千圓百分ノ十二^二以下トス若シ此限ヲ超過スル分ハ裁判上無効ノモノトシ各其制限ニマテ引直サシムヘシ

第三條 法律上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ利息ノ高キ定メサルトキ裁判所ヨリ言渡ス所ノ者ニシテ元金ノ多少ニ拘ラス百分ノ六^六トス

第四條 第二條ニ依リ定限利息ノ外總テ人民相互ノ契約ヲ以テ禮金棒利等ノ名目ヲ用ユルトモ總テ裁判上無効ノ者トス

第五條 返還期限ヲ違フトキハ債主ヨリ債主ニ對シ若干ノ償金罰金違約金料料等ヲ差出スコトヲ約定スルコトアルモ概シテ損害ノ補償ト看做シ裁判官ニ於テ該債主ノ事實受ケタル損害ノ補償ニ不當ナリト思量スルトキハ之ニ相當ノ減少ヲ爲スコトヲ得

●金穀等渡方延滞及無期限約定ノ金穀利足定メ方

明治六年三月
司法省布達第四十三號

預ケ金穀
諸職人手間代

賣掛代金
地代

●明治七年司法省
第二十二號布達
以テ但書ヲ追加セ
ラル

(參照)明治六年
三月司法省達第三
十八號金穀貸借利
息ノ儀從前ノ仕來

- 店賃
- 敷金
- 受負金
- 小作金穀
- 雇人給金
- 諸品ノ損料
- 立替金穀
- 證據金
- 手附金
- 村入用ノ割合金穀
- 飯料
- 無利息貸金穀

右ノ類ニテ金穀等可相渡期限ニ臨ミ渡方延滞致候節ハ其期限ノ日且期限ナクシテ金穀入用次第ニ相渡旨ノ約定ヲ爲シタル分ハ渡方ノ掛合ヲ受ケ候日ヨリ何レモ利息ヲ生シ可申筋ニ付其節ハ双方示談ヲ以テ利息ノ歩合ヲ定メ證據受取渡シ致スヘシ若シ其儀ナクシテ過テ訴訟ニ及フ時ハ明治六年第九十二號布告ニ由リ處分致シ候條此旨可相心得候事

但債主利息ヲ請求シテ負債者承諾セサル時ニ限リ本文ノ處分ニ及フ可シ若シ雙方示談整フカ又ハ債主ニ於テ請求ヲ爲サ、ル分ハ此例ニアラス

●金穀貸借利息計算期限 明治六年十月 司法省達第七十四號

明治六年當省第三十八號金穀貸借利息ノ儀裁判決定迄計算可致旨及布達置候處右ハ

ニテ出訴前月迄ノ
分而已計算致來候
處以來ハ裁判決定
迄ノ利息ヲモ計算
可致事

貸借ノ金穀返済ノ日亦ハ身代限配當處分濟ノ日迄利息ヲ計算致シ候儀ト可相心得此旨布達候事

●代人規則 明治六年六月 布告第二百十五號

人民一般商業及其他ノ事ニ因リ代人ヲ以テ契約取引等致シ候規則別紙ノ通被定候條此旨相達候事

代人規則

- 第一條 凡ソ何人ニ限ラズ已レノ名義ヲ以テ他人ヲシテ其事ヲ代理セシムルノ權アルヘシ
- 但シ本人幼年等ニテ其事理ヲ辨シ難キ者ハ其後見人及親族ノ者協議ノ上代人ヲ任スルヲ得ヘシ
- 第二條 凡ソ他人ノ委任ヲ受ケ其事件ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事件ヲ委任スル者ハ本人ナリ故ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ關係タル可シ
- 第三條 凡ソ代人ハ心術正實ニシテ滿二十歳以上ノ者ヲ選ムヘシ
- 第四條 代人ハ總理代人部理代人ノ別アリ總理代人ハ其本人身上諸般ノ事務ヲ代理スル者ニシテ部理代人ハ特ニ其委任スル部内ノ事務ヲ代理スルヲ得ル者トス

●明治九年第四十
四號布告ヲ以テ第
三條ヲ改正セラ
ラル

第五條 凡ソ本人ヨリ代人ヲ任シ他人ト契約取引等ヲ爲サント欲スル者ハ必ス實印ヲ押シテ委任狀ヲ與フ可シ

但シ其家業取扱フ場所ニ於テ通常ノ事務ヲ取扱ハシムルノ類ハ別段委任狀ヲ與フルニ及ハス

第六條 委任狀ハ總理代人又ハ部理代人タル事及ヒ其委任シタル權限ヲ明白ニ記載スヘシ

第七條 委任狀書式左ノ通

拙者共儀某ノ事件ニ付何誰ヲ以テ總理代人ト定メ拙者ノ名義ニテ左ノ權限ノ事ヲ代理爲致候事

一 何々ノ事但權限ノ次第ヲ分條記載ス可シ

右代理ノ委任狀依而如件

年號何年何月何日

住所身分
姓

名 印

後見人等ハ住所身分何誰ノ後見人何誰ト記スヘシ

第八條 代人ヲ任スルノ期限ハ豫メ規定シ難キモノト雖トモ其本人幼弱疾病事故等ニテ長ク委任セントスル時ハ其地ニ新聞紙アラハ之ニ記入セスシテ世上ニ公布ス

ヘシ

● 詞訟又ハ勸解ニ付代人差出方

明治十七年一月 布達第一號

明治十三年五月司法省甲第二號布達左ノ通改正ス

詞訟又ハ勸解ニ付己ムヲ得ズ代人ヲ出サントスル者ハ親屬又ハ相當ノ者ヲ選ミ管轄裁判所ノ許可ヲ受ク可シ但代人タル者同時ニ二人以上ヨリ二件以上ヲ受任シ其他不適當ノ所爲アリト認ムル時ハ裁判所ニ於テ之ヲ差止ムルコトアルヘシ

● 無能力者法律ニ定メタル代人及民事擔當人

明治十四年十二月 布告第七十三號

治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱スル者ハ左ノ通無能力者

- 一 未丁年者
- 二 妻タル者
- 三 白痴瘋癲人
- 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者

法律ニ定メタル代人

- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人
- 二 夫タル者
- 三 白痴瘋癲人ノ保管者
- 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人

民事擔當人

- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲ爲ス者
- 二 夫タル者
- 三 白痴瘋癲人ノ保管者
- 四 雇主

但雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時

●後見人職務ノ權限

明治十六年七月 內務省達番外

後見人職務權限ノ義ニ付別紙ノ通り太政官へ相伺御指令相成候條爲心得此旨相達候事

後見人職務權限ノ義ニ付伺

後見人規則發布ノ義ハ目下急施ヲ要スル事項ニ付客年四月十三日上稟シタル旨趣モ有之就テハ伺出ノ府縣へ追テ一般ノ法律制定相成マテ地方從來ノ慣習ニ依リ可取扱旨指令及ヒ來候處爾後後見職務ノ權限伺出ル府縣夥多有之抑後見人ハ當初親屬ニ於テ選任シタルモノナレトモ常ニ監察ス可キ方法モ無之ニ付規則御制定マテ不動産買賣讓渡質書入等ニ限リ其證書又ハ願書ニ親屬連署ノ上ナラテハ戶長ニ於テ公證ヲ與ヘサル様相定メ其旨指令及ヒ度右ハ未タ成規モ無之此段相伺候也

明治十六年五月三十日

內務卿 山田 顯 義

太政大臣 三條實美殿

伺之趣聞届候事

明治十六年七月三日

●雇人ノ名稱

明治十年十月 司法省甲第一號

去明治六年十二月十日本省第百九十號達ヲ以テ雇人名稱ノ儀相達置候處今後戶籍届濟ノ有無ニ拘ハラス雇主雇人相許諾シテ一月以上ノ期限ヲ定メ雇使スル者ハ雇人ヲ以テ論ス可ク候條此旨相達候事

●家資分散法

明治二十三年八月
法律第六十九號

朕家資分散法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

家資分散法

第一條 民事訴訟法ノ強制執行處分ニ因リ義務ヲ辨濟スル資力ナキ債務者ニ對シテハ管轄裁判所ハ職權ニ因リ又ハ中立ニ因リ決定ヲ以テ家資分散者タルノ宣告ヲ爲ス可シ

右ノ決定ハ口頭辯論ヲ要セスシテ之ヲ爲スコトヲ得

此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二條 前條ノ申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三條 第一條ノ宣告ハ裁判所及市町村ノ揭示場ニ揭示シテ之ヲ公告ス可シ

第四條 家資分散者ハ其宣告ヲ受ケタル日ヨリ選舉權及被選舉權ヲ失フ

家資分散者ノ復權ニ付テハ商法第五十五條以下ヲ準用ス

第五條 商法及本法施行以後ニ於テ從前ノ法律中身代限處分ヲ受ケタル者ニ對シ公

權ノ喪失ヲ定メタル條項ハ破産又ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケタル者ニ對シ効力ヲ有

六

●婦離姻ヲ請フモ夫肯セサル節出訴ノ件

明治六年五月
布告第六十二號

夫婦ノ際己ムヲ得サル事故アリテ其婦離縁ヲ請フト雖トモ夫之ヲ肯セス之レカタメ數年ノ久ヲ經テ終ニ嫁期ヲ失ヒ人民自由ノ權理ヲ妨害スルモノ不少候自今右様ノ事件於有之ハ婦ノ父兄弟或ハ親戚ノ内附添直ニ裁判所へ訴出不苦候事

●離縁爭訟處分方

明治十年七月
司法省達丁第五十號

大 審 院

上 等 裁 判 所

地 方 裁 判 所

離縁爭訟ノ儀ニ付甲號ノ通名古屋裁判所ヨリ伺出ニ因リ乙號ノ通太政官へ上申シ御裁令ノ上丙號ノ通及指令候條此段爲心得相達候事

甲號 士族養戶主離縁ノ儀ニ付伺
十年五月十八日

名古屋裁判所

當主實子ナシ親族或ハ他ヨリ養子致シ既ニ戸主ト成タル後身持放蕩養父母等ノ侍養

ヲ闕キ又ハ卑族ノ扶助ヲナサ、ル等ヨリ一家不和ヲ生シ遂ニ尊屬及ヒ親戚連署シテ
 戸主ノ離縁ヲ願フ者往々有之然ニ其故障ナク養實熟議ノ調ヒタルハ府縣限リ離縁聞
 届行政ト裁判トノ權ハ熟ト不熟トニヨリ別チ來リタル所明治八年四月中別紙佐賀縣
 伺ヘ朱書ノ如ク内務省指令アリシヨリ假令戸主及ヒ實家ニ於テ云々故障アリ未タ承
 諾ナサスト雖モ養母又ハ養祖父母養家ノ親戚連署シ縣廳ヘ願出ル時ハ直ニ行政官ニ
 於テ離縁申付ルニ至レリ、愛知縣ノ如キ現今依
 之處分スル者アリ抑如此ニシテ養實熟議相整以テ離縁ヲ要ス
 ル者固ヨリ行政ノ權内ナリト雖モ其戸主及ヒ實家之ヲ肯セサル等ハ即チ裁判權内ニ
 シテ行政官ノ處斷スヘキニ非ス然ニ今哉兩屬ニ互レリ權限歸著スル所以來如何相心
 得可然哉別紙相添此段相伺候也 (別紙略ス)

乙號 名古屋裁判所養子ノ戸主離縁ノ儀ニ付太政官ヘ上稟十年五
 月六日

告達若クハ裁令ニ據リ事情ヲ聞知シ離縁ヲ聽許スルハ現今ノ體裁姑ク地方官ノ職任
 トスルモ甲之ヲ要求シ乙之ヲ肯セス雙方相爭ノ處分ニ至テハ之ヲ裁判所ニ訴ヘ裁判
 官ノ裁判ニ任スヘキコト當然ノコトナラン
 別紙名古屋裁判所伺援引スル所ノ内務省指令ニ據ル時ハ養子ノ戸主縱令之ヲ承諾セ
 サルモ放蕩一家ノ浮沈ニ管スルノ事實アリテ養母親戚連署シテ願出ツルニ於テハ事
 情聞知ノ上離縁ヲ聞届クルコト地方官ノ權内ニ委スルモノ、如シ然ル時ハ離縁ノ際

雙方熟議整ハス如何ナル紛爭ヲ生スルモ地方官之ヲ裁判處分スヘキ趣是レ決シテ其
 理ナキナリ抑モ離縁ノ爭モ即チ人民私權上ノ爭ニシテ他ノ普通ノ爭訟ト異ナル所ナ
 シ然ルチ之ノミ地方官ノ權任トスル時ハ裁判所ノ權限ニ抵觸シ如何ニモ不都合ナラ
 シ現今既ニ各地方裁判所ヲ設ケラレタル上ハ右等ノ裁判ハ勿論裁判所ノ權任ナリト
 思考セリ因テ左ノ通指令可及ト存候得共一應爲念仰高裁候條至急御裁可相成度候也

司法卿大木喬任代理

明治十年五月六日

二等判事玉乃世履

右大臣岩倉具視殿

丙號 指 令

伺ノ趣養實熟議整ハサル爭訟ヲ裁判スルハ固ヨリ裁判所ノ權ナリト心得可シ

●婚姻事件養子縁組事件及禁治産事件ニ關スル訴訟規

則 明治二十三年十月
 法律第四百四號

朕民事訴訟法ノ補則トシテ婚姻事件養子縁組事件及ヒ禁治産事件ニ關スル訴訟規則
 ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトナ

命ス

婚姻事件養子縁組事件及ヒ禁治産事件ニ關スル訴訟規則

第一章 婚姻事件及ヒ養子縁組事件ノ訴訟手續

第一條 婚姻ノ無効、離婚又ハ同居ヲ目的トスル訴訟ハ夫カ普通裁判籍ヲ有スル地

ノ地方裁判所ノ管轄ニ專屬ス

縁組ノ無効又ハ離縁ヲ目的トスル訴訟ハ養子ヲ爲シタル者カ普通裁判籍ヲ有スル

地ノ地方裁判所ニ專屬ス

婚姻又ハ縁組ノ不成立ニ關スル訴訟ハ被告カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ地方裁判所

ニ專屬ス

第二條 婚姻事件及ヒ縁組事件ニ付テハ檢事ハ口頭辯論ニ立會フノ外受命判事若ク

ハ受託判事ノ面前ニ於テ爲ス審問ニモ亦立會フコトヲ得檢事ニハ職權ヲ以テ總テ

ノ期日ヲ通知ス可シ

檢事ハ婚姻又ハ縁組ヲ維持スル爲メ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ提出スルコトヲ得調

書ニハ檢事ノ氏名及ヒ其中立ヲ記載ス可シ

第三條 婚姻ノ不成立、無効、離婚及ヒ同居ノ訴ハ之ヲ併合スルコトヲ得縁組ノ不成

立、無効及ヒ離縁ノ訴モ亦同シ

婿養子縁組ノ場合ニ於テハ婚姻ノ不成立、無効、離婚又ハ同居ノ訴ニ縁組ノ不成立、

無効又ハ離縁ノ訴ヲ併合スルコトヲ得

本條ノ訴ニ他ノ訴ヲ併合シ及ヒ他ノ種類ノ反訴ヲ提起スルコトヲ得ス但本條ノ訴

ノ原因タル事實ヨリ生スル損害賠償及ヒ養料ノ請求ニ付テハ此限ニ在ラス

第四條 判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ訴ニ於テ提出シタル以外ノ理

由ヲ主張スルコトヲ得

第五條 婚姻ノ無効若クハ離婚ノ訴又ハ縁組ノ無効若クハ離縁ノ訴ニ付キ棄却ノ言

渡ヲ受ケタル原告ハ前訴訟ニ於テ又ハ訴ノ併合ニ因リ主張スルヲ得ヘカリシ事實

ヲ獨立ナル訴ノ理由トシテ主張スルコトヲ得ス被告ニ在テハ反訴ノ理由ト爲スヲ

得ヘカリシ事實ニ付テモ亦同シ

第六條 民事訴訟法第百一十一條第二項第三項、第二百十條及ヒ第三百三十五條乃至

第三百四十一條ノ規定ハ之ヲ適用セス

第七條 口頭辯論ノ期日ニ被告カ出頭セサルトキハ原告ノ申立ニ因リ新期日ヲ定ム

可シ

被告ノ在廷セサル場合ニ於テ期日ヲ定メタルトキハ其都度被告ヲ呼出ス可シ

缺席判決ハ本條ノ手續ノ效アラサルトキニ限り被告ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得

第八條 裁判所ハ原告若クハ被告ノ自身出頭ヲ命シテ其原告若クハ被告又ハ其相手方若クハ檢事ノ主張シタル事實ニ付キ原告若クハ被告ヲ審訊スルコトヲ得
審訊ヲ受ク可キ原告若クハ被告カ受訴裁判所ニ出頭スル能ハサルトキ又ハ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在ルトキハ受命判事若クハ受託判事ニ依リ審訊ヲ爲スコトヲ得

出頭セサル原告若クハ被告ニ對シテハ審訊期日ニ出頭セサル證人ニ對スル規定ヲ適用ス

第九條 和諧ノ調フ可キ見込アルトキハ裁判所ハ職權ヲ以テ離婚又ハ離縁ノ訴ニ關スル手續ヲ長クトモ一箇年間中止スルコトヲ得

第十條 裁判所ハ婚姻又ハ縁組ヲ維持スル爲メ當事者ノ提出セサル事實ヲ斟酌シ且職權ヲ以テ證據調ヲ爲スコトヲ得但裁判前ニ當事者ヲ審訊ス可シ

第十一條 婚姻及ヒ縁組ノ不成立若クハ無効又ハ離婚若クハ離縁ヲ言渡ス判決ハ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達ス可シ

第十二條 婚姻事件及ヒ縁組事件ノ判決ニ付テハ假執行ノ宣言ヲ付スルコトヲ得ス

第十三條 假處分ニ關シ殊ニ配偶者ノ一方又ハ養子カ住家ヲ去ルノ許可及ヒ養料ノ供給ヲ申立テタル場合ニ於テハ民事訴訟法第七百五十六條乃至第七百六十三條ノ

規定ヲ準用ス

第十四條 婚姻及ヒ縁組ノ不成立若クハ無効又ハ離婚若クハ離縁ヲ言渡シタル判決確定シタルトキハ裁判所ノ掲示板ニ揭示シテ之ヲ公告ス可シ

第十五條 民法ノ規定ニ從ヒ檢事ノ職權ヲ以テ起スコトヲ得ヘキ無効ノ訴ニ付テハ以下數條ニ定メタル特別ノ規定ニ從フ

第十六條 檢事又ハ第三者ヨリ訴ヲ起ストキハ夫婦又ハ養親子ヲ以テ相手方ト爲ス夫婦又ハ養親子ノ一方ヨリ訴ヲ起ストキハ他ノ一方ヲ以テ相手方ト爲ス

第十七條 檢事ハ自ラ訴ヲ起ササルトキト雖モ訴訟ヲ進行シ殊ニ獨立シテ申立ヲ爲シ及ヒ上訴ヲ爲スコトヲ得

第十八條 檢事上訴ヲ爲シタルトキハ上訴手續ニ於テ前審ノ當事者雙方ヲ相手方ト看做ス

檢事カ訴訟人タル場合ニ於テ當事者ノ一方カ上訴ヲ爲シタルトキハ上訴手續ニ於テ他ノ一方ト檢事トヲ相手方ト看做ス

第十九條 訴訟人タル檢事カ敗訴スル場合ニ於テハ民事訴訟法第一編第二章第五節ノ規定ニ從ヒ勝訴者タル相手方ニ生シタル費用ハ國庫ノ負擔トス

第二章 禁治產事件ノ訴訟手續

第二十條 禁治産ノ申立ハ治産ヲ禁セラル可キ者カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第二十一條 申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其中立ニハ申立ノ理由タル事實及ヒ證據方法ノ表示ヲ包含ス可シ

第二十二條 裁判所ハ申立ニ表示シタル事實及ヒ證據方法ニ依リ職權ヲ以テ心神喪失ノ常況ニ在ルヤ否ヲ定ムル爲メニ必要ナル探知ヲ爲シ且適當トスル證據方法ヲ調フ可シ

裁判所ハ訴訟手續ヲ開始スルノ前診斷書ノ提出ヲ命スルコトヲ得

檢事ハ總テノ場合ニ於テ申立ヲ爲シテ訴訟手續ヲ進行スルコトヲ得
證人及ヒ鑑定人ノ訊問及ヒ宣誓ニ付テハ民事訴訟法第二編第一章第六節及ヒ第七節ノ規定ヲ適用ス

第二十三條 裁判所ハ公開セサル法廷ニ於テ一人又ハ數人ノ鑑定人ノ立會ヲ以テ治産ヲ禁セラル可キ者ヲ訊問ス可シ此訊問ハ受託判事ヲシテ之ヲ爲サシムルコトヲ得

右訊問ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ實施シ難ク又ハ裁判ノ爲メニ必要ナラス又ハ治産ヲ禁セラル可キ者ノ健康ニ害アリトスルトキハ之ヲ爲ササルコトヲ得

第二十四條 禁治産ノ宣言ハ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

右宣言ハ豫メ治産ヲ禁セラル可キ者ノ心神喪失ノ常況ニ付キ一人又ハ數人ノ鑑定人ヲ訊問シタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二十五條 裁判所ハ治産ヲ禁セラル可キ者ノ身體ノ監護又ハ財産ノ保存ニ付キ必要ナル處分ヲ命スルコトヲ得

第二十六條 訴訟手續ノ費用ハ治産ヲ禁シタル場合ニ於テハ禁治産者之ヲ負擔シ其他ノ場合ニ於テハ禁治産ノ申立ヲ爲シタル者之ヲ負擔ス可シ但檢事カ申立ヲ爲シタルトキハ國庫之ヲ負擔ス

第二十七條 禁治産ニ付キ爲シタル決定ハ職權ヲ以テ申立人及ヒ檢事ニ之ヲ送達ス可シ

第二十八條 禁治産ヲ宣言スル決定ハ法律上ノ後見人アルトキハ其後見人ニ職權ヲ以テ之ヲ通知ス可シ

第二十九條 申立人及ヒ檢事ハ禁治産ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

抗告裁判所ノ訴訟手續ニハ第二十二條ノ規定ヲ準用ス

第三十條 禁治産ヲ宣言スル決定ニ對シテハ一箇月ノ期間内ニ訴ヲ以テ不服ヲ申

立ツルコトヲ得
 訴ヲ起スノ權利ハ禁治産者、其後見人及ヒ民法ノ規定ニ從ヒ禁治産ノ申立ヲ爲ス
 ノ權ヲ有スル者ニ屬ス
 右期間ハ禁治産者ニ對シテハ禁治産ヲ知リタル日ヲ以テ始マリ其他ノ者ニ對シテ
 ハ後見人ノ選定ヲ以テ始マリ又法律上ノ後見ノ場合ニ於テハ其決定ヲ法律上ノ後
 見人ニ通知スルヲ以テ始マル
 第三十一條 訴ハ區裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所ノ管轄ニ專屬ス
 第三十二條 禁治産ニ對シテ不服ヲ申立ル訴ニハ他ノ訴ヲ併合スルコトヲ得ス
 反訴ハ之ヲ爲スコトヲ許サス
 第三十三條 禁治産者カ訴ヲ起サントスルトキハ其申立ニ因リ受訴裁判所ノ裁判長
 ハ訴訟代理人トシテ辯護士ヲ之ニ附添ハシム可シ
 第三十四條 第六條及ヒ第七條ノ規定ハ本章ニモ之ヲ準用ス
 第三十五條 第二十三條及ヒ第二十四條第二項ノ規定ハ不服申立ノ訴ニ付テノ訴訟
 手續ニ之ヲ準用ス
 裁判所ハ區裁判所ニ於テ爲シタル鑑定ヲ十分ナリト認ムルトキハ鑑定人ノ訊問ヲ
 爲ササルコトヲ得

第三十六條 不服申立ノ訴ヲ理由アリトスルトキハ禁治産ヲ宣言シタル決定ヲ取消
 ス可シ
 然レトモ此取消ノ判決ハ後見人ノ既ニ爲シタル行爲ノ効力ニ影響ヲ及ホサス
 第三十七條 不服申立ノ訴ニ關スル訴訟費用ニ付テハ第二十六條ノ規定ヲ準用ス
 第三十八條 受訴裁判所ハ禁治産事件ニ付キ爲シタル總テノ終局判決ヲ區裁判所ニ
 通知ス可シ
 第三十九條 禁治産ノ解除ニ付テハ第二十五條ヲ除クノ外本章ノ規定ヲ準用ス
 第四十條 準禁治産事件ニ付テハ左ノ特別ナル規則ヲ除クノ外本章ノ規定ヲ準用
 ス
 第二十二條第二項ハ浪費者ニ之ヲ適用セズ
 又同第三項、第二十五條、第三十三條及ヒ檢事ニ關スル規定ハ總テノ準禁治産者ニ
 之ヲ適用セズ
 準禁治産ヲ解除スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

●民事訴訟費用法

明治二十三年八月
法律第六十四號

朕民事訴訟費用法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ

施行スヘキコトヲ命ス

民事訴訟費用法

第一條 民事訴訟法ノ規定ニ於ケル訴訟費用ハ以下數條ノ規定ニ從ヒ之ヲ算定ス

第二條 訴狀其他總テ書類ノ書記料ハ半枚十二行二十字詰ニ付キ金二錢五厘トス但

半枚ニ滿タサルモノモ亦同シ

圖面ハ一葉ニ付金十錢トス但別ニ測量ヲ要シタルトキハ其測量費ハ裁判所ノ意見

ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第三條 翻譯料半枚十二行二十字詰ニ付キ金五十錢トス但半枚ニ滿タサルモノモ亦

同シ

第四條 民事訴訟用印紙法ニ從ヒ貼用シタル印紙ノ費額ハ其代價ニ依ル

第五條 執達吏ノ手数料及ヒ立替金ハ執達吏手数料規則ノ規定ニ從フ

第六條 郵便料、電信料及ヒ運送料ハ其實費ニ依ル

第七條 官報、公報及ヒ新聞紙ヲ以テ公告シタル公告料ハ各其定價ニ依ル

第八條 民事訴訟法第百二十七條ノ規定ニ從ヒ辯護士ノ附添ヲ命シタルトキハ其報

酬ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第九條 當事者ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢トス但滞在費ヲ給スル場合ニ於テ

ハ此日當ヲ二十五錢トス

第十條 證人ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢トス但滞在費ヲ給スル場合ニ於テハ
此日當ヲ給セズ

第十一條 鑑定人及ヒ通事ノ日當ハ出頭一度ニ付キ金五十錢乃至五圓ノ範圍内ニ於
テ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

鑑定ヲ爲スニ付キ別ニ支出シタル費用ハ其實費ニ依ル

第十二條 當事者ノ滞在費ハ滿八里以外ノ地ヨリ來リ滞在スルトキハ一日金二十五
錢トシ證人鑑定人及ヒ通事ノ滞在費ハ一日五十錢トス

第十三條 當事者、證人、鑑定人及ヒ通事ノ旅費ハ海陸滿一里毎ニ付キ金十錢トス
通路兩線以上アルトキハ最近ノ通路ヲ以テ旅費ヲ算定ス

外國ニ在ル當事者ノ旅費ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

第十四條 判事及ヒ裁判所書記檢證ノ爲メ實地臨檢ヲ爲スニ付テノ旅費及ヒ滞在費
ハ證人ニ準ス

第十五條 本法ニ定メサル必要ノ費用ハ其實費ニ依ル

第十六條 強制執行及ヒ非訟事件ニ關ル費用ハ執達吏手数料規則ニ定メタルモノヲ
除ク外前數條ノ規定ヲ準用シテ之ヲ算定ス

強制執行又ハ非訟事件ニ關シテ保管人若クハ管理人ヲ任命シタルトキハ其費用ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル所ニ依ル

●民事訴訟用印紙法 明治二十三年八月 法律第六十五號

朕民事訴訟用印紙法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

民事訴訟用印紙法

第一條 民事訴訟ノ書類ニハ以下數條ノ規定ニ從ヒ其正本ニ印紙ヲ貼用ス可シ但裁判所書記ニ口述シテ調書ヲ作ラシメタルトキハ其調書ニ印紙ヲ貼用ス可シ

第二條 財産權上ノ請求ニ係ル第一審ノ訴狀ニハ訴訟物ノ價額ニ應シ左ノ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ

- 訴訟物ノ價額金五圓マテ 貳拾錢
- 同 拾圓マテ 三拾錢
- 同 貳拾圓マテ 六拾錢
- 同 五拾圓マテ 壹圓五拾錢
- 同 七拾五圓マテ 貳圓貳拾錢

同 百圓マテ

參圓

同 貳百五拾圓マテ

六圓五拾錢

同 五百圓マテ

拾圓

同 七百五拾圓マテ

拾參圓

同 千圓マテ

拾五圓

同 貳千五百圓マテ

貳拾圓

同 五千圓マテ

貳拾五圓

同 五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ貳圓ヲ加フ

訴訟物ノ價額ヲ算定スルニハ民事訴訟法第三條乃至第六條ノ規定ニ從フ

第三條 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ付テハ其訴訟物ノ價額百圓ト看做シ印紙ヲ貼用ス可シ

財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ト其訴訟ニ由テ生スル財産權上ノ訴訟ト併合スルトキハ其多額ナル一方ノ訴訟物ノ價額ニ依リ印紙ヲ貼用ス可シ

第四條 本訴ト反訴ト其目的カ同一ノ訴訟物ナルトキハ反訴ノ訴狀ニ印紙ヲ貼用スルヲ要セス

第五條 控訴狀ニハ第二條ノ規定ニ從ヒ其半額上告狀ニハ其全額ノ印紙ヲ加貼ス可

第六條 左ニ掲クル書類ニハ五拾錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第一 抗告

第二 故障

第三 證據調ノ申立

第四 假差押及ヒ假處分ノ申請

第五 判決ノ送達アラフコトヲ求ムル申立

第六 執行力アル正本ヲ求ムル申立但此正本ノ數通ヲ求ムルトキハ其一通毎ニ五拾錢ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用ス可シ

第七條 和解及ヒ督促手續ニ付キ民事訴訟法第三百八十一條第三項及ヒ第三百九十條ノ規定ニ依リ訴カ區裁判所ニ繫屬スルトキハ第二條第三條ノ規定ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ

第八條 再審ヲ求ムルノ訴狀ニハ其訴ヲ爲ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第九條 原狀回復ノ申立ニハ其書面ヲ差出ス可キ裁判所ノ審級ニ依リ相當ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第十條 答辯書其他前數條ニ掲ケサル申立及ヒ申請ニハ貳拾錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第十一條 民事訴訟法第九十七條第一號ノ場合ノ外此法律ニ從ヒ印紙ヲ貼用セサル民事訴訟ノ書類ハ其效ナキモノトス但印紙ヲ貼用セス又ハ貼用スルモ不足アルトキハ裁判所ハ相當印紙ヲ貼用セシメ之ヲ有効ナラシムルヲ得

第十二條 印紙ノ種類及ヒ貼用方ハ明治十七年第四號布達ニ依ル

第十三條 印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム其他ニ於テ賣買スルコトヲ許サス

第十四條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ貳拾圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知テ之ヲ買取シタル者ハ拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス

第十五條 前條ノ規定ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ減輕、再犯加重及ヒ數罪俱發ノ例ヲ用サス

第十六條 第六條第十條乃至第十二條ノ規定ハ非訟事件ニ之ヲ準用ス

●民事上帶勳有位者喚問取扱方
明治十八年二月
司法省達丁第四號

民事上帶勳有位者喚問取扱方ノ儀ニ付甲號ノ通太政官ニ相伺候處乙號ノ通御指令相

第四十六類 民事及民事訴訟雜件

成候條爲心得此旨相達候事

(甲號) 民事上帶勳有位者喚問取扱ノ儀ニ付伺
民事上帶勳有位者喚問取扱ノ儀ニ付テハ未タ一定ノ法規無之候然ルニ有位者喚問ノ儀ハ既ニ奏請ヲ經テ喚問取扱來候先例モ有之帶勳者ニ至テハ未タ先例無之候得共彼此同一ノ取扱振ニ可相成ハ勿論ノ儀ト存候而シテ右喚問ヲ要候時ハ本年三月二十一日付勅奏官華族等犯罪取扱方ノ儀ニ對シ御裁令ノ趣モ有之依テ民事ニ於テモ同様帶勳者ハ勳六等有位者ハ從六位以上ニ限り其時々奏問可致儀ト心得可然哉此段相伺候也

明治十六年六月四日

司法卿 大木 喬 在

太政大臣三條實美殿

(乙號)

伺之通

明治十八年一月二十四日

●登記法及公證人規則ニ關スル抗告手續

明治十九年十一月
司法省令甲第三號

今般法律第一號第二號ヲ以テ登記法及公證人規則制定相成候ニ付其抗告手續左ノ通
之ヲ定ム

抗告手續

- 第一條 登記官吏又ハ公證人ノ職務執行ニ關シ抗告ヲ爲ス者ニ抗告狀ヲ其登記官吏又ハ公證人ニ差出ス可シ
- 第二條 登記官吏又ハ公證人抗告狀ヲ受取リタルトキハ其翌日ヨリ三日以内ニ意見ヲ附シ且ツ關係書類ノ寫ヲ添ヘ抗告狀ヲ管轄始審裁判所ニ送致ス可シ
- 第三條 登記官吏又ハ公證人若シ前條ノ期限内ニ抗告狀ヲ管轄始審裁判所ニ送致セサルトキ又ハ急速ヲ要スル場合ニ於テハ抗告者ハ直チニ管轄始審裁判所ニ抗告狀ヲ差出スコトヲ得
- 始審裁判所ハ抗告ヲ受ケタル登記官吏又ハ公證人ヲシテ意見書ヲ差出サシメ及ヒ關係書類ヲ求ムルコトヲ得
- 第四條 登記官吏又ハ公證人ハ其職務執行上ニ關シ抗告ヲ受ケタルトキハ其處分ヲ停止ス可シ
- 第五條 抗告狀ヲ受取タル管轄始審裁判所ハ書面ニ依リ判定ヲ爲ス可シ
- 始審裁判所ハ必要ナリト認ムル場合ニ於テハ抗告者其他關係人ニ書面ヲ以テ答辯

セシムルコトヲ得

第六條 始審裁判所ハ抗告ノ判定書ヲ管轄治安裁判所ニ送致シ之ヲ登記官吏又ハ公證人及ヒ抗告者ニ送附セシム可シ

始審裁判所ニ於テ抗告ヲ正當ナリト判定シタルトキハ登記官吏又ハ公證人ハ其判定ニ依リ處分ヲ更正ス可シ

第七條 公證人懲罰處分ニ對シ不服アル者ハ其處分ノ翌日ヨリ起算シ七日内ニ其處分ヲ爲シタル管轄始審裁判所ニ抗告狀ヲ差出ス可シ

裁判所ハ其抗告ヲ正當ナリト認ムルトキハ速ニ其不服ノ點ヲ更正ス可シ若シ之ヲ正當ナラスト認ムルトキハ第二條ノ期日内ニ意見ヲ附シ關係書類ヲ添ヘ抗告狀ヲ管轄控訴院ニ送致ス可シ

第八條 公證人懲罰處分ニ對スル抗告ニ付テモ亦第三條ノ手續ニ依ルコトヲ得

第九條 公證人懲罰處分ニ對スル抗告狀ヲ受取タル控訴院ハ第五條ノ手續ニ從ヒ判定ヲ爲ス可シ

第十條 控訴院ハ其判定書ノ處分ヲ爲シタル始審裁判所ニ送致シ之ヲ言渡サシム可シ

控訴院ニ於テ抗告ヲ正當ナリト判定シタルトキハ處分ヲ爲シタル始審裁判所ハ其

判定ニ依リ處分ヲ更正ス可シ

第十一條 抗告ノ判定ニ對シテハ總テ上訴ヲ爲スヲ得サルモノトス

●慶應三年以前ニ動産不動産ヲ質物ニ取タル分ハ裁判

明治六年一月 布告第九號

昨壬申歲第三百十七號平民相互金穀借貸慶應二年丁卯十二月晦日以前ニ係ル者一切不及裁判旨及布告候處動産金銀衣服什物等ノ搬運スヘキ物ヲ云フ不動産土地家屋等ノ搬運スヘカラサル物ヲ云フヲ質物ニ取候分ハ右期日以前ニ係ルト雖モ取上及裁判候條此旨相違候事

●無年期ノ貸附金穀裁判期限

明治六年一月 布告第十號

金穀貸付證文ノ内返濟期限無之歟又ハ出來次第返却可致等ノ證書取置後日訴出ニ於テハ裁判申渡ヨリ十二箇月ノ内濟方可申付事

但從前今後共無年季貸付中内證屢返濟ヲ促スト雖モ滿五年ニ至ル迄一度モ不訴出者ハ裁判ニ不及候尤土地家屋等ノ貸賃ハ不動産ニ屬スル儀ニ付滿五年ヲ過ルト雖モ可及裁判事

●二十年以前ニ係ル預ケ金穀ノ訴訟ハ裁判ニ及ハス

(參照)明治五年十月布告第三百七號ヲ以テ平民相互ノ金穀借貸慶應三年丁卯十二月晦日以前ニ係ル者ハ一般裁判ニ不及明治元年戊辰正月元日以後ノ分ハ裁判ニ及候事

●明治六年第三百六十二號布告ニヨリ今後ノ貸付ニ係ルモノ消滅ス

明治十年一月
布告第十二號

預ケ金穀ノ訴訟ハ其證書中ニ封印ノ儘預リ置候歟或ハ預リ中融通使用ヲ爲サ、ル明
文アルモノハ年數ニ拘ハラヌ受理スヘキ成規ニ候處自今二十年以前ニ係ルモノハ一
切裁判不及候條此旨布告候事

●華士族平民身代限規則

明治五年六月
布告第百八十七號

今般華士族平民共身代限規則被相定候條左ノ通相違候事

但當壬申八月朔日ヨリ施行可致事

華士族平民身代限規則

平民身代限抵償トシテ差押フ可ラサル品類

一時服著替共 男女共

各二通宛

一夜具

男女共

各一通宛

一本ノ職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商業職業ニ必要ナ
ル書類器械品物等其金額五拾兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任ヌ可シ其直段ハ貸
主借主ヨリ鑑定ノ者道真屋一人宛差出シ外入札人ト共ニ入札致サセ町役人ニ於テ總

●明治五年第三百
二十七號布告ヲ以
テ取消

●明治九年第三百
八號布告ヲ以テ帶
刀ヲ禁セラル

入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ムヘキ事

一食料

家族ノ人口ヲ量リ一箇月間用ヒル飯米ヲ殘シ置ク可キ事

但男丁ハ一日ニ五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合婦女幼少ハ四合麥ハ八合雜穀ハ一
升二合宛ノ事

一鍋釜及炊具 各一通

華士族身代限抵償トシテ差押フ可ラサル品類

一家祿

但人口ヲ量リ年々飯米ヲ引殘シ其餘分無キ歟或ハ不足ノ者ハ其半高ヲ返金濟シ
迄金主ヘ渡サセ候事

一大小類

男子一人ニ付各

一腰宛

一冠服

男子一人ニ付各

一通宛

一時服著替共

男女共各

二通宛

一夜具

男女共各

一通宛

一本ノ職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品

但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等ノ職業ニ必要ナル書類及諸器械品物等其金額五

拾兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任スヘシ其直段ハ貸主借主ヨリ鑑定ノ者道具ノ類一人宛差出シ外入札人ト共ニ入札致サセ村役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ム可キ事

一鍋釜及炊具類 各 一通

右身代限りノ節ハ三十日間裁判所門前高札場並ニ本人家宅へ揭示ヲ出シ其次第傳承日限中追願ノ者ハ取組ノ上可處置事

但新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ

一前條ニ記スル所ノ引殘スヘキ必要物件ノ内未ダ代價ヲ拂ハサル分ハ賣主ヨリ日限

内訴出レハ現品ヲ取戻スコトヲ得ヘシ

但現在著用ノ衣服夜具ハ此限ニアラス

一身代限ノ物件ハ入札拂ニ出スヘシ尤金銀器等ノ定價判然タル物品ハ眞價ヨリ低ク

賣拂フヘカラス且賣拂金ノ總額ハ其者ノ負債及ヒ右一件ノ諸費用ヲ償フニ過ク可

ラス

但入札拂ノ日ヨリ三日前ニ其品物及ヒ場所時刻ヲ裁判所門前並ニ其者ノ居宅及

各地士民群集ノ所へ揭示シ及新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘ

シ且貸主借主ヨリ差出セシ鑑定ノ者モ他人ト共ニ入札致サセ村役人ニ於テ總入

●明治六年(太政官)第七十號ヲ以テ揭示日數ヲ六十日ト改メラル

札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定メ之ヲ現金ニテ取立裁判所へ差出スヘシ

●負債主身代限處分ノ時他ニ貸附アル金穀ノ證文取扱

方 明治七年九月 司法省布達第二十三號

各裁判所 各府縣

金穀ヲ借り返済ヲ爲シ能ハサル者裁判所ノ處分ニ因リ身代限ニ遭ヒ候トキ所有物ノ内他人へ貸附置キタル金穀ノ證文之レアル節ノ取扱振明治五年壬申第四十號ヲ以テ相達置候處詮議ノ次第有之左ノ通改正候條此旨相達候事

第一條 各裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ爲スニ當リ身代限ニ遭フ者ノ物件ノ内ニ身代限ニ遭フ者ヨリ他人へ貸付置キタル金穀ノ證文有之時ハ其證文ノ定期期限ノ滿未滿ヲ論セス證文ニ記名シタル負債主へ眞偽ヲ尋テ無相違時ハ其負債主ヨリ證文面ノ通り可受取旨身代限ニ遭フ者ノ債主へ申渡シ別紙離形ニ倣ヒ證文ニ裏背ヲ爲シ其債主ニ可相渡事

第二條 前條ノ場合ニ於テ債主其證文ヲ受取ルチ好マサル時ハ其證文ハ身代限ニ遭タル者ニ所持致サセ置ヘキ事

但定約滿期ノ證文ニテ負債主ノ家産些少ナルモ身代限ニ遭フ者ノ債主ニ於テ其

負債主ノ身代限ヲ以テ現金ノ割賦ヲ受度旨申立ルニ於テハ望ノ通り處分スヘキ事

第三條 債主數名ニシテ身代限ニ遭フ者ヨリ他人へ貸附置キタル金穀ノ証文一通又ハ數通ナル時ハ數名ノ債主ニ入札致サセ落札ノ金員ヲ以テ其落札シタル債主ト其
他ノ債主トへ金高ニ應シ配當シ其落札ノ証文ニハ一通毎ニ第一條ノ方法ニ依リ處
分スヘキ事

但數名ノ債主盡ク入札ヲ好マサル時ハ第二條ノ處分ニ及フヘキ事

第四條 証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取タルトキハ其
金員中ヨリ己レノ受取ヘキ金高ト之ヲ受取ニ付テノ諸入費ノ金高トヲ引去リ其餘
金ハ証文ニ記載シタル債主ニ返シ而シテ右ノ計算ヲ爲シタル明細勘定書ト餘金ヲ
返シタル受取書トヲ以テ裁判所ニ届出ヘキ事

第五條 若シ証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ントスル
ニ証文ニ記名シタル負債主モ亦身代限ニ遭ヒテ証文ニ記シタル金員ノ全部又ハ幾
部ヲ返シ能ハサルトキハ証文ニ記名シタル負債主ヨリ証文ヲ落札シタル債主ニ對
シ右ノ部分ノ金員ヲ身代持直次第返濟スヘキ旨ノ証文ノ裏書ヲ裁判所ヨリ受取ル
ヲ得ヘキ事

但此時曩ニ身代限ニ遭タル者ノ裏書証文ヲ持出ヘシ裁判所ニ於テハ之ニ金員ノ
差引ヲ記載シ二通ノ證書ヲ一綴ニシテ下附スヘシ

第六條 証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ルヘキ期限ニ
至ラサル時証文ニ記載シタル債主即チ曩ニ身代限ニ遭ヒシ人己ニ身代ヲ持直シタ
ルトキハ直ニ其人ニ對シ再ヒ金穀ノ返濟ヲ請求スルヲ得ヘキ事

証文裏書雜形

表書ノ貸主何ノ誰儀年號月日身代限中付候ニ付此証文ハ
某府縣管下某國某郡某村何ノ誰へ相渡候條此證書ノ金額ハ右何ノ誰へ濟方致候上
其段當裁判所へ可届出事

年 號 月 日

某 裁 判 所 印

●身代限財産中質入書入ノ地所アリ債主訴出サル節處

分方

明治八年四月
布告第五十三號

地所ノ質入書入ハ尋常ノ私約ト違ヒ長役場ノ帳簿ニ記載シテ奥書判印モ之レアル
公正ノ證書ニ付若シ身代限財産中質入又ハ書入ノ地所アリテ其債主揭示中ニ訴出セ

ル節ハ其地所贖賣代價ノ中ニテ債主受取ルヘキ元金高ニ贖賣金配當ノ日迄ノ利息ヲ加ヘ第一番ニ引去リ裁判所ニ於テ之ヲ糊封シ掛リ官員兩名調印ノ上戸長役場ニ預ケ置キ後日債主願出次第相渡ヘシ候條此旨布告候事

但質入書入ノ金高及ヒ利足等不分明ノ節ハ本人呼出シ取調可申事

●華族及其子弟身代限處分ニ及ヒタルトキハ華族局ヘ

通牒セシム

明治十八年十一月
司法省達丁第二十五號

始審裁判所 治安裁判所

民事裁判上ニ於テ華族及華族ノ子弟ヲ身代限處分ニ及ヒタル者有之候ハ、處分完結ノ上其旨直ニ宮内省華族局ヘ通牒可致此旨相達候事

●身代限揭示案更正 明治七年七月
布告第七十一號

明治六年五月第百八十一號布告身代限揭示案左ノ通改正候條此旨布告候事

何村町

何ノ誰

右ノ者儀何町何ノ誰ヨリ何々其事目出訴ニ及ヒ吟味ノ上身代限申付ルニ付若シ何ノ

誰ヘ係リ金穀其他諸取引ノ訴有之者ハ當何日ヨリ來ル何月何日迄日數六十日內ニ當裁判所ヘ訴出ヘシ右日限過去訴出ルニ於テハ此度身代分散金ノ分配ニハ不差加者也

●外國人ニ地所賣渡及書入等ヲ禁止ス 明治五年四月
布告第百二十四號

御國內一般地所ノ儀銘々所持ノ分タリトモ外國人ヘ對シ賣渡シ候儀ハ勿論金銀取引ノ爲メ地所又ハ地券等書入致候儀ハ決テ不相成候條末々ノ者ニ至ル迄心得違無之様各管内無遺漏可觸示事

●外國人ヘ地所家屋貸與等約定書取結方 明治七年八月
布告第八十五號

外國人ヘ家屋地所等貸渡ノ節約東上輕忽疎漏ヨリ竟ニ内外人民ノ間ニ不都合ヲ生シ候テハ自然交際ニモ差響候條自今學校其他ノタメ備入レ居留地外ヘ住居スヘキ外國人及公使館附屬書記官等ヘ貸家貸地ノ節ハ先ツ約定草案相添其管轄廳ヘ伺出許可ノ上結約可致此旨布告候事

但建物取毀賣拂ノ分幾日以内取拂ノ約定可取結賣渡ノ上ハ其旨管轄廳ヘ可届出事

●外國人雇入心得 明治十年三月
布告第二十七號

外國人傭入候節ハ左ノ通可相心得此旨布告候事

一各官廳ニ於テ外國人雇入候節ハ其國所姓名業務給料住所期限及繼備解備共其時々

外務省へ通知スヘシ

一人民ニ於テ外國人ヲ傭入ント欲スル者ハ其管轄廳ヲ經由シテ前項ノ件々外務省ニ届出ヘシ

一私傭外國人ヲ其業務等ノ都合ニヨリ居留地外へ居住爲致度者ハ地方官添書ヲ以テ外務省へ伺出其許可ヲ受クヘシ

●外國人ニ係ル民事訴訟手續

明治八年五月 司法省布達甲第三號

內國人ヨリ外國人へ係ル民事ノ訴訟手續左之通相定候條此旨布達候事

內國人原告ニテ外國人ニ係ル民事ノ訴訟ハ原告人其事由ヲ各開港開市場ノ府縣廳ニ申出其廳ノ添狀ヲ得テ被告人管轄ノ各國領事へ申訴スヘシ

●宗教上ニ關スル訴訟受理セス

明治十三年十一月 司法省伺定

別紙熊本裁判所長寺島判事ヨリ宗教上ニ關スル訴訟受理方ノ儀伺出候處右ハ元來司法裁判所ニ於テ受理スヘキ件ニ無之儀ト存候得共目今ニ在リテハ尋常民事ノ訴訟同

●明治九年司法省
甲第十三號布達
以テ民事ノ下刑事
ノ二字ヲ刪除セラ
ル

様該裁判所ニ付シ審判爲致可然歟何分ノ御裁令ヲ仰キ度訴答書類相添此段相伺候也

明治十三年八月二十日

司法卿 田中不二磨

太政大臣三條實美殿

朱書

伺ノ趣ハ受理裁判スヘキ者ニ非ラス

(別紙) 宗教上ニ關スル訴訟受理方ノ儀ニ付伺

明治十一年內務省第五十七號達ニ依リ廢寺再興伺ノ儀ニ付信徒共ヨリ宗教取締ニ對シ本山管長へ差出ス添翰願書ノ取次ヲ要メテリシカ其願書取次吳レサルトテ信徒共ニ於テ取締ヲ被告ト爲シ本山添翰拒一件ノ目安ヲ掲ケ訴出候然ルニ右一件ハ宗教取締ノ職掌ニ關カリ候得共既ニ僧徒ノ儀ハ明治七年第八號ヲ以テ一般ノ職分同様ニ可心得云々ノ公布有之ノミナラス宗教上ニ關スル訴訟事件ノ取扱方別段ノ御規則モ無之上ハ尋常民事ノ訴訟同様受理裁判致シ不苦哉否伺候條尤モ差掛リ候事件有之ニ付至急何分ノ指揮有之度候也

●非訟事件手續法

明治二十三年十月 法律第九十五號

朕非訟事件手續法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ

施行スヘキコトヲ命ス

非訟事件手續法

第一章 認可及ヒ許可ノ申請手續

第一條 民法ノ規定ニ從ヒ區裁判所ノ認可又ハ許可ヲ求ムル申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二條 前條ノ申請ニ付テハ裁判所ハ事情ニ從ヒ利害關係人ノ出頭又ハ當事者ノ自身出頭ヲ命シ公開セサル法廷ニ於テ審訊スルコトヲ得

第三條 申請ニ付テノ決定ニ對シテハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二章 失踪事件ニ關スル請求手續

第四條 失踪ノ推定、宣言又ハ財產占有其他ノ請求ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

請求ニハ其理由トスル事實ヲ表示シ且證據書類アルトキハ之ヲ添付ス可シ

第五條 前條各種ノ請求ハ之ヲ併合スルコトヲ得

第六條 失踪ノ推定又ハ宣言ノ請求ニ付テハ前二條ノ外尙ホ左ノ手續ニ從フ

裁判所ハ請求ニ表示シタル事實ヲ調査シ職權ヲ以テ失踪ノ推定又ハ宣言ヲ爲スヘ

キヤ否ヤチ定ムル爲メ證人訊問ヲ命ス可シ

證人ノ訊問及ヒ宣誓ニ付テハ忌避ノ規則ヲ除ク外民事訴訟法第二編第一章第六節ノ規定ヲ適用ス

第七條 檢事ハ證人訊問ニ立會ヒ決定前ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第八條 失踪ノ推定又ハ宣言ヲ言渡ス決定ハ裁判所ノ揭示板ニ揭示シ且官報又ハ公報ニ掲載シテ之ヲ公示ス可シ

此決定ニ對シテハ請求者又ハ檢事ヨリ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ即時抗告ヲ爲スコトヲ得失踪者ノ定置キタル總理代理人モ亦同シ

第九條 失踪事件ノ請求ニ關スル費用ハ其推定又ハ宣言ヲ言渡シタルトキハ本人ノ財產ヲ以テ之ヲ支辨シ若シ之ヲ言渡ササルトキハ請求者之ヲ負擔ス但檢事請求ヲ爲シタルトキハ本人ノ負擔トス

第三章 相續ノ限定受諾ニ關スル手續

第十條 限定受諾者ハ適法ノ期間内ニ相續財產拂盡ノ計算ヲ完了シ其計算書ヲ相續地ノ區裁判所ニ差出ス可シ

第十一條 利害關係人ハ自己ノ費用ヲ以テ區裁判所ニ計算書ノ閱覽及ヒ其謄本ノ下付ヲ求ムルコトヲ得

第十二條 法律上又ハ裁判上相續財産ヲ管理スル者ハ限定受諾者ト同シノ計算完了ノ責ニ任ス

第四章 國ニ屬スル相續財産領收ノ手續

第十三條 相續人アラサル財産アルトキハ相續地ノ地方行政官廳ハ財産所在地ノ區裁判所ニ其引渡ヲ請求ス可シ

第十四條 財産引渡ノ請求ヲ受ケタル裁判所ハ事實ヲ調査シ其請求ヲ公示ス可シ

第十五條 公示ハ左ノ諸件ヲ具備シ請求ヲ受ケタル區裁判所ノ揭示板ニ揭示シ且官報又ハ公報ニ掲載シテ之ヲ爲ス可シ

第一 被相續人ノ氏名、職業、住所、居所及ヒ死亡ノ年月日

第二 財産引渡ノ請求ノ要領

第十六條 民法ノ規定ニ從ヒ相續權ヲ有スル者ハ公示ノ日ヨリ六箇月内ニ行政官廳

ノ請求ニ對シ其請求ヲ受ケタル裁判所ニ異議ヲ申立ツルコトヲ得

第十七條 前條ノ期間内ニ異議ノ申立アラズ又ハ其中立ヲ不當ト爲ス裁判確定シタルトキハ裁判所ハ民法財産取得編第三百四十六條ノ規定ニ從ヒテ保存スル供託所

ノ金額領收證ヲ請求者タル行政官廳ニ交付ス可シ

第五章 財産ノ封印及ヒ目錄調製ノ手續

第十八條 財産ノ封印ハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リ其財産所在地ノ區裁判所

判事之ヲ爲ス

封印ニハ官印ヲ用ユ可シ

第十九條 封印ヲ爲ス可キ財産カ遠隔ノ地ニ在ルトキハ區裁判所判事ハ市町村長ニ

囑託シテ封印ヲ爲サシムルコトヲ得封印ノ除去及ヒ財産目錄ノ調製ニ付テモ亦同

シ囑託ヲ受ケタル市町村長ニ付テモ下數條ノ規定ヲ準用ス

第二十條 封印ハ證人二人立會ノ上之ヲ爲ス可シ

封印ヲ請求シタル者ハ其封印ニ立會フコトヲ得

第二十一條 封印ヲ爲シタルトキハ直チニ調書ヲ作り立會人之ニ署名捺印ス可シ若

シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ區裁判所判事共事由ヲ附記ス可シ

第二十二條 調書ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 封印ヲ請求シタル者ノ氏名、職業及ヒ住所

第二 封印ノ理由

第三 封印ヲ爲シタル場所及ヒ物

第二十三條 日用品其他封印ヲ附セサル物アルトキハ之ヲ調書ニ略記ス可シ

第二十四條 封印ヲ附シタル物ニ鎖鑰アルトキハ之ヲ閉鎖シテ封印除去ニ至ルマテ

區裁判所書記課ヲ預ル可シ

第二十五條 封印ヲ終リタルトキハ其財産ノ保管人ヲ命ス可シ但保管人ハ成年者タルコトヲ要ス

第二十六條 區裁判所判事封印ノ請求ヲ受ケタルトキハ速ニ之ヲ爲ス可シ若シ後レタルトキハ其理由ヲ調書ニ記載スルコトヲ要ス

第二十七條 封印ノ調書ハ判事ト同伴シタル書記之ヲ二通ニ作り其一通ハ區裁判所ノ書記課ニ保存シ他ノ一通ハ封印請求者又ハ保管人ニ交付シ受領證ヲ取置ク可シ

第二十八條 何人ニ限ラス區裁判所判事ヨリ封印ノ立會ヲ求メラレタル者正當ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムトキハ刑法第七十九條ニ掲ケタル刑ニ處ス

第二十九條 封印ノ除去ヲ請求スル權利ヲ有スル者左ノ如シ

第一 封印ヲ請求スル權利ヲ有スル者

第二 財産ノ管理人

第三十條 封印ノ除去ハ豫メ其日時ヲ定メ既ニ知レタル利害關係人及ヒ財産ノ管理人ニ之ヲ通知スヘシ

通知ヲ受ケテ封印除去ノ異議ヲ申立テス且除去ニ立會ハサル者ハ其除去ヲ承諾シタルモノト看做ス

第三十一條 封印ハ一箇ノ物ニ付キ之ヲ除去シ其目錄ヲ作り了リタル後ニ非サレハ次ノ物ニ付キ之ヲ除去スルコトヲ得ス

第三十二條 封印ノ除去ハ封印ヲ爲ス時ト同シク證人立會ノ上之ヲ爲ス可シ

第三十三條 左ニ記載シタル者ハ封印ノ除去ニ付キ異議ヲ申立ルコトヲ得

第一 利害關係人

第二 財産ノ管理人

第三 檢事

第三十四條 封印ヲ除去シタルトキハ第二十一條ノ規定ニ從ヒ直チニ其調書ヲ作ルヘシ

第三十五條 調書ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 封印除去ノ異議アラサリシコト又異議アリタルトキハ其異議申立ノ却下セラレ又ハ之ヲ取下ケタルコト

第二 封印ヲ爲シタルヨリ之ヲ除去スルニ至ルマテ其封印ニ何等ノ變更ヲ來サハリシコト若シ變更ヲ來セシトキハ其事情

第三十六條 封印ヲ爲シ及ヒ之ヲ除去スル費用ハ其財産ノ負擔トス

第三十七條 封印除去ノ異議ハ其封印ヲ爲シタル區裁判所ニ之ヲ申立ツ可シ

異議申立ニハ申立人ノ關係及ヒ申立ノ理由ヲ包含ス可シ
 第三十八條 異議ヲ申立テタルトキハ其申立ノ却下セラレ又ハ之ヲ取下ケタル後ニ
 非サレハ封印ノ除去ヲ爲スコトヲ得ス
 第三十九條 封印除去ノ異議ハ其除去ニ著手シタル後ハ之ヲ爲スコトヲ得ス
 第四十條 異議申立ノ裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス
 第四十一條 財産目錄ハ財産ニ封印アルトキハ其除去ノ際公證人ヲシテ之ヲ作ラシ
 ム可シ
 第四十二條 財産目錄ハ左ノ各人ヲ適法ニ呼出シ區裁判所判事ノ面前ニ於テ之ヲ作
 ル可シ
 第一 知レタル利害關係人
 第二 財産ノ管理人
 第三 檢事
 第四十三條 目錄ニハ左ノ諸件ヲ具備スヘシ
 第一 適法ニ呼出サレタル人
 第二 出席シタル者及缺席シタル者
 第三 各不動産ノ形狀

第四 動産ノ種類及ヒ數量
 第五 證書類
 第四十四條 財産目錄ニハ立會ヒタル各人署名捺印ス可シ
 第四十五條 目錄ノ調製ニ關スル費用ハ其財産ノ負擔トス